

国連は事務総長の指示で、コンゴ民主共和国およびその周辺の政情が不安定な国への平和維持軍の派遣を検討し始めた。

コンゴ民主共和国の国軍は、表向きは国連平和維持軍に対して目に見えない敵に対する仲裁を望む姿勢をとっていたが、本音では、最新鋭の武器を有する国連軍の力を使って幻の敵の正体を明らかにし、それを殲滅することを目論んでいた。ヘデン事務総長もその辺りのところは百も承知で、平和維持軍の進軍に乗じて、民間に直接救援物資を支給したり、国際赤十字本部と連携して、難民への医療の提供を行うことを考えていた。国連軍はキサングニとルブンバシ、ゴマに進軍した。大統領府は国連の行動に不満を感じた。それは東部にばかり軍を入れているためだった。国連に対してメディアを通じ、「国の中枢であるキンサシャへの攻撃に対する支援がおろそかにされている」との批難声明を発表した。国連軍はそれに対して公式見解として「コンゴの東側は戦闘地域になっている。この戦闘地域に潜んでいる反政府軍や他国籍軍が今回の挑発行為を行っている可能性が高いので、国連としては早期に問題解決を図るため、コンゴの東側を第1優先に考えて、問題組織の捜索を行うつもりである」という弁駁声明を出した。大統領府は反論できなかった。国連軍は戦闘員より救援隊の投入に重点を置いていて、このときとばかりに、各国からの支援物資を運び込んだ。当初は戦闘に疲弊し切っていた国民や民兵は国連軍の介入に反発していたが、今回の国連軍の活動が戦闘目的ではないことを知ると、次第に支援の手に頼るようになっていった。衛星ラジオの第2弾はルブンバシに対して行った。その2日前にウグングとその兵士がルブンバシの空輸会社に出向きヘリのチャーターを行った。原はウグングの指定する場所に5000台のラジオを送り付けた。ウグングと2人の兵士がヘリに乗り込み、ルブンバシ上空からラジオを投下した。その翌日ウグングはカナンガに移動し、3000台を投下した。それから少しして、原はウグングからの要請に従って、物質転送機を用いて2000台のラジオを直接小都市の上空に転送し、投下した。原は自動転送機能を働かせた。山積みされたラジオは転送機で自動スキャン、自動的にピックアップされて、コンゴ国内に次々に転送・投下さ

れていった。コンゴ国内全域に、ラジオの噂が広まっていった。それを伝え聞いた大統領補佐官や執務担当官は焦りを感じた。大統領名で騒乱罪を適用し、衛星ラジオ放送局の位置の探索と首謀者の掃討作戦を展開しようとしたが、どうしても相手の姿が見えなかった。衛星放送の電波は上空に向けて送信されていて、その指向性が強いため、周囲からの位置の割り出しが難しかった。国軍はヘリコプターで主要都市上空を探索したが、どうしても放送局を発見することは出来なかった。放送局はうまくカモフラージュされていて、上空からはその確認をすることは至難の業だった。補佐官達は衛星ラジオの放送内容を詳細に検討したが、大半は国内で流行している曲などの放送だったので、騒乱罪を適用できるものではなかった。大統領は「この程度の事態に、騒乱罪を使うなどということは、国民に対して政府が動揺しているような印象を与えかねないので、大統領令を発令することはしない」と宣言し、衛星ラジオを回収させようとする補佐官達の思惑を押さえ込んだ。大統領は自分の考えていた反乱分子の戦略を利用できそうな感触を得て、内心ほくそ笑んでいた。

コンゴに於ける国連軍の動きを知ったアフリカ各国の反応は様々だった。軍の指揮官達の大半は、たとえ平和維持の目的でも国連軍を自国内に入れることを快く思っていなかった。

ラジオの投下開始から3ヶ月が経過した頃にはコンゴ国内全域へのラジオの投下は完了していた。ウグングはラジオで放送するコメントをより現実に沿った内容に変えていった。

「*****」（コンゴに住む愛しい国民の皆さん、今この国の政治は変わりつつあります。世界中の国々からの支援が皆さんの元に届いてきています。医療施設も着実に増えてきています。リングファの支援によって、現在太陽光を使う新エネルギー発電所がコンゴ国内6カ所に同時に建設されています。そして、先週から国連とこの国の政府が共同で送電線網の構築に取り掛かりました。これまで電気の通わなかった地域に電気が通じるようになる日もそう遠い先ではありません。国連の支援軍は世界中の国々の支援部隊で構成されています。皆さんを助けるた

めにはるばる遠方より来てくださっています。支援部隊の皆さんに出会ったら、ねぎらいの言葉を掛けてください。私たちコンゴ国民は長い間、辛い人生を歩んできました。でも、ご覧ください。明るい未来がもうすぐ目の前まで来ています。私たちは賢く、やさしい大統領閣下と、たゆまない努力を重ねておられる政府の皆さんに感謝しましょう。大統領閣下のご実行になる諸施策をご覧ください。そう遠くない時期にこれまでのように、主要都市にばかりではなく、これからは各州に総合病院が建設されてゆきます。やがて、マラリヤやエイズ、そのほか恐ろしい病を怖れなくてもすむ日が来ます。そして、皆さんの仕事はこの国の豊かな資源を採掘し、精錬しそれを他国に販売してゆくことや、この土地に適した穀物、野菜や果物を栽培し、それを国中の人たちが食事に困らないように分配してゆくことになってゆきます。これらの仕事を通して、皆さんの生活は一步一步豊かになってゆきます。これまでのように、兵士になり、給与の支給も十分に受けられず、ひもじい生活を余儀なくされるような社会ではなくなります。さあ、あなたの望む社会が目の前まで来ているのです。決して自分だけのことを考えて強欲になってはいけません。か弱い子供たち、老人、女性、そして病気に苦しむ人々を労ってください。目の前に苦しんでいる人がいたら、あなたの優しい手を差し伸べてください。その優しい心が、この国を変えてゆくのです。さあ、大自然の恵みに感謝しましょう。この国を支えてくれる人々に感謝しましょう。過去に我々を奴隷として扱い、我が国の国土を自分の私有物としてのさばっていた悪人達のことは、広い心をもって、全て水に流しましょう。現在彼らが行ってくれる暖かい支援をありがたく受けましょう。愛するコンゴ国民の皆さん、さあ、幸せな明日に向かって、希望を持って生きてゆきましょう。これから、新しい世界が始まるのです。夢と希望に満ちた、新しい世界が、優しい大統領の下で始まるのです)

女性戦士の美しい声で語られる真摯な訴えは、次第にコンゴ国民の胸の内に刻まれていった。この放送は大統領にも傍受された。大統領は放送を聴いている間に、エリグを思い出した。女性戦士の声はエリグの声より低かったが、そのソフトな語り口は愛するエリグのそれだった。大統

賢は意志を固めた。

賢はインドのハーレム爆破についての殺人未遂罪と器物破損罪での起訴から逃れようがなくなった。運び屋達の証言を元に、インド政府が日本政府に対し、賢の身柄の引き渡しを要求してきたが、日本政府は物証が不十分という理由で、これを受け入れることはしなかった。賢が国内の法廷で裁かれることは不幸中の幸いであった。検察が手にしている証拠もあくまで第3者による証言に基づくものであったが、検察はインド政府からの要請を受けて、不十分な証拠でも起訴にまで持ってゆかざるを得なかった。留置所への拘留からおよそ2ヶ月して、賢は法廷に立たされることになった。どうしてわざわざ諏訪から札幌に移されたのか誰にも子細は分からなかった。第1審は北海道の地方裁判所にて行われることになった。由仁町の管轄は裁判所岩見沢支部であったが、事件が国際的な問題を含むということもあり、検察庁の意向で公判は道庁である札幌市内で開かれることになった。賢は手錠を掛けられた状態で諏訪から札幌まで連行され、札幌地方裁判所の拘置所に拘留された。拘置所は留置所より遙かに非人間的な扱いを受けるところだった。賢は自分が正常な人間として扱われていないことを面白いと思った。既に自分自身という概念が希薄になっていたのも、そのような冷たい扱いに対して、肉体としての自分がどのように反応してゆくのかに興味を覚えていた。賢は自分自身を注視し、意識を心に反映させるように潜在意識をコントロールしはじめた。

賢は独房に収監された。独房は3畳ほどの細長い部屋である。分厚いコンクリートの壁がこの部屋を一層冷たい空間にしている。気持ちの弱い者は、この壁を見ただけで悲痛な思いに苛（さいな）まれるに違いなかった。多分、1週間も居たらノイローゼになる者もいるだろう。しかし、賢は十分な瞑想時間を確保できる絶好の機会だと思った。看守は賢が失明していることに配慮して、賢の手を取りながら、いちいち備え付けの設備の説明をしてくれた。賢は看守の介助をありがたいと思ったが、説明を聞きながら同時に眉間の目を開き、看守の説明している部分を詳細

に観察した。細長い部屋は休むとき、身体を常に長手方向に横たえるしかない。それでもカプセルホテルのベッドよりましだと賢は思った。自分が起居できるのは2畳半ほどのスペースで、かなり小さめの畳が3枚敷かれた空間である。部屋の奥には洗面所と洋式の水洗トイレがあるが、トイレに扉はなく、1メートル角ほどの、手作業で作ったらしい木製の衝立が立て掛けてある。廊下からは見えないようになっているのがせめてもの救いだ。勿論鏡などは附いていない。監視に訊いて蛇口をひねってみると身を切るような冷たい水が出てきた。お湯は供給されていないようだ。しかし、拘置所内は空調されていて、寒さは感じなかった。下着を洗ったり、身体を拭ったりすることも禁止されていた。賢はこの環境をそれほど苦痛には感じなかった。たとえ狭くても、瞑想に身を委ねられるであろうことに感謝した。布団や毛布が無造作に畳まれて、畳の上に積み上げてある。就寝時間になり布団を敷くと畳はそれで一杯になってしまいそうである。しかし、物理的な狭さにはメリットもある。寝たままタオルにも、ゴミ箱にも、何にでも手が届く。賢は「これはこれで便利なものだ」と思った。賢にとって、現象界の空間の広さは意味のないことだった。人間は休むときにはこの程度の空間があれば十分なのだ。現代を生きる人々の部屋には余分な空間とそこにある雑物が多すぎる。だから自分と自分の周りの空間との一体性を見失ってしまっているのだろう。認識力を研ぎ澄ました人間が、狭い空間の中に押し込められると、必然的に、自己と空間が一つだということに気付いてゆく。狭い空間の中に大勢の人たちが居れば、自分が拒否しない限り、他者と自己との境界が薄れてゆく。ここはそういう状態を体験できる場所だった。もともと、周囲には誰も居ない。

拘置所は留置所と同様、自殺を防止するために過剰なほどの神経が使われていた。あらゆる紐の類いは取り除かれていたし、部屋に備品として置かれているハンガーもプラスチック製で、細工が出来ないように下部を切り落としてある。壁に作り付けの二段の木の棚板も、端が削ぎ落とされていて、紐を引っ掛けられないようになっていた。タオル掛けや布巾掛けも力を入れれば直ぐに壊れてしまうほどの非常にもろい作りに

なっている。

「こんなものででも首をくくろうとした者がいたのだろうか？」

賢はふと思った。一通りの説明を終えると看守は去った。

賢はここにいると自然に瞑想状態に入ってしまうことに、一種の悦びすら覚えてきた。週に2日使うことができる狭い一人用の風呂は、入浴している間、透明ガラスの扉の向こうから常に看守に監視されていたし、シャワーホースは、フックが取り外されていて、だらりと垂れ下がっていた。入浴時に渡されるプラスチック製のひげ剃りも、使っている間中看守がじっと注視していて、髭を剃り終わると、直ぐに入って来て取り上げてしまう。自殺を防ごうとする看守達の努力がそこまで徹底していることを知り、いかに多くの者が自殺を試みたかが自ずと知れた。

独房に連れて来られたばかりの時、賢は部屋のあちこちに強い念を感じた。それは幽界から来ているらしいと直感的に分かった。

賢はひととき瞑目し、意識を室内に浮遊している念に向け、同調してみた。この独房で生きてきた人々の姿を眉間に投影してみることにした。その映像を見る限り、自殺を防止しようとする看守達の執拗な努力も領けた。

一つの映像は発狂寸前の男だった。布巾掛けをむしり取り、それで心臓を突こうとしたり、ハンガーで首を括ろうとしている姿が見えた。大勢の看守達に取り押さえられて、別の部屋に連行されてゆく。

また別の映像が眉間に展開した。若い男だ。何かわめき散らしている。言葉を聞き取ってみた。「俺は何もしていない。俺は無実だ。一寸万引きただけじゃないか、そんなことは誰だってやってる。なぜ、俺だけ捕まえるんだ。俺は罠にはめられた。お前達、今に見ていろ、俺は死んだ後、お前達のところに化けて出てやる。必ず怨みを晴らしてみせる。覚えておけ！おい、俺の女房はどうなったんだ。何だと？死んでしまったってえのか？あいつらが殺ったんだ。俺が女房を殺すなんてことがあるわけではない。あいつは俺にぞっこんだったんだ。覚えておけ、おれは死刑になったあと、あいつらのところに化けて出て、あいつらを呪い殺してやる」

「静かにしろ！黙ってそこに座れ！早く座れ！そんなに騒ぎたけりゃ、今ここから出してやる。だがな、今度は身体も動かさないぞ」

食事の授受をする窓口から顔を覗かせて怒鳴る看守の声に、男が静かになって座ると5、6人の看守がなだれ込んで来て、男を取り押さえた。男はこの部屋から引きずり出されてゆく。男の顔面は蒼白で、真っ赤になった目から涙が流れている」

次に静かに坐っている男の姿が眉間に映った。男は寡黙だが頭頂の周囲を褐色の想念のオーラが激流のごとく流れている。男は自分の行ってしまったことを頭の中で繰り返し、繰り返し思い返しているようだ。門構えが立派で、周囲を煉瓦の塀で覆われた大金持ちの家の留守を狙って忍び込んだ。2階の寝室に忍び込み、そこでドレッサーの引き出しから宝石や腕時計など、めぼしい物を物色した。誰も居ないはずの家だった。盗んだ物を袋に詰めて、急いで寝室から外に出ようとしたとき、部屋に入って来る家政婦とぶつかった。家政婦は驚いてその場に尻餅を突き、目を大きく見開いて、いきなり「きゃー」と叫んだ。それから、唇を震えさせ、今にも大声で喚き出すと思われた。男は家政婦を押さえ込んで、口を手で塞いだ。家政婦は暴れた。男は必死に家政婦の首を閉めた。家政婦の首がガクッと折れたとき、男は我に返った。家政婦は夫を癌で亡くし、必死になって一人の幼い娘を育てている女性だった。家賃を支払うと、月に2万円ほどしか手元に残らなかった。それで食費から光熱費まで全てまかなわなくてはならなかった。女性は貧しい生活の中でも、毎月1000円ずつユニセフに募金を行っていた。「自分達よりもっと酷い生活をしている人たちがいる」と言っていたと弁護士の口から聞いた。その話を聞いて涙が流れた。己の行いにヘドが出た。いくら悔やんでも悔やみきれない。残された子供のことが気掛かりだった。しかし、「自分にはそんなことを心配することすら許されない」と自分を責めていた。男は罪滅ぼしに子供を助けることさえできない自分自身を嫌悪していた。部屋の中に自分の命を絶てる材料を探した。鉄格子は太く、頑丈すぎてどうすることもできない。衝立には釘が使われていない。辺りを見回したが、ハンガーも棚も布巾掛けや便器も命を絶つ役には立ちそ

うにない。心臓を刺そうにも鋭器が見つからなかった。男はふと洗面台に目を向けた。シャワーのホースがある。「そうだこれを使おう」・・男はホースをくゆらせて輪を作った。輪は出来たが、頭が通らない。男はホースを直接首に巻き付けハンドルの先を首の後ろでホースに引っかけた。何とか届いた。男は目を瞑り、いきなり足を腹に当てるように縮めた。ぱりっと音がして、シャワーのホースが根元からちぎり取れた。男はその場にひっくり返り、ホースが抜け落ちた壁の給水口から水が噴き出してきた。男は気力を失って水の中に座り込んだまま呆然としていた。看守達が大声で喚きながら部屋の中になだれ込んで来た。

賢はもうそれ以上映像を見る気がしなくなり、幽界との同調を切った。空間に残っている幽界から伸びている思念のかけらを振り払い、ビジュアル化させるために辿った想念を遠ざけた。賢は意識を廊下に沿って並んでいる反対側の房に向けた。どうやら、鉄格子の向こうには、独房の他に雑居房もあるようだった。どれほど多くの魂が、この空間で苦悶の中に居たことか。そう考えると賢の目に涙が浮かんできた。罪のある無しは賢には関係のないことだった。少なくともここに連れて来られた人間は、せつかく地上に生を受けるという幸運に恵まれていながら、社会で正常と謂われる人間達の作った法律という規則に従って、この社会に生きることに對してさえ疑問符を付けられ、場合によっては否定されているのだ。そして、鉄格子のある狭い部屋に押し込められて、存在する空間を制限されている。瞑想を知らない者達は拘置所の中で何かを得ることができるのだろうか？

賢は拘置所に入ると接見禁止となり、看守以外の一切の人間とのコミュニケーションを絶たれた。再び来日していた両親でさえも面会は許されなかった。

賢の私設弁護士は敗北感にさいなまれていた。何とか起訴だけは免れようと努力し続けた。しかし、検察はインド政府からの圧力に屈したのだった。インド政府がハーレムの主の激しい復讐心に翻弄されていることは明白だった。弁護士は物的証拠が無いことで、起訴はできないと考え、油断していたことを悔やんでいた。

第1回の公判は賢の身元確認と、罪状認否が主な内容だった。公判には賢の両親、梓、愛子、原、数馬と原友昭研究会の面々、内観システムズ関係者の他、賢を崇敬している多くの者達が面会を希望して集まり、札幌大通公園の前には市役所辺りからの長い列が出来ていた。雪祭りも終わり、急に人影がまばらになった大通公園は、再び沢山の人々で埋め尽くされた。あちこちに賢に命を救われた者達の姿があった。公判の当日は、賢が逮捕された時を遙かに上回るデモ隊が編成され、札幌駅から大通公園を経て、すすき野辺りまで札幌市内を練り歩いた。賢は看守からくどいほど注意を受けた。「裁判中に、決して傍聴の人たちに合図したり、声を掛けたりしてはならない」というのである。たとえ目と目が合って、心配しないようにとの心から会釈をただけでも、そのような行為が何か証拠を隠蔽したりする行為に当たる場合があるというのだ。これは賢にとっては辛いことであった。優しい心を持った者達の気遣いをも遮断しようというのである。実際傍聴に来た者達は皆、賢に励ましの言葉を掛けたいと思っていた。しかし、傍聴受付の係官が傍聴者達に、賢への直接的なアプローチを控えるように伝えていた。梓も愛子も、感情の起伏に揺れ動いている康子でさえも、唇をキッと結んで、賢に駆け寄ることは勿論、凝視することさえ控えた。賢は訪れた親しい者達に、感謝の気持ちを伝えるために、テレパシーを送った。

「みんな、僕の為に、はるばる来てくれて、ありがとう。みんなが僕を救おうと努力してくれていることはよく分かっている。ありがとう。心配掛けて本当にすまない。だけど、僕は大丈夫だから、安心してくれ」賢の声は出席者達の心の底に響いた。

公判は午前11時に始まった。初めに裁判長の開廷宣言があり、続いて賢に対して人定質問が行われた。賢が被告席に立つと康子が嗚咽を發し、裁判長に制された。賢は裁判長の指示に従って、この世界の自分を特定する属性情報、すなわち本籍や住所、氏名、年齢、職業を応えた。そこで、検察官による起訴状の朗読が行われた。

「被告は、インド人であるチダピオン・パジガリオがインドの国内法によって殺人未遂罪で有罪判決を受け収監される2年前に、チダピオン・

パジガリオからインドの大手企業の社長であるブルドリキン・チュダンビランの殺害について相談を受け、ブルドリキン・チュダンビランの殺害とその所有するビルを破壊する意志を固め、その行為に必要な費用をチタピオン・パジガリオに手渡し、去る20X7年XX月XX日にビルの爆破と殺害を目的とした暴徒の乱入を行うことを指揮したものである。チタピオン・パジガリオは友人ヴィシヤール・カハタワラからブルドリキン・チュダンビランの殺害について相談を受けた。当時ヴィシヤール・カハタワラはTUTU社から購入した自家用車を運転していて人身事故を起こしていたが、原因を、TUTU社の販売する車の欠陥によるものだと勝手に断定し、TUTU社に対する訴状をインドの司法局に提出した。しかし、インド警察の調査の結果、車に欠陥は見いだされなかった為、ヴィシヤール・カハタワラの訴えは却下された。訴状が却下されたことを怨みに思ったヴィシヤール・カハタワラはチタピオン・パジガリオに相談した。チタピオン・パジガリオは正義感の強い性格であり、インド国内に蔓延している人身売買や売春犯罪を正そうとの思いが強かったため、当時日本でブルドリキン・チュダンビランの行っていた、日本に於けるTUTU商事の人材獲得のための勧誘や、女性従業員に対してブルドリキン・チュダンビラン自身が個人所有するビルを女子社員寮として提供している行為を、未確認なまま人身売買、売春など犯罪行為と決めつけて、その元凶であるとするブルドリキン・チュダンビランを殺害する意志を固めた。それにより同時にヴィシヤール・カハタワラの怨みを晴らすことができると考えた。その上、チタピオン・パジガリオはブルドリキン・チュダンビランの裕福な生活に対して貧民の搾取者という概念を持っていた為、カルカッタでのビルの爆破とブルドリキン・チュダンビランの殺害の決意を固めた。計画を実行する段階で、多額の資金が必要なことと、インド国内での爆破、殺害計画の漏洩を恐れ、知人達のいる日本に渡航して支援を求めることを決めた。日本に於いて友人と相談を重ねている間に、友人の一人で当時花巻の人材派遣社員であった鹿島康介から被告のことを紹介され、被告に対してブルドリキン・チュダンビランの行為を婦女誘拐、売春行為である

と針小棒大に説明し、ブルドリキン・チュダンビランを人類の敵と決めつけて、殺害の意図をほのめかし、資金的な協力を要請した。被告はその慈善的な性格の持ち主故に、非人道的な行為を許せなかったので、ブルドリキン・チュダンビランの私有財産であるビルの破壊に同意し、チダピオン・パジガリオがそのビルで行われていると説明する売春行為を強制的に制止し、遊女達を解放しようと考え、かつ同時にブルドリキン・チュダンビランが行っていたとチダピオン・パジガリオから説明を受けた人身売買や売春行為を根絶しようとして、そのビルの住人でもあったブルドリキン・チュダンビランの殺害計画にも共鳴し、ビルの爆破と、暴力集団によるブルドリキン・チュダンビランの殺害を実行させることに同意した。被告はチダピオン・パジガリオの要求に応じて資金を用意したものである。被告の拠出した資金によりチダピオン・パジガリオは浮浪者や暴力団を雇い、去る20X7年XX月XX日にインドのカルカッタにて、ブルドリキン・チュダンビランのビルの破壊を実行し、ブルドリキン・チュダンビランの殺害を謀ったが、ビルは完全な崩壊には至らず、ブルドリキン・チュダンビランは殺害を免れた。被告が第三者に人を雇わせ殺人および器物損壊の行為を実行させたことは刑法201条の殺人予備罪および刑法261条の器物損壊罪に当たるものがあります」

検察官の朗読は回りくどい言い回しだったが、立て板に水を流したような早口の訴状の読み上げに、裁判当事者のみでなく傍聴人達も全文を聞き漏らすまいとして意識を集中した。裁判長は賢に対して、黙秘権を駆使することは裁判に何ら影響を与えない旨を説明してから、この訴状の内容を認めるかどうか賢に糾した。賢は内心「上手く作文したものだ」と感心した。訴状の中にあったチダピオンが収監されている事実を知って何とかしなくてはならないと思った。

「裁判長、わたくしはビルの爆破を計画したことは認めますが、殺人の意図はもとより、人を傷つける意図は全くありませんでした。それは20X7年XX月XX日に福岡で誘拐され行方不明になり、あちこち盥回しにされたあげく、あのビルに幽閉されていたわたくしの友人崎野祐子

を救い出すことが目的でした」

この事実をはじめて耳にしたものも多かった。賢は今なら、真実を話すことで、祐子に迷惑が及ぶことはないと判断したのだった。

賢の被告人陳述に続いて、検察側からの証拠提出が行われた。しかし、証拠などあろうはずもなかった。検察はインド政府が送付してよこしたチダピオン・パジガリオの自白の内容を証拠として日本の司法局に提出していたのだった。検察官はそれを日本語訳した文章を読み上げた。その内容が事実と異なることは明白であったが、弁護側は確たる証拠を持って論駁することができず、検察の陳述が事実無根である事を述べるに留まった。弁護団は賢が資金提供を行ったとする証拠を提出するように検察側に求めた。ここで審理は中断され、次回に持ち越されることになった。

その後も審理は続いた。賢のこれまでの人命救助の功績は情状酌量の要件として裁判官達の斟酌事項になったが、逮捕される前に砲撃を受けて重傷を負い、留置所内で毒を盛られて失明したことは逆に、何か怨みを買うようなことがあるのだろうかという憶測を生む結果になった。賢はあくまでチダピオン・パジガリオの自白は事実と異なり、自分がビルを爆破しようとしたことだけが事実でそれ以外は全て間違えていると主張し続けた。賢も弁護団も梓からの金銭供与を単なる借財であったと述べ、以前からの友人である鹿島からはチダピオン・パジガリオを友人として紹介されただけだということ強く主張した。賢は梓と鹿島康介に罪が及ばないようにすることに全力を傾注した。

裁判は継続され遂に検察の論告求刑に至った。検察は賢に懲役15年の刑を科すように求めた。弁護側は検察の提出した証拠の不確実さ、物的証拠の欠如、賢のこれまでの慈善行為の事実、その慈善行為を妨害しようとする組織による賢に対する攻撃や、トリックによる冤罪工作などの疑惑を並べ立て、賢の無罪を主張した。賢は裁判長の指示に従って被告人陳述を述べた。

「裁判長、たとえそれが僕の大切な人である崎野祐子を救い出すためだったとしても、僕が一人で、カルカッタにあるビルを爆破することを計

画した事実は間違いの無いことです。あのときは婦女誘拐組織から崎野祐子を救い出す手段として、彼女が捕らわれていたビルを爆破する以外の方法が無かったためです」

賢はもうこれ以上争うことを好まなかった。

結審の日、札幌地方裁判所の周囲には5万人を越えるデモ隊が押し寄せた。この裁判は全国に放送されていて、興味半分に集まった野次馬的な者もいたが、その大半は、裁判の内容より、賢を救い出したいという熱意にかられて、全国から集まった者達だった。

裁判長によって判決文が読み上げられた。

「被告は誘拐された自分のフィアンセである崎野祐子を救い出すため、インドのカルカッタにあるブルドリキン・チュダンビルンが所有し、そこに住まいしているビルの破壊を計画し、資金を準備し、友人から紹介されたインド人チダピオン・パジガリオと図って、複数のインド人を雇いその計画を実行に移した。その結果、ビルの一部が崩壊したが死者・負傷者は発生しなかった。被告のこれらの行為により具体的な人的被害は無かったものの、ビル破壊の計画を立案した時点で多くの人々の命が危険に晒されることは容易に推察されうるものであり、たとえ被害を最小限に抑えようと意図したとしても、被告が被害者の死の危険性を意識しなかったとは認められない。これらの行為は殺人予備罪および器物損壊罪に該当するものであると認めざるを得ない。よって、刑法201条および刑法261条に則り、これまでの被告の人命救助などの慈善行為を斟酌し、被告を懲役5年3ヶ月の実刑判決に処すものとする」

最終的に検察側、弁護側とも物証を示すことができなかったが、インド政府の提出しているチダピオン・パジガリオの自白内容と、検察が探し出した梓の定期預金引き出し記録だけが決め手となった。賢は上告する権利を放棄した。弁護人達や、賢の両親、梓や愛子など身内の者達は全員が、何故賢が上告を拒否したのか納得できなかった。弁護士は両親や梓達に対して、上告すれば勝てる公算が大だと執拗に説明していた。全員が賢の決断を理解できず、ただ呆然としていた。梓や愛子は悲しみの波に飲み込まれてしまった。判決の日、康子は傍聴席に姿を顕さなかつ

た。

賢の刑が確定し、賢は網走刑務所に収監された。網走刑務所は比較的刑の軽い者達が収監される刑務所である。5年3ヶ月の刑は網走刑務所の中では重罪の部類に入る。賢は何故に自分がこのような場所に収監されるのかを客観視してみた。明らかにインド政府に対する日本の司法局の抗議姿勢であると思われた。刑務所の部屋は近代的で、小テーブルやテレビなどもあり留置所や拘置所に比べ、居心地の良いものだった。賢は5年3ヶ月の間どのように生きるべきかと考えた。昼間は労働が課されるが、夜は労働から解放される。「この時間帯に祐子の計画を援助したり、試行プロジェクトを確認し、更には家族の様子をも伺おう」と考えた。しかし、賢は家族の元へのテレポーテーションは極力行わない決心をしていた。

賢は視覚障害者として扱われた。同じ刑務所に収監されている受刑者が賢やその他の障害者の世話を担当しているようだった。賢は目が見えないだけだったので自分の面倒を見てくれる受刑者に話し掛けてみた。

「僕は、あなたにこんな風に面倒を見て頂いて、感謝しています。あなたのおかげで快適な刑務所生活を送れます。お陰様で、ここの生活を思ったほど大変じゃないと感じることができます」

受刑者は言った。

「そんなことはありませんよ。刑務所の中では、自分自身が無くなっているんですよ。誰かが馬鹿をやったりすると、大声で笑ってしまうことがあるんですが、笑ったあとで凄く空しくなるんです。本心から笑えることなんて、絶対にありませんからね。まあそれも、すべて自分の撒いた種ですけど……僕は、ここの受刑者にはまったく表情が無いと思うんです。だから、もっと受刑者に自由を与えて、刑務所の中でも笑顔で暮らせるようにすべきだと思います。その方が自分のやってしまったことを反省しやすいと思うのです。ここでは刑務官の考え方や刑務所の規則が受刑者を枠にはめて管理しているんです。収監されることで奪われる自由より、管理下に置かれて奪われる自由の方がよほど堪えます。だけど、その事で受刑者が守られていることも事実ですけどね。ど

んな凶悪な人間も暴力を振るったり、精神的な圧迫を与えたりできないように、完全に監視されていますから。もめごとがあれば、すぐに刑務官が治めてくれるんです。貧富の差は無いし、地位も関係ありません。だけど、ここでは受刑者は、徐々に木偶人形のようになっていきます。現場の刑務官が受刑者の仮釈放を認めるとか、懲罰を与えるとかがといった権限を握っているんです。受刑者は、刑務官の言うことに従順であれば模範囚とされますが、反発したり、言うことに従わなかったりすれば懲罰を与えられます。模範囚になれば、仮釈放の時期が早くなります。反省していることを言葉や態度で示し続けることが求められるのです。僕は、受刑者の反省って、反省じゃないって思うんです。ここでは、刑務官に従順になるということが反省なんです。そうは思いませんか、反省しているふりをしているだけで、刑務所当局はそれを「反省の態度」と認識しているんですよ。刑務官の差し出す用紙に、すらすら反省文を書く受刑者を見て、「反省が進んでいる」と受け取っているのです。僕は反省文を書けと言われても簡単には書けません。何が悪かったのか、自分のどこが悪かったのか、どうすれば正しい自分になるのか、考えれば考えるほど分からなくなるのです。僕は強盗傷害でここに服役していますが、僕が財布を奪い、傷を負わせてしまった相手はずいぶん、いろいろな人を苦しめていた奴なんです。そいつの持っていた金も、人を騙して手に入れた金なんです。勿論誰にも分からないようにですけどね。僕はそれを知っていましたから、そいつを苦しめてやろうとしたんです。自分の考えの何処から何処までが間違っていたのか分からないんです。自分の行った行為が、一時の感情から生まれたのか、ずっとあいつのことを恨んでいたのか、あいつのことを毛嫌いしていたのか、自分でも分からないのです。だから筆が進まずに頭の中がぐるぐる回りをしてしまうのです。あの時、相手を傷つけてしまったことは確かにいけないことでした。だけど、あいつは僕をののしり、僕を押し倒そうとしたんです。僕は咄嗟に自分の身をかばい、相手を殴り飛ばしてしまいました。その行為について自分を責めました。犯した罪を恥じました。でも、その事だけは反省できましたが、それ以上の反省を迫られると、頭がおかしく

なってしまうようになります」

看守が飛んできた。賢と賢の面倒をみてくれていた受刑者はひどく罵声を浴びせられた。

「ばかやろう、何度言われれば分かるんだ。必要なこと以外話すなど言っただろう」

「は、はい、先生」

面倒をみてくれている受刑者はシュンとしてしまった。

賢は刑務所の中の受刑者達が、刑務官の意識の作った枠の中で生きることを強要されていることを知った。昼間は意識の目を使うことは止め、視力障害者に徹することにした。模範囚になることに決めた。反省するように言われたときは素直に反省した。言われたから反省している振りをするのではなく、自分のこれまでの行為について寧ろ自分の意識の中に純粋性が不足していた部分を積極的に見つけるようにし、自我の現れている部分について反省を行うように努めた。そして反省した内容を刑務官に話した。刑務官は賢の罪状を認識していたので、賢の反省内容が複雑なことにも理解を示した。検察官にとって賢の反省している内容はあまり重要ではなかった。反省していること自体が重要なようだった。賢は与えられた「ねじを締める仕事」を淡々と行った。来る日も、来る日もねじを締め続けた。その単調な作業の時間は賢にとって、非常に充実した瞑想の時間だった。賢は夕方になると祐子からの通信を待った。通信の無い日も計画を立てて行動した。月曜日は夜、諏訪中郷町を訪れた。あまり明確なことは判断できなかったが、それでも病院や24時間運営のスーパー、コンビニなどでプロジェクトの進捗状況を確認した。毎週火曜の夜半に数馬と原が意図的に開催し始めたプロジェクト進捗会議にもバイロケーションで出席した。何時もその会議には数馬と原のふたりだけしか出席していなかった。水曜日から金曜日までは意識を拡大し、全世界の貧困者や病人、戦闘地区を探索して訪れた。あるときは物資の支援を行い、あるときは病人を救済し、あるときは戦闘の仲裁に入った。それは時空間を越えた行動だった。それを見た人々は、賢に畏れを抱き、感動を覚えるのだった。大勢の人々が集まっている場所に出

掛け、奇跡的な行為を見せた後で講演を行うこともあった。賢は刑務所外で行動する際は必ず変装することを忘れなかった。賢の行動はその都度ニュースに取り上げられた。賢を崇敬している人々は、それが賢の仕業である事をうすうす感付いてはいたが、賢が網走刑務所に服役中である事から、それを口にする者はいなかった。賢は時間の許す限り人々の救済に努めた。その所為で刑務所の部屋に戻ったときは、極度の疲労感を感じ、意識をフォローできなくなるほど寝入ってしまうこともしばしばあった。賢は昼間は黙々とねじを締め続けた。夜間はそれほど頻繁にバイロケーションやテレポーテーションを行ったにもかかわらず、由仁の家にテレポーテーションすることだけはしなかった。由仁に姿を顕すのはまずいと考えていた。梓もそれを承知していて、テレパシーでそれを賢に尋ねるようなこともしなかった。それをすると受刑している意味が無くなるためだった。梓は賢との面会が唯一の悦びだった。

康子、ゆき、竹下、浮石、亮子、その他命を救った多くの人々、一度も会ったことのない人々、賢はいろいろな人たちから手紙を受け取っていた。賢はその1通1通に丁寧な返信をしていた。賢にとって手紙を受け取ることは1つの苦しみでもあった。手紙の文言の中に必ず出てくる悲しみの言葉が、賢の心を大きく揺さぶった。自分の身に起こったことが人を苦しめていることに対して、申し訳ないという心が湧き、自責の念に嘖まれた。賢は返信には必ず自分の犯した罪のために悲しませてしまったことを詫げる言葉を添えた。康子は週に1度、ゆきは月に1度手紙をくれた。康子の手紙は賢への恋慕の情を募らせたものだった。賢は優しい言葉でできるだけ康子を労るようにした。ゆきの手紙は賢に1つの楽しみを与えてくれた。手紙には太郎と信次の成長の記録が記されていた。ゆきは賢の出所の時は必ず家族全員で出迎えると言っていた。時にはゆきの両親や二人の弟の手紙も添えられていた。由美からの手紙は無かった。時々テレパシーが届いた。賢の身体のこと、視力を失ってしまったことを心配していたが、有罪判決を受けて服役していることについては、それほど悲しみの感情を抱いていないようだった。ゆっくり休養した方がいいとまで言っていた。賢の両親は月に1度面会に来た。母

は賢の姿を見ると決まって、感情が高ぶり監視官の目の前で涙を流した。賢にとってはこの面会が最もつらいものだった。母は面会のたびに音楽プレーヤやラジオなどいろいろな物を持参したが、殆どが差し入れを認められなかった。母は日本の刑務所をアメリカの刑務所のようなイメージで捉えていて、何度拒否されても、訪れるたびにいろいろな物を買って来るのだった。父はそんな母の行為を無駄だと知りながらも、黙って見ているようだった。賢はこれだけ多くの人々が自分のことを心配してくれていることを思うと、感謝の念に堪えなかった。

祐子は時々ウグングからの手紙を受け取っていた。手紙には最近の状況が克明に記されていた。コンゴの変革は軌道に乗りはじめた。政府は国連平和維持軍の活動に同期してきた。各省が自己保身の殻を脱ぎ捨て、国民の声に耳を傾けはじめた。どの省にも国民救済担当が置かれた。ウグングは衛星放送の番組の中で、政府の行いはじめた国民救済活動に焦点を当て、賞賛しはじめた。この国の長である大統領を「世界一の大統領だ」と賞賛した。国民の生の声を録音し、それを国内各地に放送した。多少の誇張を含んでいたが、その放送の内容を後追いするように、各省は真剣に国民のことを考えるようになっていった。ピグミー達の住んでいる森林地帯や原住民の居住する地域は保護区として、一般人の立ち入りを制限するような政策が採られた。しかし、彼らと一般国民との交易には自由度を与え、保護区に対する医療や食料の支援のあり方を具体的に検討し始めていた。1年が経過する頃にはコンゴはすっかり改革路線を走り始めていた。レンガファや国連の協力によってインフラの整備も破竹の勢いで進んで行った。それは中国が古い共産主義体制のコートを脱いだ時のスピードをしのぐものだった。国連平和軍とコンゴ国軍の連合軍の力によりコンゴの資源を食い物にしてきた周辺各国はコンゴからの撤退を余儀なくされていった。コンゴ政府は自国の産業の復興に力を注いだ。多くの人間が雇われ、それに連れて国民の生活も向上していった。これまで、政府軍や反乱軍に身を寄せていた国民の多くは、そこを辞め、新しい仕事にその生き甲斐を見出すようになった。

一旦国内が安定してくるとコンゴの国力は見る見る増していった。大統領が国連で演説を行った。コンゴの変貌をアフリカ各国、そして全世界に伝えた。世界中のメディアが大統領の演説を取り上げて報道した。世界各国がコンゴの変革ぶりに注目した。自国経済の低迷と、政府方針の危うさに恐々としていた先進各国の企業がコンゴへの投資に乗り出した。しかし、コンゴ政府はこれまでのように他国に蹂躪されることのないように厳重な体制を敷いた。他国からの直接投資は拒否し、政府の設立した開発公社に全ての外資による投資を管理させた。アフリカの共和主義各国の間に焦燥感が生まれてきた。コンゴでの変革を目の当たりにし、耳にした国民達の間には「アフリカの曙」というキャッチフレーズが口にされはじめた。コンゴはアフリカ中の国々の注目を浴びはじめた。

「祐子、実は俺は今、網走刑務所に服役中なんだ」

「あなた、わたしが何も知らないと思っていたの？」

「えっ？ どうして知っているんだ？」

「私たちはひとつなのよ。分からない訳ないでしょう」

「そうか、お前にも俺の状態が分かるのか？俺が失明していることも知っていたのか？」

「勿論よ。わたしはあなたでしょう？あなたはわたしのよ」

「いつからだ？」

「そうね、コンゴから戻って、あなたに抱かれたときからかしら？いいえ、もっと前ね、多分亜紀が亡くなったとき、いいえもっと前、確か、わたしがクツの首長の家に行って、そう、天に舞い上がってからだわ。あれは自分の力じゃなかった。あなたの方だったのね。わたしは自分が空中浮揚みたいなことはできないって思っていたのに、あんなことになったでしょう。あれから、何でも自分の意志の通りになることに気付いたのよ。確信は持てなかったけど、何でもできるって思ったわ」

「それじゃ、もうテレポーテーションもできるのか？」

「ええ、多分できるような気がする」

「本当か？それは凄い。俺たちは空間を越えて生きることができるな」

「空間だけじゃないわ。時間も、物質も、宇宙全体が自分の中にあるん

だから、全て思うとおりになるわ」

「瞑想しなくてもできるのか？」

「瞑想って謂うのは目を瞑って思考を止めて、自己想起することでしょう？それは必要ないわ。だって、自分がそれなんだもの。何もしなくてもそのままそれなのよ」

「祐子、そのとおりで。ところで、スバハは元気か？言わなかったけど俺にも利他という娘が生まれたんだ。実刑判決を受ける前だけだ」

「それも、知っているわ。利他はスバハの妹ね。ねえ、あなた」

二人は抱き合った。

「祐子、亜紀を呼び戻そう。そして、一緒に生きよう」

祐子は賢の胸の中で呟くように応えた。

「わたしもそうしたいわ。でも、わたしにはできない。あなたならできるかも知れないわね、亜紀を生き返らせること」

「亜紀の骸は細菌の侵入を防ぐ特殊な棺に納めて、札幌近郊の由仁町にある我々の会社の工場の地下に安置してある。俺の刑は5年3ヶ月。今1年と1ヶ月が経過しただろう。あと2年と2ヶ月だな」

「あと4年と2ヶ月でしょう？」

「いや、あと2年だ。そう決めた」

「そうなの？じゃ、わたしは2年以内にアフリカ全体の改革に目処を付けるわ。そしてね、あなたと、あなたの家族と、わたしと、わたしの家族と、亜紀で一緒に山に入りましょう。自然の中で、与えられたこの世界での命を生きましょう。そうしなくてはいけないような気がするのよ。もうこれ以上人々の生に介入しすぎてはいけないような気がするの。今は大切なときだわ。私たちには、この世界が変化するようにその導火線に火を付ける役目があると思うわ。あなたの人間の精神を変革させるプロジェクトが完了して、わたしが人々のこの世界での生き方の方向付けを終え、亜紀が霊界にいる人々に本当の世界の姿を教える道筋を作り終えたら、以前のように一緒に生きましょう。今度は自然の中で、虫と戯れ、蝶と踊り、鳥と唄い、水に遊び、空に溶けて生きましょう。本当はそれがこの世界ですることなんじゃない？」

「うんそうだな。亜紀は俺が刑務所に収監されている間にこの世界に呼び戻すよ。本当はね、亜紀はこの現象界に降りて来る為にはあまりにも多くの犠牲を払わなくてはならないんだ。でも、亜紀はそれを望んでいる。亜紀は俺たちとひとつなんだ。だから、霊界から呼びもどして欲しいんだ。これからは何時も3人一緒に居よう」

賢と祐子は再び強く抱き合った。至福が二人の心と体を包み込んだ。ふたりの身体は溶けてひとつになり、心も、意識もひとつになった。肉体的な結合で得られる歓喜を遙かに超えていた。

祐子はハッと気付いた。自分が事務所の椅子の背もたれに身を預けて、眠り込んでいたことに気付いた。

賢もハッと気付いた。独房の狭い布団の中で心地よい眠りから目を覚ました。

「夢か！いや現実かも知れない。明日、祐子に会って確かめてみよう」翌日の夜、賢は祐子の元にテレポーテーションして昨夜のことを話した。祐子は夕食を済ませて、スバハと一緒に遊んでいた。賢は祐子の元に出現すると、スバハを抱き上げてあやしながら言った。

「祐子、俺は昨日の夜、変な夢を見た。お前がテレポーテーションできるようになったようだとやっている夢だ。お前は俺たちがもうそろそろ、自然の中に戻るべきだと言っていた」

「あら、あなた、わたしも同じ夢を見たわ。あれは夢じゃなかったのね。亜紀の話もしたでしょう？」

「そうだ。やはり、現実だったのか」

「あなたはどう思う？昨日の話？」

「実はね、俺は刑務所を出所できたら、そうしたいと思っていたんだ。今までのような、意識で時空間に波を立てることは終わりにして、この世界に映し出されている大自然と一体化して、それを自分の核に反映させようと思っている。その時、お前や亜紀と一緒になら素晴らしい」

「ええ、そうしましょう。それにはお互いに現在の状況から一旦抜け出して、つぎのステップに移るための準備をしなければいけないわね。大勢の人たちと関わって来たでしょう。歪みを生み出した部分を修正した

方がいいと思うのよ」

「そうだな。そうしよう。でも、おれは次の時代に、もう一度この現象界で生まれ変わりを繰り返して、多くの魂と共に生きようと思う。それが俺の役割のような気がする。この上ない至福の中に留まるのも棄てがたいが、自己の本体に戻って、宇宙の輪廻に帰還する前に、たとえそれがバーチャルなものであっても、もう一度友と同じ土俵の上で生きたいと思うんだ」

「わたしもそうよ。もう一度生まれ変わって、あなたや亜紀や沢山の友達に巡り会いたいわ」

賢がスバハを下に降ろすと、祐子が賢の胸に顔を埋め、ふたりは強く抱き合った。スバハがじっとふたりを見詰めていた。賢は祐子から離れると、刑務所にテレポーテーションして戻った。

諏訪中郷町のプロジェクトは思わぬ方向に向って発展しはじめた。数馬の元に静岡県東部にある駿河湾復興共同体という組織から新しい提案が持ち掛けられていた。それは東海大震災で壊滅的な被害を受けた静岡県の駿河湾一帯を経済復興特区に指定して、新しい経済モデルに従って復興を進めてはどうかというものだった。政府の復興特設省の計画では10年で復興を実現する計画になっていたが、地元の住民が復興までの時間が掛かり過ぎることを理由に、国による復興事業の着手を拒否し続けていた。住民は県の許可を得て、駿河湾復興共同体という組織を作り、その組織が中心となってこれまでの市町村という枠組みを越えた特別共同体を作ろうという構想を打ち立てた。その参照モデルとして、諏訪中郷町の試行プロジェクトと既に漁業共同体という手法を使って復興を果たした東日本大震災の三陸地域が選ばれたのだった。静岡県の駿河湾に面する地域が経済復興特区の対象となっていて参画は強要せず、任意とする計画だった。スポンサーとして、マトラーシステムと建築大手の無住建設、電気大手のビリューに話を持ち掛けていた。無住建設とビリューはまだこれまでの経済システムの考え方から抜け出せなかったが、投資家に翻弄される現在の為替変動相場制での博奕のようが事業運営

に疲弊していたため、諏訪中郷地区の試行を真剣に研究していて、社長をはじめ、経営幹部がその経済システムのあり方に少なからぬ興味を抱いていたため、駿河湾復興共同体に否定的な応答はせず、回答を先延ばししていた。数馬はマトラーシステムの取締役会に図り、共同体の提案に対して前向きに検討すると即答した。最終的には申し出を承けるつもりだった。マトラーシステムの取締役会は内観システムズの後ろ盾を得て、支援を行うことを決定し、その1ヶ月後、駿河湾復興共同体に了解の旨を回答した。それから、時を経ずにビリューが参画の意志を表明し、更にその1週間後、無住建設が参画に同意した。この静岡県東部地区の復興特別共同体の活動はメディアに取り上げられ、国内での話題の的になった。これまで諏訪中郷地区の試行サイトのことは誰もが知っていたが、それはあくまでテーマパークのように地域を区切った試行と捉えていたため、一般の国民にはどこか別の世界の話のような印象を与えていた。この駿河湾での共同体は試行ではなく、実際の生活の場を作り上げるものだったため数馬は興奮していた。経済システムは働く意志のあるなしに関係なく無償で全てを提供することは困難と判断し、あくまで個人が健康であれば、働くことを条件に、あらゆる商品が無料で購入でき、医療などの必要サービスを無料で受けられるシステムとした。老人や未成年、病に臥しているものは、100パーセント保護する。労働により一定の生産性を確保する一方、嗜好やレジャーなどの遊興費用はポイント制で提供するシステムを採用することになった。ポイントは労働によって得られ、個人が望めば、他人に供与することも許すことにした。しかし、あくまで貨幣経済からの脱却という思想だけは守られた。賢が夜のテレポーテーションで数馬を訪れたとき、数馬は口角泡を飛ばしてその計画の将来性について語った。これまでの経済システムを基底システムに持ち、表層に於ける金銭の流通を見えなくしたその新しいシステムの計画はこれまで賢がどうやって現実社会の中に新しい経済システムを導入しようかと迷ってきたことへのひとつの解決策を与えてくれる予感がしていた。謂うまでも無く多くの障害があった。その主立ったものは、地域を区切らないためにこれまでの経済システム下で生活する

人たちと、新しい経済システム下で生活する人たちが混在していること
によって生じる軋轢と、現在の国内法をこの地域にどのように適用する
かという問題だった。静岡県は特区内特別条例を発令したが、それは実
効の疑わしいものだった。この特区内に存在する小売業、病院、公共施
設などは全て、特区内の人間に対する i d トークンの処理と従来の P O
S システムや精算システムとを併用しなくてはならなかった。この地域
で使われる P O S システムは P O S システムの大手企業 G R S 社が排
他的な製品として O E M (相手先商標製造) を受注した。諏訪中郷地区
にある調整事務所に代わって県の特区事務所が富士、沼津、三島、裾野、
御殿場各市の市役所内に設けられ、それ以外に各町に出先の事務所が設
けられた。仮設住宅に住んでいる高齢者や夫を失った母子家庭などは、
嬉々として復興特別共同体に参加した。しかし、首都圏に通勤している
ようなサラリーマンや多くの資産を持つ農家などは従来の経済システ
ムの恩恵から抜け出すことを躊躇していた。県もこの特別共同体に協賛
していたので、特区に参加する住民の住民税を減免する措置を行った。
マトラシステムは廃棄物処理企業とタイアップし、物質転送機を使っ
て、がれきの処理を驚異的なスピードで行っていった。駿河湾の中でも
共同漁法の先駆的な取り組みをしてきた由比地区は繋留してあった船
舶がほとんど流され、桜えび漁の再開が危ぶまれるほどの被害を被って
いた。政府の復興支援予算は各船元の船舶の修繕や新規調達を支援する
には十分ではなかった。乏しい資金を支えたのは三陸地域の方式を採っ
た漁業共同体の資金だった。この漁業共同体の背景には大型海鮮卸会社
の存在があったが、共同体は製品の流通経路 5 0 % の移譲と引き換えに
その海鮮卸会社からの投資を受け、由比共同体がこの地域全体で漁から
加工、製品化、配送、営業までを総業として行う形式を用いた。こうし
てこれまでの漁師間の漁獲高の格差は全くなくなり、個人的な船舶など
への投資のリスクもなくなった。更にその由比共同体も駿河湾復興共同
体に参画することになった。駿河湾復興共同体はアメンバーのようにそ
の勢力を拡大していった。静岡県東部には製紙業の拠点があったが、そ
れらの工場も震災で壊滅的な被害を受けていて、工場の再生を図ったが、

全国に存在する製紙会社が地震災害の最も危険度の高い地域での工場再興を躊躇し始めたため、製紙業の都市富士市の再起が危ぶまれた。各社の思惑が交錯し、再興計画も紆余曲折を経た結果、ここでも製紙業復興の共同体が立ち上がった。会社間の壁を取り払い、ひとつの協同組織として、富士市周辺の人口の30パーセントを支えるほどの無公害な大工場の再建が行われることになった。電気大手のビリューはフレキシブル生産工場の建築に取り組み始めた。3種類の巨大な組立ラインの建築が行われた。これらの組立ラインは製品の盛衰に応じて、リアルタイムで構成を変更できる仕組みにした。部品の搬入はその日の生産に必要なものを必要な量だけ供給する方式を採用した。この方式は物質転送機ジャストインタイム・システムと命名され、略称で **mtjits** (エムティジツ) と呼ばれるようになった。いち早く情報をキャッチした日本未来経済新聞社は、「従来のジャストインタイムに比べ、周辺に倉庫等を設ける必要のない、非常にスマートな受給システムである」と高く評価した。無住建設の意図した個人家屋の再建への取り組みも着実に軌道に乗ってきた。無住建設は先ず、この地域の中小の建築会社の買収に乗り出した。震災で壊滅的な状態になっていた各企業は、建築大手の無住建設に身売りするような形で、吸収されていった。無住建設はそれらの中小の建築会社をひとつの建築共同体として組織化した。被災者の家々を再建するには数兆円規模の資金が必要になったが、無住建設はその収入源を、国や県の支援と住民の労働から得る方法を考案した。特区の運営システムの中に、復興特別枠を設けさせ、本来は許されない労働の担保の仕組みを作り上げた。家を建築することを望む特区に参加した者たちは、生涯における自分の労働を担保にする必要があった。資金の不足は否めなかったが、無住建設はそれでもあえてその方式に踏み切った。家屋の建設は予想より急ピッチで進められていった。各地の小売業の共同運営も活発化し、スーパーマーケットや大型電気店の店舗もすべて共同体が運営する形になった。金銭授受の仕組みを持たず、あらゆるものについて数量や、件数の管理しか行わないため、バックグラウンドで行う現行の経済システムとの連結部分に大きな負荷がかかっていたが、その処理

はスーパーコンピュータを用いてリアルタイムで行われた。システムトラブル等、何度も、何度も大きな問題を起こしながら i d トークンシステムをベースにした駿河湾復興特区は徐々に活況を呈し始めてきた。

賢が収監されて2年が経過した。コンゴでの取り組み方だけでは、アフリカの全ての国々を変革することが難しいことが分かってきた。しかし、最も不安定で混乱の続いていたコンゴの変革の成功が他の周辺国に与えた影響は甚大だった。どの国もコンゴの取り組みを参照するようになった。コンゴの改革は全て共同体をベースに行われていて、南アフリカのような、アパルトヘイトの後遺症を引きずりながら、企業に対して黒人を白人と同条件で雇わせるような強引な手法を用いなかったため、労働人口の適材適所への配分がスムーズに進んだ。コンゴにも FURUM A が行ってきた貧困者支援の融資制度ができ、その制度が無数の個人起業家を生み出した。農業、林業、鉱業は言うに及ばず、医療支援、ナチュラルメディシン製造販売、工芸品生産、飲食店、土木業、小売業、テーマパークなどのあらゆる職種の企業が誕生し、それらの企業はひとつの共同体を作って運営を行うようになった。祐子は時としてコンゴ国内に出向き、日本の協同組合的な運用について指導したり、医療関連業務の指導を行ったり、個人貸し付けの運用方法について指導したりした。ウグングが祐子の活動を衛星放送で全国民に伝えていたので、コンゴ国内での祐子の知名度が急速に高まっていった。衛星放送には大統領やヘデン国連事務総長のメッセージも伝えられた。コンゴ国民は衛星放送に最大の敬意を表し、期待を持って受け入れていた。コンゴの奇跡的な発展の影響を受け、アフリカ各国の貧困救済の取り組みが始動した。コンゴ政府の国内改革が軌道に乗り始めたのを契機に、ウグングは周辺各国の改革に積極的に関わりはじめた。私利私欲に走っている輩は、たとえそれが大統領であろうと、大臣であろうと容赦なく OVS の DVD と小爆弾で行動の軌道修正を促した。一番てこずったのは軍の掌握だった。軍部は自尊心を越えたプライドを持っていて、自分達の行動が否定されると、狂ったように、貧困に苦しむ国民に対して牙を剥き、残虐な行為

を行いはじめる場合もあった。各国にはウグングの部下がその国の改革軍最高司令官として着任していたので、その国の改革はそれ等の司令官を通して行われた。衛星通信局も各国に最低1局は設立された。コンゴに於ける衛星ラジオ放送の運用方法が参照され、各国固有の民族音楽や風習をテーマにしたトークが基底放送として取り入れられ、その番組の合間に、コンゴにおける改革状況や、その発展の様子が伝えられた。また国民が一番興味を持つ、食料、医療、住居などの情報を適宜織り込み、最も重要な、その国を変革に導くスローガンがうたわれた。殆どの国の国民が衛星放送の影響を受け、改革に対する意識が高揚していった。勿論各国政府は当初、これらの扇動的な放送に猛烈な反発を示していたが、衛星放送やインターネットを通して行われる宣言や、収賄などの行為に対する攻撃に対抗する術を持たず、ウグング達の戦略に次第に懐柔されていった。

祐子は、「わたし達はそろそろ国家の改革への介入から手を引いた方がよいのではないか」とウグングに相談した。ウグングも長期的な視点では祐子の考えに賛同したが、現在いきなり、祐子に手を引かれたら、手紙やDVD、小爆弾の転送に支障を来すと言い、暗に自分達が物質転送機を自由にハンドリングできないことが問題である事を祐子に分からせようとした。賢がテレポーテーションしたとき祐子は賢に相談した。賢は物質転送機を1台ウグングの居るアジトに据え付けることに同意した。賢はその事を直ぐに原に伝え、物質転送機が他の目的に使われないように、原にマシンの使用状況を示すログを、日本から直接参照できる仕組みをマシンの中に組み込んでもらった。原はその改造を施したマシンをウグングのアジトに物質転送機で転送し、日本時間でその日の夜、賢がテレポーテーションして据え付けを行った。ウグングは賢のテレポーテーションにも馴れてきていた。据え付けを終えると、賢はウグングに物質転送機の使い方を教えた。ウグングはメモを取りながら、賢の指導を受け、いくつかの試行を行って、その威力に興奮して言った。

「*****」(MR. ウチミ、こんな凄いマシンを誰が発明したのですか？このマシンとママのおかげで、コンゴは新しい国に生まれ変わ

りました。何とお礼を言って良いか分かりません)

賢はウグングの話す言葉の意味は理解したが、言葉で返答することはできなかった。テレパシーで意志を伝えた。

「*****」(ウグング隊長、あなたのお力です。私たちはあなたの意志に従っているだけです。このマシンは日本に居る原友昭という天才が発明したのですが、海外に居る日本人以外の人の上に持ち出すのはこれが初めてです。あなたも既にご存じのように、使い方を誤ると、大変なことになりますから、この改革の目的以外には絶対使用しないでください。たとえ、それが苦しんでいる人を救うためでもです)

ウグングは頷いた。賢はウグングと握手をすると一旦祐子の元に移動して報告を済ませ、テレポーターションで網走刑務所の布団の中に戻った。祐子がアフリカからの撤退を決めたのはウグングの元に物質転送機が設置され、その運用が軌道に乗ってきただけだった。それは賢が収監されてから2年2ヶ月が経過したときだった。

梓は利他を連れて毎週賢の元に面会に向かった。梓は網走刑務所に対して内妻という申請をしていた。賢も梓を内妻として申告してあったので、面会は容易に許可された。初めのうちは、やっとの事で網走に着いても、刑務所での面会人が多すぎて、許可がもらえず、やむなく引き返すこともあった。それでも梓はめげなかった。必ず前の日に刑務所に電話をし、許可を得てから翌朝出掛けた。15分程度の面会のために梓は、毎週日曜の朝5時に家を出て、6時間近く走り、待ち時間を入れ、およそ1時間ほど刑務所に居て、面会を終えると、近くの食堂で食事を済ませてから、そのまま由仁に向けて引き返した。利他がまだ幼かったため、助手席にチャイルドシートを括り付けて、意識を常に利他に向けて車を運転した。愛子と一緒に来ることもあった。そういうときは愛子も一緒に面会所に入ることができた。春から秋にかけては車で行けたが、雪の激しい冬の日には網走まで車で行くという危険を冒すことはできなかった。それでも梓は決して諦めなかった。札幌ー網走間を、飛行機を使って通い続けた。賢はそんな梓の姿を目にしても、決して夜間に由仁に向けて

テレポーテーションすることはしなかった。

「あなた、お体の具合はいかがですか？ 目の方は回復してきませんか？
利他はこんなに大きくなりました」

梓は立ち会いの監視官を意識してか、何時も同じことを言った。言葉は何でも良かった。唯、賢の姿を見ることができればそれでほっとするのだった。

「梓、ありがとう。いつもこうして君が来てくれるので、僕はどれほどうれしいか知れない。利他が元気に育っているのを見ると安心だ。札幌からここまで来るのは大変だろう。無理をさせて本当に済まないな。気を付けて帰るのだぞ」

賢も別れ際には必ずそう言った。

賢の刑期が1年9ヶ月経過したとき、弁護士が仮釈放の申請を行った。申請書には3万人の保釈請願の署名が添付されていた。賢の刑務所内での反省状況と生活態度が斟酌され、また、これまでの慈善行為が考慮されて刑期1／3に於ける仮釈放が認められた。それは、過去に殆ど例の無い特例中の特例だった。仮釈放申請の6ヶ月後に賢は釈放されることになった。それは入所から2年3ヶ月後だった。

「梓、来月仮釈放されることになったよ。これもみんな、君達のおかげだ。ほんとうにありがとう」

「わたし、うれしくて、うれしくて……」

梓は目に一杯涙を溜めた。

その日の夜、賢は祐子にテレパシーを送った。

「祐子、俺は来月11月23日に網走刑務所を出所することになった。梓たちが努力してくれたおかげで1／3仮釈放の許可が出たんだ。俺は依然として視力を失ったままだが、その他の部分は健康そのものだ」
祐子から直ぐに応答があった。

「あなた、それは良かったわ。もう、こんなことにならないようにしないといけないわね。この間話したように、わたしもあと少しでアフリカからの撤退に向けた引き継ぎを終えるわ。そしたら、一緒に生きましょう。できることなら、直ぐに亜紀をこの世界に戻しましょう。私たちは

自然の中で、みんな一緒に生きるのが一番いいわ」

祐子は具体的な撤退の予定を立てた。これからの1ヶ月間でこれまでに関わってきた沢山の人々に会って今後のことを托すことを考えた。先ずその事をウグングに告げた。ウグングは物質転送機を自分がハンドリングできるようになったことで、祐子の撤退に理解を示した。「アフリカの改革は一生を掛けて取り組む自分の責務だ」と言った。祐子は次にサスカブと夕食を共にしながら話した。サスカブは唇をキッと結んで、一言も言葉を発さずに、祐子の話を聞いていたが、祐子が話し終わると、ぽつりと言った。

「*****」(ママ、わかりました。我々の心の中には、何時もママがおられます)

この頃にはサスカブはブチの人々の厚い信頼を得ていた。長老達も自分達種族の将来をサスカブの手に委ねることに何の不安も感じなくなっていた。祐子は鹿島康介と香川に電話を掛けた。ふたりとレストランBABAで食事をしながら話したいと言った。康介が言った。

「何か重大な話でもあるんじゃないですか？由宇さんが取引のこと以外で我々ふたりを夕食に誘うなんてことは、これまで一度もありませんでしたからね」

3人は午後7時にレストランBABAで会った。象のモニュメントが飾ってあるゲートを潜ると、祐子は懐かしい想いが湧いてきた。このレストランは取引業者と度々食事を共にしたレストランだったが、この日ははじめてキガリに来た時の情景が重なっていた。

「由宇さん、まさかまた、どこかに行くつもりだなんて言うんじゃないでしょうね？」

康介の言葉に祐子は微笑みながら応えた。

「その通りよ」

「どうしたんですか？FURUMAに何か問題が起きたのですか？」

「いいえ、FURUMAは順調よ。鹿島さんの会社との取引も、今年は前年比で10パーセント以上の伸びよ。香川さんの会社へのレアメタル

の輸出も去年の倍近い伸びになっているわ」

「じゃ、一体……」

「わたし、アフリカから撤退することにしたの。おふたりもご存じだと思うけど、アフリカの曙が軌道に乗ってきたの。わたしは道筋を付けるのを手伝うのが自分のミッションだと思っているの。でも、もうウグングさんたちは、わたしの援助なしでも十分やっていけるわ。だから、撤退することにしたの」

「だけど、由宇さんは、FURUMAに命をかけるとおっしゃったでしょう」

「FURUMAも安定軌道に乗ったわ。もう、わたしが居なくても大丈夫よ」

「じゃ、日本に戻ると言うんですか？」

「そう、そうしようと思っているわ」

ふたりの男性は顔を見合わせた。それまで黙っていた香川が言った。

「由宇さん、いえ、祐子お嬢様、今日はこう呼ばせてください。祐子お嬢様は日本に帰って、ご自宅に戻られるおつもりですか？」

「いいえ、藤代の家には戻りません」

「それじゃ、どうされるのですか？」

「以前の仲間と一緒に大自然の中で生きることにしたのよ。おふたりには、本当にありがとうございました。お礼の言いようのないほどお世話になってしまいました。あなた方がいらしてくださったから、わたしはこのルワンダで生き抜くことができたんです」

康介が言った。

「分かりました。それは何時ですか？」

「来月の末、11月20日よ」

「もう、日にちまで決めてあるのですか？」

祐子はふたりの男性に、賢が最近まで受刑していたことを話した。そして、祐子の帰国した翌日に出獄するので、それを出迎えるのだと言った。ふたりは驚きを禁じ得なかった。康介が言った。

「えっ！だって、内観さんは時々こちらにテレポーテーションで来てい

るんでしょう？」

「そうよ。刑務所の中に居ても夜間は就寝時間だから、布団の中に潜っている時に、バイロケーションという2つの身体を同時に2カ所に出現させる手法を使って、よくわたしのところに来て、アフリカ改革の手伝いをしてくれたわ。本当は刑期が5年3ヶ月だったんだけど、あの人の慈善行為や反省の態度が良かったらしく、1/3の刑期で仮釈放が認められたようなの。彼は留置所に拘留されているとき毒を盛られて、失明しているのよ。わたしは彼が出所したら、先ず、彼の目を治すことにしているの。それから、みんなで山奥深くに移り住むつもりよ」

香川が言った。

「みんなっておっしゃいますと？」

「あの方と、あの方の家族、梓さんと・・・」

「梓さんって、まさかあの研究所長だった田辺部長のことじゃないでしょうね？」

香川が驚いたように訊いた。

「そう、彼女よ。あの人の子供を産んだのよ。結婚はしていないけどね。彼女すっかり変わってしまったようね。以前のエリート部長から良妻賢母に変身してしまったらしいわ・・・それから、愛子さんと亜紀」

「だ、だって、亜紀さんは亡くなってしまったでしょう」

「もう一度この世界に呼び戻すのよ」

「そ、そんなことできませんよ」

康介の顔色が変わった。

「もしかしたら、できないかも知れないわね。その時は、亜紀の霊と一緒に生きるわ」

「じよ、冗談を言わないでくださいよ、由宇さん」

康介の戸惑いを余所に、香川が言った。

「祐子お嬢様、亜希子お嬢様を蘇生させる具体的な方法があるのですか？」

「まだ、分からないわ。あの人次第よ。あの人が出所までに生き返らせてみせると言っているわ」

この晩のふたりは食事が喉を通らなかった。

祐子はピピとマリゼを訪問した。祐子はふたりを昼食に誘った。ふたりは久しぶりに祐子と共にする食事に悦びを隠せないようだったが食事が終わる頃、祐子がアフリカを去ると言う、ふたりは涙を流した。

祐子はマリー・ジュベステルにアフリカ撤退のことを告げた。マリーは黙って頷き、祐子が去ったら、自分もフランスの田舎に帰ると言った。祐子は自分がハーレムに売られる前に一緒に逃亡を企てた春子の所在を調べて欲しいとマリーに頼んだ。マリーは過去の伝（つて）を辿って調べてみると言った。マリーが春子の調査結果を持ってきたのは、13日後だった。

「ママ、手間掛かりました。春子、イタリアのナポリに居ます。イタリア人政治家、インドの競売で春子買った。暫く、政治家の別荘、シチリアのセカンドワイフだった。春子逃げた。去年、政治家、詐欺、横領で捕まった。春子ナポリに隠れてる。わたし、春子会った。わたし、ツアー会社名乗った。春子、毛の色ピンク染めて、肌茶色塗ってる。サングラス掛けてる。酷く痩せてた。わたし、前の春子知らない。春子、日本人相手にしたツアー・ガイドしてる」

祐子は春子を救おうと思った。もっと早く調べれば良かったと後悔した。直ぐに航空券を手配した。祐子は既にルワンダの国籍を取得していた。国籍を手に入れると同時にパスポートも取得していた。スーダンやコンゴに行くときにもそのパスポートを使った。しかし、アフリカから出るのは初めてだった。

祐子はマリーを伴ってナポリに向けて飛び立った。

マリーは空港でレンタカーを借りた。幹線道路から抜けて、右手に海岸線を望みながら車を走らせる。穏やかな日差しを受けて豪華客船がゆったりと行き交っている。正面に、あの古代都市ポンペイを地上から消し去ってしまったベスビオス火山が突き出ている。やがてベスビオスが左手に見えるようになってきた。ベスビオスと暫く地中海に挟まれた道路を走ると、マリーは左手の山肌に向かう道にハンドルを切った。春子はボスコ・レアーレという小高い丘の中腹にある地域の、4階建ての古い

アパートの2階に住んでいた。マリーのノックでドアを半開きにした春子は、マリーの背後に日本人がいることに気付いた。

「*****」(ツアーのことですか?)

ドアの隙間から春子が言った。忘れることのできない声の響きだ。祐子が言った。

「春子さん、生き抜いてくれたのね」

ドアがバツと開いた。春子はオレンジ色のワンピースを着ていた。すっかり痩せて、焦げ茶色に染めた肌も荒れているのがはっきり分かる。ふたりは暫くじっと佇んでいた。春子の目から大粒の涙がこぼれ落ちた。

「祐子お姉さん……………」

「春子さん！」

ふたりは強く抱き合った。

「わたし……………苦しかった……………とても寂しかった……………でも、生きたわよ。お姉さんの言うとおりに、生き抜いた……………うう、うっ……………」

「よく頑張ったわね。偉かったわ。もう何も言わなくても良いのよ。みんな忘れてしまうのよ」

春子のアパートの近くにポンペイの遺跡があった。春子はその日の午後、祐子とマリーをポンペイの遺跡に案内した。まだガイドをはじめて1年あまりしか経っていないのに、春子は遺跡を隅々まで知り尽くしていた。ポンペイが現代に通じる繁栄を謳歌していた様子が窺えた。石畳の道を春子の後に附いて周りながら、祐子は春子に尋ねた。

「日本人ツアー客をガイドしていたのでしょうか？ どうして、コンダクターなどに救いを求めなかったの？」

「お客さんから私の事を訊かれると、つい、打ち明けようと言う気になるのですが、でも、できなかつた。怖かつたんです。いざ誘拐されたことを話そうとすると、周りに居る人たちがみんな悪い人に見えてしまうんです。ご年配のご婦人でさえ、善良そうに見えても、もしかしたら、組織から派遣されてわたしを探しに来た人かも知れないと思ってしまうんです。わたしは、ナポリとポンペイ、ベスビオスのガイドをするだけですから、ガイドするのもせいぜい2、3時間程度でしょう。迷って

いる間に、ツアーの皆さん次の場所に移動してしまわれて……お姉様、やっぱりお姉様が助けに来てくださった……」

春子は涙ぐんだ。目の周りのメイクが落ちてきていた。祐子はバッグから手鏡とガーゼを出して春子に渡した。

3人はポンペイを見物すると、アパートの解約をする為に、ナポリ中心部にある不動産屋に向かった。アパートは年度契約で、つい1ヶ月前に契約を更新したばかりだった。祐子は11ヶ月分の家賃と解約金を支払った。春子は翌日アパートを引き払い、祐子と一緒にキガリに移ることになった。祐子はマリーに訊いて、春子をヴィットリオ・エマヌエーレ通りというナポリのファッション街に連れて行った。祐子は言った。

「春子さん、一番好きな服を買ってあげる。下着もバッグも好きなものを選びなさい」

どの商品も目が飛び出るほど高い。春子は言った。

「祐子お姉様、私は何も欲しくありません。私は身も心も、ずたずたで汚れきっていますから、何を身に付けても似合いません」

「春子さん、それだから、一番好きな服を買うのよ。今まで大事にしてあげられなかった身体と心をお詫びの印として、精一杯飾ってあげるのよ。私と別れる前のあなたは美しかった。その美しいあなたに戻るのよ」

春子は祐子の胸に頭を埋めた。祐子は春子の背中をそっと抱いた。

3人は春子のブラウスや下着、染髪料や洗顔料を購入してから一旦祐子達の宿泊しているホテルの部屋に戻った。そこで春子は祐子の知っている美しい姿に戻った。春子は顔の染料を落とし、髪を真っ黒に染め戻した。身体は以前よりずっと痩せていて、頬は落ちていたが、新しい白い線の蔓草の模様入った紺地のブラウスとツートーンのダークグレイのスカートを身につけると、落ち着いた感じのするレディーに変身した。

「春子さん、とっても素敵よ。いいわね、堂々とするのよ」

「はい」

春子は壁の鏡に映った自分の姿を見詰めながら微笑んだ。

祐子とマリーが春子を連れてキガリに戻ると、祐子はアイリーンとプリ

ミテ、キルリエに春子を友達として紹介した。3人は交互に春子をハグした。

「*****」「よろしくお願ひします。ママのお友達、大歓迎します」アイリーンの言葉をマリーが日本語に訳して春子に伝えると、春子は祐子がママと呼ばれていること、そしてここでは人望を得た人になっていることを知って、嬉しくなった。春子もアイリーン達3人に言った。

「よろしくお願ひ致します。私、祐子お姉様の言葉を心に抱いてこれまで生きて来ることができました」

マリーの通訳の言葉を聞いて、アイリーンは頷いて言った。

「*****」(私達もそうです。みんなそうなんです。ママはみんなの母なんです)

少ししてサスカブが事務所に訪れた。サスカブは祐子に「感謝とお別れのパーティを開きたい」と言った。祐子は了承し、サスカブに感謝の思いを伝えた。

翌日祐子は先ず春子とアイリーン、キルリエ、スバハのパスポートと自分を含む5人の日本への入国ビザとを緊急に発行してもらうことにした。プリミテはルワンダに残ることになった。

「*****」(わたしは、もう暫くこの国に残り、アフリカの変貌する姿を見とどけたいのです)

祐子はプリミテを励まし、彼女をピピとマリゼの居るキヴェに移住するように奨めた。プリミテも喜んで祐子の提案を受け入れた。

祐子のパスポート申請は直ぐに政府高官にキャッチされ、大統領補佐官の計らいで日本大使館に対して依頼が行われ、通常では1ヶ月以上掛かる処理を僅か1週間で行ってくれた。

祐子の歓送パーティはキガリで一番大きなホテル、エリーゼの大講堂で開かれた。1000人以上の人々の集う立食パーティだった。様々な人たちが招待されていた。エドワード・ヘデン国連事務総長、ジュベナール・ハビヤリマナ・ルワンダ大統領、スタンガジ・ムルンブバナニク・コンゴ大統領、その他周辺国大使館の大使などのトップレベルの人々から、マリゼ、ピピ、アイリーン、キルリエ、プリミテなど祐子にとって

かけがえのない人々、康介と香川そして春子、FURUMAの面々の他、クツの首長グルワク、ジミーやメドリスナなどの兵士に至るまであらゆる階層の人たちが招待された。中にウグングの顔もあった。祐子はウグングが髭を蓄え、鬘（かつら）を被っているのが分かった。ウグングは実名でなく、ルバルメ・チョンガという名前で出席することを事前に知らされていた。ウグングから問い合わせを受けたとき、祐子は危険なので、出席しない方がいいと応えたが、ウグングの

「*****」（変装もして行くから大丈夫。もう一度ママにお会いしたい。バラックの分までママのことを記憶に留めておきたい）

という言葉に、返す言葉を見つけることができなかった。パーティ会場にウグングの姿を見つけた祐子は直ぐに近くに行って頭を下げた。

「*****」（ママユウコ、まだこれからなのに、もう帰ってしまうのですか？）

祐子が直ぐ近くに来ると、ウグングが微笑みながら言った。

「*****」（もう、私の出番は終わったわ。あとはあなたの力で頑張ってください）

「*****」（分かっています。今のところ、全て順調にいています。私は必ずやり遂げて見せます）

ふたりの話しているところにヘデン事務総長がひとりで近付いて来た。

「*****」（ツグンショウ婦人、そちらの紳士をご紹介頂けませんか？）

祐子は軽く頷いてウグングを紹介した。

「*****」（コンゴからいらしてくださった、ルバルメ・チョンガさんです。わたくしたちのコンゴ遠征の時にお世話になった方です）

「*****」（国連事務総長のエドワード・ヘデンです）

「*****」（存じ上げております。ヘデン事務総長閣下）

「*****」（コンゴは見事に立ち直りましたね。これからも頑張ってください）

「*****」（はい、やり遂げて見せます。どうかご支援をよろしくお願い致します）

祐子はヘデン事務総長が全て分かっていると思った。司会のサスカブが祐子に挨拶を促した。祐子が壇上に立つと、場が静まりかえった。マリーが通訳のため司会者のマイクの位置に立った。祐子はスワヒリ語で話し始めた。

「*****」

（皆様、本日はわたくしのために、かくも盛大なパーティを催して頂き、感謝に堪えません。わたくしは今日まで、皆様の暖かい愛情に支えられて生きてくることができました。皆様のお力で、このアフリカが見事に蘇りつつあります。私は沢山の苦しんでいる人たちに出会いました。苦しみの中で亡くなってしまわれた方々も沢山いらっしゃいましたが、その苦しみを、勇気を持って乗り越えた沢山の方々にもお目に掛かることができました。今、このアフリカは貧困や、命に危険が及ぶ疾病に別れを告げ、輝かしい未来に向かって羽ばたきはじめています。次はアフリカの時代です。私はこれから日本に戻って、四季のある大自然の中で生きてゆこうと考えています。お名残は尽きないのですが、これからも皆様が元気闊達に未来に向かって突き進んで行かれることをこころより祈っております。今日は、本当にありがとうございました）

嵐のような拍手が起こった。ヘデン事務総長やウグングなどスワヒリ語を理解できないはずの出席者も拍手をしている。なかなか鳴り止まない拍手がやっと収まってから、マリーがメモを見ながら祐子の挨拶を英語で通訳した。マリーの通訳が終えると、再び拍手の波が起きた。サスカブが重要人物の出席者を紹介してから、ヘデン事務総長を指名して、挨拶を求めた。ヘデン事務総長は英語で話した。

「*****」

（ただ今ご紹介にあずかりましたエドワード・ヘデンです。本日はこのような素晴らしいパーティにご招待頂き、大変感謝しております。奇跡の人、ママユウコことツグンショウ婦人には、どんな言葉を持ってお礼を申し上げて良いか分かりません。これはわたくしだけでなく、この場に出席された多くの方々、そして、本日出席できなかった、婦人に助けられた多くの方々にとっても同じだと思います。どんな言葉を持ってし

でもツグンショウ婦人の偉大な業績は言い尽くすことができないと思います。婦人は多くの人の命を救ったと聞いています。多くの人の病を治したと聞いています。荒んだ者達の心を穏やかな心に変えたと聞いています。そして最も偉大なことは、長い間、どんな人が取り組んでも成し遂げることのできなかつた、アフリカ中央部の戦闘地域を平和に導いたことです。多くの人々に働く場を与え、弱いものを支え、敵対する組織を和解させ、その上、国の発展に欠かすことのできない産業の復興を成し遂げました。これを奇跡以外のどんな言葉を持って表現したら良いか私は分かりません。現在国連はツグンショウ婦人のご意志に従って、アフリカ全土の貧困難民を救済するため、平和維持軍を積極的にアフリカ各国に派遣しております。これまでの戦闘の中を潜り抜けての支援ではありません。国々の軍や政府、そしてなにより各国の一般市民の歓迎の元に、世界中の支援国の援助物資の配給とインフラの整備を進めています。もう、アフリカの曙は朝日の輝きに変わりつつあります。これからはアフリカに住む人々によって、ツグンショウ婦人の敷いてくださった道筋に沿って邁進してゆかなくてはなりません。わたくしども国連も最大限の助力をさせていただきます。ツグンショウ婦人のこれからの人生がどのようなものになるのか私達には想像することはできません。それが人類の未来を象徴する生き方である事をわたくしは確信しております。本日この場に立ち会うことができた幸せを、皆様と共に共有したいと思います。本日は本当にありがとうございました。ツグンショウ婦人、栄えある未来をお祈り申し上げます)

ヘデン事務総長の英語は殆どの者達に理解されなかった。みな、マリーの通訳を待った。マリーの通訳が始まると、出席者は目頭を押さえながらその話に聞き入った。マリーがメモを読み終わると、人々は涙を拭きながら拍手し始めた。拍手は次第に広がってゆき、波のような大きなうねりとなった。サスカブは出席者の誰かもう一人から、祐子を祝福する言葉をもらいたいと言った。「誰か話したい人はいませんか？」と問いかけた。ヘデン事務総長の話の後で、感動を与える話のできる自信のある者は一人も居なかった。サスカブがもう一度全員に問いかけた。その

時、春子が手を上げた。祐子は驚いた。春子を知っている者は祐子の他マリー、アイリーンそしてサスカブなど数人しか居なかった。全員が興味津々の目で春子を見詰めた。春子は目に一杯涙を浮かべ、顔を涙でぐっしょりぬらしていた。春子はマリーの方を窺った。マリーは頷いた。春子は静かに壇上に上がった。

「私は桃山春子と申します。本来わたくしはこの席に呼んでいただけるような者ではありません。祐子お姉様がわたしにも出席するようにとおっしゃってくださったので、失礼とは思いましたが出席させて頂きました」

「*****」マリーの通訳が入る。

「おそらく、皆様は祐子お姉様のことを大変愛しておられるのではないかと思います。私もそうです。できるものなら、残りの人生を、祐子お姉様から離れずに一緒に生きたいと思っています」

「*****」

出席者の多くが頷いた。

「私は日本に住んでいたときコンビニで派遣労働をしていました。悪友の言葉に乗って、覚醒剤に手を出したのが運命の分かれ道だったと思います。覚醒剤の密輸組織の人間に掠られました。覚醒剤を注射され、漁船に乗せられました。はっきりしない意識の中でどこかの国に売り飛ばされるようだということが分かりました。漁船の船底は地獄でした。ろくな食事も与えられず、不衛生で、誘拐された女達が荒れすさんでいました。そこに祐子お姉様が誘拐されて、連れられて来られました」

「*****」

マリーの説明に出席者は驚きの眼を祐子に向けた。

「祐子お姉様は荒んだ女達に酷い目に遭わされました。それでも祐子お姉様は自分を痛めつけた女性達を救うために、拷問を受けるのを覚悟の上、誘拐犯のボスと交渉し、監獄のような船底の環境を正常な環境に変えさせることに成功しました。自分の身を犠牲にしてみんなを助けてくれたのです」

「*****」

全員が静まりかえって春子の話に意識を集中した。

「その直ぐあと、お姉様と私はヘリコプターで舟から連れ出され、台湾の海岸に連れて行かれました。そこで屈辱的な扱いを受けましたが、お姉様の勇気と機知で犯人をやっつけ、犯人のお金を持ってそこから脱出しました。私たちは漁村の浮浪者の家に逃げ込みました。そこには病気の老人と、乞食の娘が住んでいました。お姉様はその親子に、乞食としての生活から脱出させ、生きる勇気を与えました。犯人から取り上げたお金を全て与えました。そして、老人の申し出で、もう使えなくなった小舟をもらい受けて、夜の海に漕ぎ出しました」

「*****」

「私たちは外洋を彷徨い、大型貨物船に救助されましたが、その舟はやはり人身売買を行う密輸船でした。私たちはインドのどこかの港で降ろされ、取り調べ室のような場所に入れられて催眠ガスを嗅がされました。私は意識を失いました。お姉様とわたしはそこで別れたのです」

「*****」

「あの誘拐船での出来事、台湾の家でのお姉様の愛、私はお姉様のおっしゃった「生きるのよ、何があっても生き抜くのよ」という言葉を胸に刻みつけました。お姉様と別れたあとに待っていた人生は地獄でした。私は地中海のシチリアに連れて行かれました。

「*****」

「其処にはイタリアのベネチア地方議員の別荘がありました。わたしはそこでセカンドワイフとして別荘に幽閉されました。その生活は陰湿で恐ろしく、2度と思い出したくないものでした。議員は月に1度程度しか来ませんでしたが、それ以外の日々はマフィアの男達の相手をさせられたのです。マフィア達も私のことを自分のセカンドワイフだと言いました。私はセカンドワイフどころか犯罪に手を染めた男達の娼婦だったのです。恐ろしい場面にも何度か遭遇しました。私の目の前でチンピラがリンチを受けることもありました。それは私にそんな場面を見せ、暗に逃げたらどうなるかを教えているのでした」

「*****」

「それでも私は逃げました。やっとの思いでナポリまで辿り着き、アパートに潜り込みました。変装して日本人相手のガイドをし、イタリアを脱出するチャンスを窺っていました。其処にお姉様が私を助けに来てくださいました。多分お姉様も同じ地獄の苦しみを味わってきたことと思います。でもお姉様は一言も弱音を吐きませんでした。お姉様の周囲は何時も天国に変化しました。祐子お姉様、皆様のママユウコは女神様の生まれ変わりだと思います。私はもう、お姉様から離れません」

「*****」

マリーは涙ぐみながら通訳をした。自分の関係した部分に差し掛かったときは、一瞬言葉に詰まった。マリーが通訳し終わると、女性達は皆涙を拭い、拍手をした。春子は深々と頭を下げてから檀を下りた。祐子が檀の下に近寄り、春子を抱きしめた。皆、再び拍手をした。

祐子が日本に戻るまであと1週間になった。祐子は賢に頼んで、物質転送機とOVSを由仁に戻してもらうことにした。賢はそれを原に頼んだ。マシンは由仁の家に引き上げられた。祐子は春子と一緒に日本に帰えろと言った。その言葉で春子の不安が急に膨らんで来るのが分かった。「春子さん、私もあなたと同じよ。でもね、私たちは密航船からヘリコプターに乗せられたときに一度死んだのよ。だから、何も怖いものは無いわ。私に附いていらっしやい」

「祐子お姉様、私をずっとお側に置いてくださいますか？」

「いいわよ。だけど、あなたこれから恋愛も、結婚もしなくてはね」

「わたし、結婚なんかしません。もう男は厭です」

「ごめんね、あなたの心の傷はそう簡単には癒えないわね」

春子は自分の生い立ちを祐子に語りはじめた。春子は御前崎市で家族揃った平和な生活を生きていた。中学校では演劇部に入り、その美貌故に、友達からは「将来はアイドルスターになるだろう」と期待されていた。しかし、20XX年XX月XX日に竜巻に見舞われ、全てが一変した。春子は中学校に居たので助かったが、家は倒壊してしまい、両親を失った。更に不運は重なり、引き続き襲ってきた集中豪雨で、市場で働いて

いた兄が行方不明になってしまった。春子は気が狂ったように必死に兄を探したが、追い打ちを掛けるように起きた運転停止中の原発の炉心溶解事故で地域への立ち入りが制限され、兄の捜索ができなくなってしまった。幾度となく兄の捜索に市場に行くことを試みたが、その都度監視員に止められてしまった。春子はやるせなさに絶望的になっていた。暫くの間、仮の避難場所になっていた隣の小学校の体育館に居たが、もう生きていたくないと思い、何度も自殺を試みた。しかし、幸い、その都度誰かに助けられた。沢山の友達が居た現地の高校進学を諦め、金沢の親戚の家に移った。親戚の人たちは優しくしてくれたが、春子の悲しみは消えなかった。春子は金沢では生きる道がないと思った。親戚の反対を押し切って大阪に移り住んだ。しかし大阪では就職先を見付けることができなかった。周りの者達は言葉では優しくしてくれたが、春子の心の奥にある悲しみを理解してくれる者はいなかった。春子はここも自分の生きる場所ではないと感じた。やがて春子は長崎に移った。小学校の時に両親と兄と共に訪れた長崎が忘れられなかった。何でも良いからそこで働いて、少しでも家族の思い出に浸ろうと思っていた。コンビニで派遣労働をして生きていた。そのうち、非行グループと知り合った。非行グループの者達が自由奔放で、自分の悲しみを分かってくれるように思えた。彼らの生き方が自分には一番向いていると思った。彼らから麻薬を教えられた。そのひとときの天国に行ったような心地よい気分が両親と兄を失った悲しみや竜巻事故、集中豪雨で受けた苦しみから自分を解放してくれた。非行グループと一緒に麻薬を打ち、たむろしているときに、意識朦朧の中で拉致されたのだった。春子は腕まくりして、麻薬を打った注射の跡を祐子に見せた。まだ続けていたのだった。祐子はその腕を取ると、そっと擦った。

「春子さん、少し辛いけど、もう止めようね」

春子は頷いた。

祐子は春子とアイリーン、キルリエ、スバハを連れて賢の仮出所4日前に日本に向けて飛び立った。出発のときは大勢の人々が4人を見送って

くれた。人々は涙を流したが、祐子は泣かなかった。祐子の心の中にはアフリカ全体が入っていて、たとえ自分の住む場所が変わっても、キガリの仲間とは常に一緒だという感覚があった。アイリーンは仲間と抱き合って別れを惜しんだ。春子は祐子に買ってもらった大好きな服を身に付けていた。今にも頭が爆発するのではないかと思うほど不安に押しつぶされていたが、それを表面に出さないように、できるだけ毅然とした態度をしようと必死になっていた。祐子達一行は午前10時にタクシーでFURUMAの家を出た。途中大統領官邸に寄り、挨拶を済ませてから空港に向かった。祐子はエコノミークラスの割引航空券を購入していた。サスカブはビジネスクラスで行くように祐子を説得した。しかし祐子は受け入れなかった。自分達に掛ける余分な金はないと言った。一旦ナイロビに出て、パリのシャルル・ド・ゴール空港経由で成田に向かうことになっていた。キガリ空港にはサスカブをはじめマリー、FURUMAの事務員達、ジミー、メドリスナ、ベム、アフフォン、ソニアそしてピピ、マリゼとプリミテの姿があった。チェックインカウンターの女性は祐子の姿を見ると直ぐに言った。

「*****」(ママユウコ、ファーストクラスのカウンターにいらしてください)

「*****」(いいえ、私たちはエコノミークラスよ。ナイロビとパリ経由で成田までです)

「*****」(ママユウコ、あなたとお供の人たちの航空券はファーストクラスに変更されています。どうぞ、ファーストクラスのカウンターにいらしてください)

「*****」(誰が変更したの?)

「*****」(vip会員のMr. Kashimaです。彼が差額をお支払いになりました)

祐子は振り返って辺りを見回したが鹿島康介の姿は無かった。祐子は5人分のエアール・フランス(Air・France)の新しい航空券を渡された。祐子達が手荷物検査のゲートに入るとき、見送りの者達が駆け寄ってきてそれぞれ祐子の手を握り、旅の安全とこれからの幸せを祈願する旨の

言葉を伝えた。皆目に一杯涙を溜めて祐子達を見送った。祐子は見送りに来てくれた人たちに深く頭を下げ、ゲートを潜った。

キガリからナイロビまでのフライトはケニア・エアウエイズ (Kenya Airways) の小型機だったので、エコノミークラスとの間をカーテンで仕切られた簡易なビジネスクラスの待遇を受けた。キルリエは勿論のこと、春子もアイリーンも生まれて初めての飛行機の旅だった。キルリエとアイリーンは最初の内、緊張のあまり、顔が引きつっていたが飛行機が飛び立つと、上空から見るキガリの景色を覗き込んで、感動の言葉を発し合っていた。

「****」(キルリエ、見て、見て、凄いわね！)

「****」(アイリーンお姉さん、わたし目が回りそう)

「****」(ママ、見てください。凄いですね。スバハ、見てご覧なさい。ママ、あそこに見えるのがFURUMAかしら・・・)

「****」(いいえ、FURUMAはもっと南のはずよ)

祐子は笑っていた。春子も緊張していた。春子はFURUMAを出てからずっと、周囲に神経を使っていた。人とすれ違うときは自分の顔が分からないように下を向いた。キガリで飛行機に乗るとその緊張は一層高まった。祐子が言った。

「春子さん、大丈夫よ。私が守ってあげるから安心しなさい」

春子は頷いたが、それでもまだ不安は払拭されていないようだった。キガリからナイロビまでは1時間15分の短いフライトだった。飛行機を降りるときも、5人はVIPの扱いを受け、ラウンジに案内された。ナイロビでは4時間の待ち時間があった。スバハの手を引いたアイリーン、そしてキルリエと春子も祐子にぴったりと附いて離れないようにしていた。春子は行き交う沢山の人々には目を向けないようにしていた。アイリーンは宝石の入ったバッグでも扱うかのように、手を繋いだスバハを歩きながら何度も覗き込んで慎重に歩いている。キルリエはいつもきょろきょろと周囲を見回しながら歩いていた。ラウンジではコーヒーやスナックが出され、3人の女性は夢心地だった。スバハは跳び回ることもなく、おとなしくアイリーンの横に坐ってジュースを飲んでいた。

次のフライトの搭乗も優先的な扱いを受けた。特にアイリーンには係の女性が細心の気配りで接してくれた。ナイロビからパリまでは8時間を要した。美味しい食事、至れり尽くせりのサービスに春子達は足が地に着いていないようだった。パリのシャルル・ド・ゴール (Charles De Gaulle) 空港には翌朝到着した。4人の大人は緊張のために、少し疲れを感じていたが、スバハは好きなときに眠り、好きなときにアイリーンからスナックをもらって、ご機嫌だった。祐子が全ての手続きや申告などを行ったので、アイリーンが母親の役割を果たした。春子はパリに着く頃からあまり周囲を気にしなくなってきた。パリの空港では4時間半を過ごすことになった。3人の女性はガラス張りの空港の中央にあるクロスするエスカレーターをまるで異次元に飛び込みでもしたかのような顔をして興味深げに見回していた。朝の開店が始まった国際空港の土産物店や免税店のきらびやかさが、3人の目を引く。祐子は周囲に細心の注意を払った。国際空港には様々な人々が蠢いている。アイリーン達の興味津々な眼差しを余所に、祐子は4人を連れて再びラウンジに入った。それが一番安全だと踏んでいた。しかし、そこは思いがけず混雑していた。空席を探そうと辺りを見回していると、ふと新聞を読んでいる背広を着た紳士達の会話が耳に入った。イタリア人だ。4人でぼそぼそと話をしている。春子の顔色がサッと変わった。祐子も戦慄を覚え、直ぐにラウンジを出た。

「ママ、あの人達、政治家のようです。私、怖い」

「春子さん、意識し過ぎちゃだめよ。そうすると怖れを感じる場面を引き寄せてしまうからね。彼らはイタリアの普通のビジネスマンよ」

祐子は3人とスバハを連れて、出発ゲートに向かい、そこでゲートがオープンするのを待った。アイリーンとキルリエは幸せそうだった。春子はまだ怯えている。日本人のパイロットとスチュワーデスが目の前を通り過ぎてゲートに消えた。祐子はこれまであまり意識していなかったフライトの案内を確認した。フライト名はエアー・フランスになっている。ゲートを間違えたのかと思い、出発スケジュール掲示板を確認した。エア・アライアンスという航空機会社の連携でフライトはJALだった。

「春子さん、日本の飛行機よ。もう、日本語で大丈夫よ」

「えっ？でもチケットにはエア・フランスとなっているのに……」

4人は再び特別の扱いを受け、日本に向かうファーストクラスのシートに案内された。スチュワーデスは日本人だ。優しくスバハとアイリーンのシート周りの世話をしてくれた。パイロットが挨拶に来た。「チーフパーサーの馬淵です。JALのフライトをご利用頂きありがとうございます。お子様をお連れと伺っておりますが、心地よいひとときをお過ごし頂きたく存じます。サービスに努めますので、何なりとご用命ください」

春子は「助かった！」と思った。

「由宇さん、いよいよ日本っすね」

その声にびっくりして祐子は振り向いた。鹿島康介が微笑んで立っていた。春子とアイリーンが軽く会釈した。キルリエもふたりを真似て頭を下げた。

「鹿島さんどうして、此処に？あっ、いろいろと心遣いして頂いて本当にありがとうございました」

「どうですか？ファーストクラスの旅もいっしょう？俺も一緒に帰国することにしたっす」

5人はスチュワーデスの持って来たシャンパンで乾杯した。スバハもジュースを掲げて乾杯に加わった。オードブルも用意された。ファーストクラスのサービスは至れり尽くせりだった。

祐子は自分達を背後から見守ってくれる康介の暖かい眼差しに、目が潤むのを感じた。

「亜紀、戻ってくるのよ。日本で会えるわ」

「えっ？何を言ってるっす？亜紀さん、死んだっすよ。ママ、いや、由宇さんしっかりしてください。もう、酔いが回ったっすか？」

「もう、生き返っている頃よ。あの人が蘇生させるって」

「あの人って、内観さんすか。だけど、あん人、まだ仮出所になってないっしょ？」

「まあ、日本に着けば分かるわ」

賢は仮出所の準備を進めた。準備とは謂っても服役中の刑務所の中で特にやるべきことがあるわけではない。唯一のこと―亜希子の蘇生―を出所までにやり遂げようと決めていた。出所まであと5日に迫った晩、賢は瞑想し、幽体離脱で自分の身体から抜け出した。一旦幽界を脱け、トンネルを脱けて霊界に入った。賢は何時しか広い平原の中に立っていた。意識を亜希子に向けると、自然に亜希子の住んでいる家の前に移動していた。そこで亜希子に会うことを意識すると、ドアが開いて亜希子が姿を顕した。亜希子は賢の姿を認めると、駆け寄って来て賢の胸に飛び込んだ。

「あなた、久しぶりですわね。お元気でいらっしゃいましたか？」

賢は亜希子に自分の置かれている立場を説明した。

「それではもうじき出所できるのですね。あなた、どうして刑を引き受けたのですか？ 弁護士さんにお任せすれば情状酌量で釈放されたでしょうに」

「いや、自分の行った行為の結果だから、服役したんだ。裁判で争えばまた新たな歪みを生み出してしまうからね・・・それより、今日来たのは、そろそろ亜希子に現象界に戻ってもらおうと思ってね。霊界の人々を導く仕事はどの程度進んでいるのかな？」

「はい、ムクウさんは大体1パーセントほどの人の認識が変化したとおっしゃっています。わたくしも、そろそろあなたの元に戻りたいと思っていました。それでムクウさんに相談したのですが、ムクウさんのお力では一度死んだ人間を蘇生させることは難しいとおっしゃいました。あなたにお頼みして、わたくし自身の意識とあなたの意識が1つになって、その状態であなたの意識で現象界に顕現すれば、蘇生できるかも知れないとおっしゃっていました」

「やはりそうか。それは失踪から帰還した時の方法と似ているな。虚次元のエネルギーを実次元のエネルギーに変換する作業だね。同時に魂の次元を移す必要もあるね。それと、一番難しいのは生命の絆―銀線を由仁の工場の地下に横たわっている君の亡骸に繋ぐことだ。銀線を新たに

設けるのなら、生まれ変わりの繭と呼ばれるカプセルに入れば良い。普通の誕生では繭の状態から次元を越えて魂を受け取る母親の子宮に移るのだが、その方法で戻ると、亜希子の意識はリセットされて記憶も消えてしまう。だからそれはだめだ。そこで、俺が君と1つになった状態で、自分の肉体に戻ったらどうかと考えた。先ず君にバイロケーションしてもらい、片方の存在が生まれ変わりの繭に入り、もう片方の存在が俺と結合した状態になり、俺の意識で俺の身体に戻る。俺の肉体に戻った俺の意識には君の意識が融合しているが、君の意識は霊界にあり、もう片方が君を身ごもることになる母親の子宮に入る。そこで僕たちは意識の結合を解き、片方の君は俺から離れ、子宮に入ったもう片方の魂と結合して、君の骸の中にテレポーションする。それが唯一記憶を失わずに蘇生できる方法だと思う。その母親の子宮の中で、肉体的に受精した卵子は一旦入った魂が、抜け出すので、細胞分裂のプロセスには入れずに、排卵されてしまう。だから妊娠することはない」

「分かりましたわ。とても複雑なのですね。でもわたくし、バイロケーションはしたことありません。それに、この霊界であなたと交わることは難しいのではないかと心配です。相手の肉体を求める意識を持つと、魂の下降が起きてしまい、別の空間に移動してしまいますから」

「霊界でのバイロケーションはそれほど難しくないと思うよ。意識を分離すれば良いんだからね。ぼくと一体になるのも意外に簡単だよ。ここ霊界ではもう肉体は無いから、抱き合って無心になって意識を集中した状態に入れば1つになれるはずだ。相手の肉体に執着しなければ、魂の下降もないと思うよ」

二人は試験的に1つになってみることにした。亜希子は意識を賢に集中し、賢は亜希子に集中した。ふたりの身体が次第に重なってゆき、1つの球になった。それはふたりにとって、かつて経験したことのない、肉体的な喜びを越えた、めまいのするほど至福に満ちた瞬間だった。やがて球は2つに分裂し、ふたりは元の姿に戻った。

「できたね、亜紀。今度はバイロケーションだ。心を空しく、純粋な状態に保って、此処と家の中の2カ所を同時に意識してみてごらん」

亜希子は瞑目し、暫くして目を開いた。

「あなた、大丈夫です。バイロケーションできますわ。わたくしはここに居て、同時に家の中にも居ました」

「あとは、生まれ変わりの繭だけど、これは神聖なプロセスだからテストしてみるわけにはいかない。一か八かでやるしかない」

その晩は、賢はそのまま刑務所の布団に戻った。翌日の夜、12時近くまで待ってから、賢は布団に細工をしてカモフラージュし、由仁の工場の地下にテレポーテーションした。賢は意識の目を開いた。真っ暗闇だったが意識が地下室の細部まで把握できる。賢は亜希子が戻ったときのことを考えて、壁にある照明のスイッチを入れた。地下室内がパット明るくなった。賢もその明るさを感じた。今まで気付かなかったが、肉体の目が明らかに光を感じている。地下室の隅に梱包材で包まれた亜希子の棺が横たわっている。賢は梱包材を取り除き、棺の蓋を開けた。白い帷子に身を包んだ亜希子の亡骸が横たわっている。賢は亜希子の頬に手を当ててみた。ひんやりとした冷たさが掌の熱を吸い取ってゆく。賢は亜希子の身体を温めることにした。帷子の襟を開き檀中に右掌を当て、左手でムドラ（手印）を組んだ。賢は意識を集中して宇宙のエネルギーであるプラナを左手から吸入し、自分の身体を経由させて亜希子の檀中に流し込んだ。1時間ほどプラナを注入し続けた。亜希子の細胞は完全にその機能を停止している。熱は次第に亜希子の身中に伝わり、亜希子の遺体の温度が次第に上昇してきた。白かった顔もほんのり赤みを帯びてきたように感じる。しかし、心臓は止まったままである。賢は全裸になり、亜希子のうえの帷子を広げて、裸体になった亜希子の屍の上に覆い被さるように身体を重ねた。こうすれば暖かくなった亜希子の体温を保つことができる。もう、亜希子の身体に冷たさを感じない。賢は瞑目し、幽体離脱した。幽界を通り貫け、霊界に入った。意識を亜希子に向けて、直ぐに亜希子が現れた。

「あなた、お待ちしておりましたわ。ムクウさんに生まれ変わりの繭への入り方も教わって参りましたわ」

「そうか。俺はさっき、お前の遺体の温度を暖めて来た。さあ、これか

らはじめよう。まず、バイロケーションして、片方の身体をここに残し、他方は繭の中に入るんだ」

少しすると亜希子が言った。

「あなた、わたくしの片方は今、繭の中に居て、母胎が受胎するのを待っています。北海道の札幌市内に住んでいる若いご夫婦にわたくしの魂を受け止めてもらうことにいたしました。このご夫婦は何時も、この時間に夜の営みをなさいます。受精はするようですが、なかなか着床しないようです。今日もお二人がベッドに入っているのを確認致しました。あ、今お二人は何時ものようにはじめられました。あなた・・・」

賢と亜希子は抱き合った。練習したように直ぐに一体となり、球形の存在に変化した。ふたりの意識は一気に賢の肉体に戻るように働いた。賢の意識は亜希子の遺骸の上にある自分の肉体に戻った。亜希子の意識が自分に結びついているのが分かる。

「亜希子、お前はまだ俺だ。俺の身体の下にはお前の身体がある。今俺から抜け出しても意識をこの場に固定しておかなくてはいけないぞ。多分このままではお前は自分の身体には戻れない。もう一つの意識は受胎した卵子の中にあるのか？」

「いいえ、まだ受胎していません。今、女性の意識が非常に高い振動を起こしています・・・あなた、受胎が起きました。わたくしの片割れは女性の身体の中に入っています」

「亜希子、俺たち分離するぞ。さあ、俺から離れたら、直ぐに片割れと一体になって、意識を俺の身体の下にある、君の身体の中に戻すんだ、いいな」

亜希子の意識は賢から切り離された。亜希子は直ぐに片割れとの結合を果たし、バイロケーションを解いた。そして、強く賢の下にある自分の肉体に自分の意識を注ぎ込んだ。賢は自分の胸に亜希子の鼓動を感じた。

「うまくいったぞ、亜希子、うまくいった」

亜希子はまだ目を開けないが、微かに呼吸し始めた。賢は上半身を少し起こして亜希子の両頬を両手で軽く挟み、額に口づけした。

「あ、あなた・・・わたくし、生き返ったのですね」

亜希子はうっすらと目を開けた。透き通るように美しい亜希子の頬に一筋の涙が流れた。

「そうだ、生き返った。亜希子……」

「あなた、愛しています」

二人はそのまま暫く抱き合っていたが、やがて賢は棺桶から出て、亜希子の背に手を回し、そっと亜希子を抱き起こし、亜希子が棺桶から出るのが手助けした。亜希子は自分が帷子1枚しか羽織ってないことに気付き、襟を合わせてハッとしたように言った。

「あなた、わたくしの傷はどうなったのかしら？確か、胸に銃弾を受けたはずなのに、消えてしまっていますわ」

「君が死んだ後、祐子が治したんだ。泣きながら必死に治した。あのとき、肉体の機能は全て正常に戻ったんだ」

亜希子の目から大粒の涙が流れ落ちた。

「これから由仁の家にテレポーテーションしよう。俺の意識に同調して……さあ移動するぞ」

亜希子は無言で頷いた。賢は亜希子の手を握って自分の寝室にテレポーテーションした。ふたりは賢の部屋のベッドサイドに顕れた。賢は意識の目を開け、部屋の照明を点けた。誰も居ない。ベッドはきちんとメイキングされている。賢は亜希子に自分のパジャマを着せてから、ベッドに入っているように言った。亜希子がシーツの中に潜り込むと、賢は直ぐにリビングルームに行った。玄関ドアの内側にある薄暗い常夜灯がリビング全体を浮き上がらせている。賢は留置所に入所して以来一度も由仁の家には戻っていない。しかし、何処もかしこも、賢がこの家を出たときのままだった。賢はできるだけ音を立てないように注意して、ポットから自分のカップに白湯を注いで部屋に戻ろうとした、その時、廊下に通じるドアが開いて、梓がネグリジェ姿で顕れた。梓は賢の方を見つめて呆然と佇んだまま身動きできなかった。

「だ、だれ？」

「梓、俺だ、賢だよ」

「あなたなの？あなたなのね」

そう言うと梓は賢の元に駆け寄って来た。梓は一瞬立ち止まり、賢のおをしげしげと見詰め、賢の胸に飛び込んだ。

「あなた、刑務所を抜け出しても大丈夫なのですか？もうじき解放されるのですから、慎重にされた方がいいのに……」

「布団の下にダミーを置いて、テレポーテーションで来たから大丈夫だ。梓、亜希子が生き返ったぞ」

「えっ？何ですって？」

「亜希子が生き返ったのだ。今、おれの部屋に連れて来て、ベッドに寝かせてある」

「あなた、愛子さんと原さんを起こします。あなた、利他を見てあげてください」

「うん、そうだな、みんなに会って説明しておいた方がいいな。利他は寝ているのだろうな？」

「ええ、今日はおとなしかったんですよ。さっき絵本を読んであげて寝かし付けました」

梓は愛子と原を起こしにリビングを出てゆき、利他を抱いて戻って来た。利他はすっかり寝入っている。賢は梓からそっと利他を受け取った。動かされても利他は心地よさそうに寝息を立てている。少しして愛子と原がきょろきょろしながらリビングに入って来た。

「賢パパ、どうしたの？テレポーテーションしたのね」

「抜け出しても大丈夫ですか？」

賢は梓がまだふたりに亜希子の事を話していないのを知った。

「原さん、愛子、心配掛けたね。もう少しで出所できるからね。それから、驚かないでくださいね。亜希子が生き返ったんです」

「えっ！亜希子さん、何処に居るんですか？」

「賢パパ、何処？何処に居るの？」

賢は急ぎたてる3人を背に、利他を抱いたまま自分の部屋に連れて行った。亜希子は外の気配を感じ、ベッドから出て縁に腰掛けていた。3人は亜希子の元に駆け寄った。梓が言った。

「亜希子さん、良かった。生き返ったのですね。良かった」

原が亜希子に向かって訊いた。

「賢さんが生き返らせたのですか？」

「ええ、とても難しい方法で……皆さん、わたくしをお守りくださいまして、ありがとうございます。おかげさまで、以前のままのわたくしとして生き返ることができました」

3人の女性は抱き合って涙を流した。原が言った。

「もう、生死を超えられるんですね。魂って一体何なんでしょうね」

「僕は刑務所の中でいろいろ考え、実験をして確認してきました。仮出所になったら、分かったこととお話しします。生命ってとても素晴らしい、とっても美しいものです。無限の輝きを放っているものです。魂は全てです。全てはエネルギーの振動です。エネルギーのダンスです。踊りです。歌です。そしてエネルギーは光です。心も、意識も、肉体も、岩も全部一緒です。光です。エネルギーの振動です。エネルギーは魂です。魂は歓喜によって存在しているんですよ。僕は一旦刑務所に戻ります。出所したらまたお話ししましょう。みんな、亜紀のことをよろしくお願いします」

「はい、あなた、分かりました。精一杯亜希子さんを守ります」

「梓さん、明日おごちそうにしましょう。お祝いしましょう」

「賢さん、任せておいてください。亜希子さん、安心してください。もう大丈夫です」

賢は亜希子に白湯の入ったカップを渡した。亜希子は両手でそれを口に持って行き、少しずつ飲んだ。

「亜希子さん、お風呂に入るといいわ。私のパジャマですけど、用意しておきます」

「みなさん、ありがとうございます」

賢は刑務所の監獄にテレポーテーションし、抜け出すときに何時も用意しておくエーテル体のクッションを消し去って、布団の中に実体化した。やけに周りが騒々しい。どうやら部屋の中に監視官が2、3人入っているらしい。

「そんな馬鹿なことがあるか、鍵も掛かっていたじゃないか」

「いや、確かに283番の代わりにクッションのような物が見えた」
賢の布団がバツと剥がされた。

「ほら見ろ、居るじゃないか」

「いや、確か、さっきは居なかった・・・あれ、変だな、確か、さっき
283番は居なくて、クッションのようなものがあったんだが・・・」

「山本、寝ぼけているんじゃないぞ。たとえ夜勤だからと云って、しつ
かりしろ！意識だけはっきりさせておけ！」

賢は身体をゆっくり起こして言った。

「先生、どうされたのですか？」

「い、いや、何でもない。283番、寢床に戻りなさい」

「はい、休ませて頂きます」

賢がそう答えると、3人の監視官はぶつぶつ言いながら出て行った。賢
は胸を撫で下ろした。

亜希子は祐子を出迎えるため、飛行機が到着する前日に東京に出て、空
港のホテルに一泊し、翌朝祐子を出迎えたいと梓に言った。梓は亜希子
の身体を気遣って押しとどまらせようとしたが、亜希子は涙を流して梓
に許しを請うた。梓は祐子を出迎えに向かう予定の原に、亜希子のこと
を「くれぐれもよろしくお願いします」と頼んだ。原はあっけらかんと
して言った。

「梓さん、心配しないでください。どんなことがあっても会いたい人
を出迎えるのですから、大丈夫ですよ。僕が亜希子さんのことはお守りし
ます」

前日の夜、亜希子はホテルのベッドに入ると、これまでの人生が走馬燈
のように眉間に映し出された。初めに自分の生まれる前の状態まで遡り、
母の胎内に入ったときから、両親を失うまでの場面を見た。そして、こ
れまで藤代の両親に育てられている自分の姿を見た。その藤代の両親が
隠してきた嬰兒の頃の記憶が蘇って来た。自分が祐子とふたり並べられ
て母の横に寝かされている。自分が空腹を訴え、母の乳房を吸っている
映像を見詰めていた。赤児の祐子が泣いて、母が左手で祐子を抱き上げ

る。ふたりに同時に授乳している姿が見えた。もう、母への悲しみは湧かない。母とは霊界で一緒に生活していた。自分が生き返るとき、母はまた会おうと言った。亜希子は自分の生きていたこの現象界の出来事を映画のように見詰めていた。お嬢様として育てられ、いろいろな習いごとをした。賢と出会った。命を救われた。そして直ぐに賢を見失った。何年かして再び会うことができた。楽しい日々だった。そして、再び別れた。姉の祐子と真の再会を果たした。暫くしてコンゴで死んだ。霊界で多くの人々に「命の永遠」を説いた。そして賢に蘇生させてもらった。今、2つに分離したもう片方の自分を出迎えに行くのだ。亜希子は朝まで寝付けなかった。祐子の事が頭の中を駆け巡った。

空港には数馬と亮子が来ていた。ふたりは亜希子の蘇生に言葉を失った。

「数馬さん、亮子さん」

「亜希子さん、生き返ったのですね」

数馬の声に周りに居る出迎えの人々が怪訝な顔で数馬の方を見た。

「良かったわ。嬉しい！」

亮子が悦びの嬌声を上げ、自分の声にはずかしそうに下を向いた。

「賢さんに助けて頂きました」

「ええっ!？」

数馬が言った。しかしそれ以上は訊かなかった。亜希子の胸は激しく脈打っていた。暫くして祐子がEXITに姿を顕した。祐子は直ぐに亜希子を見付けた。亜希子はロープの際に駆け寄り身を乗り出した。祐子もカートを放り出して亜希子の元に駆け寄った。ふたりは一言も言葉を発さずにロープを間に挟んだまま強く抱き合った。頬をぐっしょり濡らして無言で抱き合っているふたりを春子はじっと見詰めていた。アイリーンは生きている亜希子の姿を見て、びっくりして目を丸くしている。キルリエは何が起きたのかよく分からないようだった。スバハは祐子の姿をじっと見詰めていた。祐子は亜希子をそっと離して言った。

「お帰り」

「お姉様、お帰りなさい」

祐子は春子に振り向いて言った。

「ごめんなさいね。妹なのよ」

「祐子お姉様、良かったですね。私も嬉しい」

祐子は駆け寄ってきたキルリエに向かって言った。

「*****」(キルリエ、亜紀のこと覚えているかしら？生き返ったのよ)

「*****」(はい、優しいアキお姉様のことを忘れるはずありません。アキお姉様が生き返られて、とっても嬉しいです。でも、どうやって？.....)

祐子は微笑みながらキルリエを抱き寄せた。

「春子さん、これからは5人姉妹よ」

春子は微笑んで、キルリエと遅れて来たアイリーンの方を窺った。

「*****」(アキさん、生きていたのですね。良かった)

スバハの手を引いてアイリーンが祐子の横に来た。

「*****」(アイリーン、これからいろいろな人たちを紹介するわ。あなたとキルリエは、今は先ず、日本に馴染んでね。あなた達は一生此処で生きるのだから)

アイリーンとキルリエの目に涙が浮かんだ。

午前11時に賢は入所したときに取り上げられた身の回りの物を渡され、それを手にして網走刑務所の門を出た。

目の前の道路は黒山の人で埋め尽くされていた。色とりどりの小鳥たちがさえずりながら空を飛び廻り、沢山の蝶が舞っている。正面に梓の姿がある。利他の手を引いて門の脇に立っている。その横には賢の両親、愛子、原、数馬の姿がある。右手の大勢の人たちのずっと遠くに一条の光の輝きが見えた。それは意識による認識ではなく、明らかに目に映った黄金の光だった。賢はそのまぶしさに瞬きした。光の中にひとりの女性の姿がある。祐子だ。黄金の輝きは祐子の身体から発せられていた。右手のずっと遠方から白い光の輝きが見える。そこに白い服を身につけた女性の姿が浮かび上がった。亜希子だ。亜希子の周囲は白い光で満たされていて、亜希子の姿が浮き上がって見える。祐子と亜希子の姿が天

空に浮き上がった。ふたりから輝き出た光が人々の上に注がれた。ふたりはゆっくり賢の居る刑務所の門の前に向かって移動して来た。数え切れない数の人々は唯呆然と祐子の輝きと亜希子のきらめきを見詰めていた。ふたりは次第に近付き、寄り添うようにして賢達の50メートルほど手前まで滑空し上空に滞空した。賢は自分の身体が引き上げられてゆくを感じた。賢の身体が上昇すると、ふたりは虚空を滑るように賢の元に移動して来た。ふたりは賢の滞空している上空にまで到達すると、祐子が賢の右横に、亜希子が左側に並んで大衆の方を向いて立った。ふたりの女性の輝きが賢を包み込んだとき、賢は自分の肉体の目が見えるようになったのを感じた。3人は天空に佇んで下界を見渡した。其処には10万人を越える人たちが集まっていた。3人の姿を見て、地に膝を突いて祈りのポーズを取っている者もいる。両掌を合わせて見上げている者もいる。道路に平伏している者もいる。賢は出迎えに来てくれた人々に目を向けた。一人一人の顔がはっきりと見えた。賢は空に向けて両手を広げた。太陽の日差しが輝く光のダストとなって人々の上に振り注いだ。賢は人々に向かってゆっくり話し掛けた。

「皆さん、僕のためにこんな遠くにまで来てくださって、本当にありがとうございます。自分の誤った判断で多くの人たちに多大な迷惑をおかけしたことを深くお詫び致します。そんな僕に対して、かくも大勢の人たちが出迎えてくださったことに、無上の喜びを覚えます。皆様に、最大の感謝の意を表します。私たちは今、この世界のパラダイムが変化する現場に居合わせています。ご覧ください。私たち3人は空中に浮かんでいます。今は特別のように感じるかも知れませんが、でもこれはいずれ誰にでもできるようになります。皆さんができると本当に確信すればできることなのです。今皆さんに聞こえている私の声も、今までのように肉体の耳で聞いているわけではありません。皆さんの心に響いているのです。ご覧ください。私たちを取り囲んでいる光が皆様に注がれているのを。全ては光なのです。この光は私であり、あなたであり、動物たちであり、地球を覆う植物であり、海であり、空であり、石であり、あらゆる物なのです。そして、この光全体が、あなた方の考えていた絶対的

な存在、根元神そのものなのです。それは決して人格を持った神ではありません。その根元神はこの大宇宙という自分自身の中に無数の分身としての自分を観察者として映し出しています。それがあなたであり、私なのです。私とあなたは1つなのです。根元神から映し出された私たちが、別々の存在のように感じるのは錯覚なのです。何かを得ようとして必死に生きるときはその錯覚も必要です。その錯覚によって自我が生まれ、自我から執着が生まれ、執着から新しい物が創り出されるのです。この錯覚も今までは必要でした。それが、私たちが生きる動機でもあったのです。でももう新しい物を創り出すプロセスは収束に向かいます。これからは次のステップに移らなくてはなりません。次のステップは本来の認識に戻ることです。全ての人が一体である事を思い出し、本来の自分の姿を顕して生きてゆくことです。自他は同じだから人を慈しむことは自分を慈しむことなのです。あなたの観ている物、聞いている音、味わっている味、嗅いでいる臭い、感じている物、それらは全て私の観ている物、聞いている音、味わっている味、嗅いでいる香り、感じている物なのです。私とあなたが同じであるなら、どうして、私たちはこの世界に生きる必要があるのでしょうか？それは、この人生を観察し、経験するためなのです。あらゆる姿となって経験するためなのです。その経験が自分の本質に反映してこの宇宙を形作ります。自分で自分を創るのです。この地球も宇宙も全て、自分が存在するから存在しているのです。自分自身なのです。忘れないでください。私たちは美しい物を観て感動し、美しい音を聞いて踊り出す為に生きているのです。さあ、意識を全開して、世界を味わい、感動してください。これが次の時代の姿です。私たちは2つの世界に生きています。1つはこの実次元の世界、もう一つは虚次元の世界です。これからの時代はこれらの2つの世界を実感し、その中で生きる時代なのです。空も飛べます。好きなときに誰とでもコミュニケーションを取ることができます。好きなときに好きな物を手に入れることができます。生も死も同じになります。一生病に煩わされることが無くなります。これからは手に手を取り合って、この大自然を謳歌し、共に感動と悦びの中に生きてゆきましょう」

その場に居合わせた大半の人々には、賢の話している内容がよく理解できなかった。そのような人々の間から何人かの人々の身体が1メートルほど中空に浮き上がった。周囲に居る人々は驚いた。尻餅を突いてしまう人も居た。

「そうです。自分ができると思うことから全て始まります。そう確信し、そうしようと意識すると何でもできます。これからの世界はそれが容易にできるようになる世界です。そして、その全体の意識を否定し、反対方向に作用させようとする者はこの世界に住むことができなくなります。それは、自然に起こってくることです。世界のパラダイムがシフトするときには、自分を本源の力に委ね、世界の動きに同調していることが必要です。そうしないと、次の世界に移行するときに、波に乗れず、溺れ、取り残されて、また古い世界のサイクルに戻ってしまうこととなります。数千年のサイクルです。皆さん、心を清くし、自我を消して、大きな波—大自然の営みに身を任せてください。嘗て無いような美しい世界が訪れます。本当は次の世界は既に訪れているのですが、誰もその事に気付いていません。もう暫くすると誰もがそのことに気付くはずです」

原は賢の話に大きく頷いた。梓も賢の話がよく分かった。何度となく聞いた話だった。賢は自分に意識を向けている全ての人たち一人一人に同時に話し掛けた。父親の心に賢の声が響いた。

「ダディ、心配を掛けてごめんなさい。やっと仮釈放されました。ダディが僕に与えてくれた特殊な教育のおかげで、僕は新しい人間としての生き方に辿り着くことができました。これからはこの生き方で自分の人生を生き抜きます。ダディも頑張ってください」

母親の心には優しい言葉として響いてきた。

「マミイ、悲しませてしまっでごめんなさい。何時も面会に来てくれてありがとう。毎月マミイと会うことができたので、僕も元気に生きることができました。これからは、マミイに心配を掛けないようにして、穏やかに生きてゆきます。マミイ、出所と同時に僕の目は見えるようになりました。心配を掛けてしまっでごめんなさい。マミイ、本当にありがとう、マミイ、あなたのことを心から愛しています」

梓は賢が祐子、亜希子と3人で空中に浮いているのを見て、自分がその中に加われないことを寂しく想い、利他の頭を抱き寄せた。その時梓の胸に賢の言葉が響いてきた。

「梓、服役中は本当にありがとう。君のおかげで俺はこの受刑期間を耐え抜くことができた。そして、俺と君の愛娘利他を生んでくれてありがとう。利他がすくすくと育っているのを見ると本当に嬉しい。この空中に浮いている俺たち3人の姿を見て悲しむことはない。此処に顕れている3人の姿はこれからの世界の先駆けを示すものだ。天の計画だ。実と虚との統合と創造、3身一体の象徴だ。俺とお前とは今世、出会うべくして出会い、肉体と心で結ばれた夫婦だ。俺たちは1つだ。これは揺るぎ無いことだ。これからは何時も一緒に生きてゆこう」

梓の心に光が差し込んだ。原の胸にも賢の声が届いた。

「原さん、原さんが語録で教えてくれたことがベースとなって、現在顕れている現象界の姿が今はっきり見えました。勿論根源を理解できたわけではありませんが、それはこれから生きてゆく道で体験することになるでしょう」

愛子にもメッセージが届いた。

「愛子、これからは次の世界に生きる人間の姿をみんなに示す役割をになって生きてくれ。お前の生き方が、他の人々の手本になる。精一杯努力し、精一杯人生を楽しんで欲しい」

康子は賢が出所できた悦びに、打ち震え、涙を流しながら、梓達の目に触れないように、人混みの中から天空の3人を見詰めていた。康子の耳に声が聞こえた。

「康子、ありがとう、君のことを心から愛しているよ。僕のことをこれほどまでに愛してくれて、本当に嬉しい。君の優しい心が、どれほど僕を支えてくれたか知れない。これからは何時も君の近くに居て、君を愛して生きてゆくよ」

康子は全員に向けて発せられたメッセージを受け取った後、自分だけに届いたメッセージを聞いて、感動にむせび泣いた。どうやって賢と一緒に生きて行くことになるのだろうと、期待に胸が膨らみ、鼓動が激しく

なった。

自分に届いたメッセージを胸に感じて数馬は感激した。

「数馬、これまで共に生きてくれてありがとう。お前のおかげで、この世界を新しい方向に導くことができた。試行サイトが成功し、そのモデルが次の現実的モデルを生み出した。それが次の世界の現象界の基盤になってゆくことを確信している。人々が自分の利益という錯覚と迷妄を消し去って助け合い、睦み合って生きる世界だ。そしてその骨格が試行サイトで培った新しい生活基盤によって与えられたことは素晴らしいことだ。数馬、これからもよろしく頼む」

ゆきへのメッセージはゆきの心を高鳴らせた。

「ゆきさん、何時もお手紙ありがとうございます。君と、太郎君、信次君、それからご両親からの励ましで、僕はとても勇気付けられ、刑務所の生活を頑張り抜くことができました。ゆきさんが元気に頑張っているのです、僕もしっかり生きなくてはと思っています。これからはこのような失敗をしでかさないように注意して生きてゆきます。ゆきさんも素晴らしい人生を生きてくださいね」

賢は太郎や信次、そして3人の両親にもメッセージを送った。

多くの人たちが賢からのダイレクトのメッセージを受け取り、自分と賢とが1対1で向き合っているかのような感覚を覚えた。

賢は自分の状態を分かっているはずの由美にもメッセージを送った。

「由美、君は僕のことは全て見通せているだろう。こんなに沢山の人たちが僕を出迎えてくれた。本当に嬉しい。君にもこの僕の悦びの感情が分かるはずだ。君は元気だろうか？僕は由美の意識の中に入り込むことは止めているから、君が今、どうしているか分からないが、君が元気で居てくれることを願っている。僕たちは何度かの生まれ変わりで共に生きてきた間柄だ。今世は君との一体化が実現して、お互い、相手を自分の中に存在させることができるようになった。これから、僕は大自然の中で自然に全託して生きてゆくつもりだ。君は自分の生きる道を見つけて生きるのがいい。何処で生きても、僕たちは結ばれているから、現象界での生活の形はどうでもいい。由美、元気で頑張っていて欲しい」

賢が意識で繋がった人全てにメッセージを送り終わると、祐子が全員に向って語り掛けた。

「みなさん、今日は内観賢さんの出所をお出迎えくださりありがとうございます。わたくしは昨日アフリカから戻ってまいりました崎野由宇です。皆様もご存じと思いますが、今アフリカは長かった暗闇を脱け出し、新しい時代に向って進み始めました。これからアフリカの歩む足跡を是非ご覧戴きたいと思います。そこに住む全ての人々が手と手を携えて生きてゆく世界です。私たちは個々の寄せ集めではありません。私とあなたは同じ存在なのです。もうこれまでのような、自分だけの華を咲かせる時代は終わりました。これからはみんなで1つの美しい社会を創る時代になります。共に生きて参りましょう。今日のこの素晴らしい日を記念して、皆様に一振りの花をプレゼントします。皆様右手を出して、掌を見詰めていてください。そこに踊れる花は私から皆様へのお礼のプレゼントです」

そこに佇んでいた人々は右手を挙げて掌を見詰めた。そこにひとつりの花が踊れてきた。あちこちからどよめきが起こった。桜の花は暫く人々の掌に留まっていたが、やがて霞のごとく消えていった。全員が拍手をした。次に亜希子が話した。

「みなさま、今日は愛する内観賢さんをお出迎えくださりまして、本当にありがとうございます。わたくしは崎野亜紀と申します。わたくしは此処にいらっやいます崎野由宇お姉様と双子の妹です。わたくしは3年前にアフリカで銃撃を受けて、命を落としました。皆様も、既にオーラビジョンシステムの出現によって死後の世界がある事をご理解頂けたことと思いますが、死後の世界は本当にあります。わたくしは死んでそこにおりました。死後の世界は時間も空間もこの現象界の世界と全く異なっています。この現象界の世界に宇宙があるように、死後の世界にも無限の宇宙があります。この生命の銀の糸が切れて、この世界を去り死後の世界に移ると直ぐに、幽界という現象界と霊界の中間の世界に入ります。そしてそこから自分の意識に応じて霊界に移ります。霊界にある宇宙には、太陽が2つあります。大自然もあります。わたくしはそこ

で長い年月を過ごしました。多くの人々とこの世界が実の世界と虚の世界で構成されていることを確認し合いました。今霊界では命が永遠であること、虚実の両方の世界が重畳して世界ができていることを多くの人が認識しています。皆さんも是非、その事を認識してください。わたくしはつい先日、此処におられる内観賢さんに導かれて死後の世界からこの現象界に戻って参りました。これからは大自然と調和して生きてゆくつもりです。もう生と死の間には垣根はありません。死に際して肉体は姿を変え、元の要素に戻ってゆきますが、魂は不変です。そして、この肉体も心も全て、わたくしたちが生み出されてきた根源からの、この世界への投影なのです。死んでも死にません。生きています。皆様、絶望の淵にある方々はそこから抜け出して、その閉ざされた思考空間から離れ、永遠の中に生きてください。夢と希望を抱いて、この人生を謳歌してください。みなさま、本当にありがとうございました」

殆どの人たちが亜希子の話真剣に意識を集中した。賢が再び空に向って両手を広げ、空を仰ぎ見た。すると空一面が黄金色に変化し、天空に3重の虹が架かった。3人は静かに天空に向って上昇し始めた。それまで輝いていた太陽が3つに別れ、輝きを増した。人々はそのまぶしさに目を開いていられないほどだった。天からきらきら輝く金粉が降り注いだ。3人は静かに下降し網走刑務所の前に降り立った。刑務所の前には梓の用意した大型バスが停まっていた。3人は大型バスに乗車した。それに続いて賢の身内の者達や友人達が次々に乗り込んだ。人々がバスの通る道を空け、手を振って賢を送り出してくれた。3人は何度も何度も人々に向って深く頭を下げた。バスが人垣の切れる辺りに差し掛かったとき、右手の木陰で爆発音がし、煙が上がった。人々の悲鳴が聞こえる。その近くの人々はその煙から直径10メートルほど遠ざかり、煙の周囲を取り囲んだ。バスがブレーキを掛けて停止した。賢は意識をその爆発に向けた。一人の男がそこに倒れている。男の横に信管の爆発したライフルが投げ出されている。男はやけどを負っているようだ。賢には男が自分達を狙って射撃したのだということが分かった。担架が持ち込まれ、警察官が男を乗せて運び去った。

その日、由仁の家では賢の仮出所のパーティが催された。1週間前に梓と愛子は手分けして、招待者に連絡を入れた。そして2日前からパーティの準備を始めた。梓の喜びようは、まるで初めて遊園地に連れて行ってもらったときの幼子のように、パーティの準備を進めながら一日中歌を唄っていた。利他が梓の歌声に合わせてリビングの中を跳び廻っている。まるでふたりでダンスをしているようだった。

梓が入り口のドアを開けた。中からモーツアルトのディベルティメント17番が聞こえてきた。梓が朝からパーティに相応しい曲を選んでリピート・プレイにセットしておいたのだ。

「さあ、あなた、お父様、お母様、さあどうぞお入りください。皆さん中に入って下さいな」

賢の父と母が先ず中に入った。リビングの中は色とりどりの花々で一杯に埋め尽くされている。

「Wow! Fantastic! What the beautiful flowers they are!」（まあ、すてき！お花がなんときれいなんでしょう！）

母は感激の声を上げた。ソファーや椅子は隅の方に移動されていて、ダイニングテーブルの上には菓子や果物を盛りつけた籠が並べられている。賢が部屋に入ると、亜希子が続いた。祐子はスバハの手を取り、アイリーンとキルリエ、春子を促して中に入った。数馬と亮子はその後から続き、数馬夫妻、原と愛子が中に入ると、入り口のところに康介、ゆきの家族と康子が躊躇して佇んでいた。梓が言った。

「さあ、ゆきさんのご家族の皆さん、鹿島さんそれに康子さん、中に入って下さいね」

ゆきの家族が遠慮がちに中に入ると、康子がすまなそうな目つきで梓を見て頭を下げた。梓に促されて、康子が漸く中に入ると、康介がそれに続き、最後に梓が利他の手を引いて部屋に入りドアを閉めた。

梓は急いでキッチンに向かった。数馬が梓の後を追い、冷蔵庫からシャンパンとジュースのボトルを4、5本取り出して立て続けに開け、用意されたグラスに注いだ。シャンパンのグラスが配られ、子供達にもオレ

ンジジュースが配られた。乾杯の準備ができると、数馬が乾杯の音頭をとった。

「みなさん、グラスの用意は良いですか？では、内観賢さんの仮釈放を祝し、崎野祐子さんと愛児スバハちゃんの無事の帰還を祝し、崎野亜希子さんの蘇生を祝し、春子さんの帰還を祝し、そして、アイリーンさんとキルリエさんの来日を歓迎して乾杯を行いたいと思います。おめでとうございます！」

「おめでとうございます！」

全員の唱和に続いて賢が感謝の挨拶を述べた。

「みなさん、いろいろありがとうございました。皆様に支えられ、励まされて、予定より3年も早く勤めを終えることができました。今日は待ちに待った日です。双子の姉妹崎野祐子さんと崎野亜希子さん、いや由宇さんと亜紀さんが戻って来たのです。こんなに嬉しいことはありません。そして今日は、春子さん、アイリーンさん、キルリエさん、そしてスバハちゃんを迎え入れることが出来たこの上なく喜ばしい日でもあります。由宇さんは日本で拉致され、苦難の道を歩んだあげく、アフリカの未来を拓く道筋を付け、素晴らしい仲間と共に帰ってきましたし、亜紀さんは人を助けようとして命を落とし、自ら霊界に住んで、多くの魂を導き、戻って来ました。それに比べ僕は自分の無分別な行動の責めを受け、刑務所に入れられ、みんなに迷惑を掛けてしまいました。それにもかかわらず、沢山の方々の支援を戴いて、社会に復帰させていただきました。こんな僕を皆さんはじめ沢山の人々に暖かく迎えて頂き、感謝の心をどう表したら良いか分かりません。僕は刑務所に服役中、昼間は労役・・・とは謂っても、ただねじを締めるだけの単調な仕事ですが、それを毎日繰り返していました。その間の時間は全て瞑想と反省に当てました。そして夜になるとテレパシー通信でアフリカに居た由宇さんとコンタクトを取り、テレポーションでアフリカに移動したり、樋口数馬さんや原友昭さんとの会合に出席したり、諏訪中郷地区に行って、試行プロジェクトの様子を眺めたりしていました。それから、むしろ大半の時間はこのことに時間を割いたのですが、世界中で沢山の難民

の人たちの集う場所を訪れたりしていました。皆様の励ましの言葉を戴いていましたから、刑務所の生活は皆さんが心配してくださるほど、苦しくも、退屈でもなく、むしろ快適なほどでした。失明しても意識の全開で不自由はありませんでした。むしろ失明していたために、激しい肉体労働が減免されたため、十分な瞑想ができましたし、疲労を残さずに夜の活動ができました。所内は安全で、僕に敵意を持つ人からの攻撃を受けることもありませんでした。こんなに恵まれていて良いのかと思ったほどです。僕が瞑想で認識できたことを少し説明してみます。これはきっと皆さんのこれからの人生に役立つことだと思います。僕は瞑想を通じてこの世界の真の姿を垣間見て参りました。皆さんには既に何度か説明しているかと思いますが・・・そう、一部の人には説明はしていませんでしたね・・・この世界の本当の姿についての僕の認識が間違えではなかったということを再確認致しました。やはり、この世界は自分が存在するから存在しているのです。だからもし、自分が消滅すると、この世界も同時に消滅するのです。そして、此処が最も大切なことですが、僕とあなたは同じ存在なのです。形を変えてこの世界に映し出されている二つの仮の存在なのです。これは喩えではありません。全ての人間が1つなのです・・・ここまでは、さっき刑務所の前でも言いました。ここからが大切です。これは殆どの方が理解できないだろうと思ったので、さっきは言いませんでした。実は、僕とあなたは同じで、それだけではなく隣の犬とも同じなのです。海に居る魚、空を飛ぶ鳥、更には森に居るカブトムシとも同じなのです。そうです。ハエや植物、粘菌やばい菌とも同じなのです。ただ自分自身から見たこの世界の捉え方が違うだけです。カブトムシは僕のように世界を認識できませんが、その自由な意識は僕自身のそれなのです。この地球上の全ての生き物の意識は1つなのです。1つの源から無限に展開された生命なのです。だから動物を殺すことは自分を殺すことなのです。魂を束縛することは、その存在に死を与えることに匹敵します。それはこの肉体の話ではありません。魂の話です。ですから、野良犬を追い払うより、紐で縛っておく方がよほど残酷なことなのです。魂を苦しめるからです。ここからは

もう少し難しくなります。このことも瞑想を通して認識できたことなのですが、実は自分は石や土とも同じなのです。自分は人間であると同時に、路傍の石であり、畑の土でもあり、さらには海の水でもあるのです。この認識に到達するには時間が掛かりました。実は形は違いますが、石も水も土もみな生きているのです。そのライフスタイルが人間と全く異なっているので、その事が人間には理解できないのです。更にその上もあります。空気や様々なガスの分子、それらも自分自身なのです。ガスも魂を持った存在です。だから、風に話しかければ風が動きます。空気の薄いところで、空気に頼めば、空気は酸素の含有量を増やしてくれます。3次元の世界ではこれらの物質は全て絶対存在の意志によってこの現象界に顕現しているのです。そしてそれらは全て私自身なのです。この次元には無というものはありません。全ての存在は無限小の顕現の結果なのです。その顕現は無限大のエネルギー・ベース上で無限小の複素振動が生じて起こります。顕現した無限小の存在は全てエネルギーのベースに繋がっていて、無限大のエネルギー・ベースそのものです。ですから、この世界の無限小は無限大と同じなのです。エネルギーの充満したベースでの顕現は何も無い状態・・・つまり真空状態・・・実は真空にもエネルギー空間がありますが・・・その真空状態に於ける、自らのエネルギーの複素振動によって起こる写像です。本体に沸き上がった複素振動が写像として映し出されるとき、そこに空間としてエネルギーの場が創られます。そして同時に、そのエネルギーの場での複素振動は時間を発生させます。複素振動が起こることで存在が顕現し、その顕現によって空間と時間が出来上がるわけです。だから、私たちはこのエネルギーの空間と振動の時間に縛られた存在なのです。無限に展開した空間上に複素振動が起きるとき、その複素振動の中心に点としての魂が生じます。魂は基底振動なのです。その魂を中心に更に無数の振動が発生し、それが素粒子となり、原子となり、分子となり、物質となるのです。複素振動している存在の結合によって生じる魂は認識力を持つものと持たないものに別れてゆきます。認識力を持つと、生物になります。認識力を持たず、意識だけを持つと鉱物や液体、気体になります。でも

いずれにも魂はあります。生物の中では認識と判断機能を持つものが動物植物です。その動物植物の中でも高等と呼ばれる生物には思考機能があるのです。みんなも知っているように人間は卓越した3次元的な認識力と思考・意志判断の機能を持っています。でも、現在の人間の気付いていないことは、その認識と意識という機能が存在の核、つまり根源のエネルギー・ベースに繋がることのできる唯一の道だということです。その道に働き掛けて、この現象界に映し出される写像を変化させることができるのです。それが自己実現とか、創造とか謂われることなのです。この世界の真の姿は見事な調和を示しています。人間はその調和を更に発展させる力を持っています。意識の力によって全体との同調が可能になります。全体との調和が達成されると、エネルギー・ベースに自分の意志を作用させて、あらゆる顕現をコントロールすることができます。その反対に分離してゆくこともでき、それはすなわち人間的な存在から離れて、動物的さらには鉱物的な存在にまで落ちてゆくことを意味します。ここまでを実感として認識する為には、自分を純粹にし、自己という概念を拭い去る必要があります。瞑想を使えば誰でもできることです。以上が僕の認識したこの世界の仕組みです。ここからは次の時代の先駆けとなる人間の機能について話します。僕が空中に浮揚したり、飛行したり、テレポーテーションしたり、バイロケーションしたり、あるいは千里眼を使ったり、天耳を使ったり、テレパシーを使ったりするでしょう。この現象界から消えて失踪したりした人たちも何人か居ます。それがどうして起きるのか説明しましょう。先ほど説明した「写像が生まれるときのこと」を思い出してください。さっき自己の本体は無量大のエネルギー・ベースで、そこに複素振動が起きるとそれが一つの写像としての時空間を創り出し出すと言いましたね。それが1つの次元の出現なのです。時間と空間を包含した次元です。その次元は実と虚で出来ています。実と虚がなければこの空間は生まれません。いつもペアで生じるのです。何かが生じるとき必ずその対極にあるものが生じます。それでなければ何も無い状態から何かが生じることはありません。この3次元には無数の意識を持った存在によって無数の空間が生じているのです。ところが、

それらの空間は殆どの部分で共通なのです。それは同じ元から生じているから当然のことです。その生じた空間に於ける自己の属する空間が無数にある空間の内、どの空間になるかということは、その写像として顕れている自己存在の意識に基づいて決まるのです。分かりますか？あなたはあなた自身の空間を作っていて、無意識の場合と自分があえてそれを意図した場合、その空間を作っている意識の意志によってその中に存在するのです。だから、もしあなたが自分の意識を目覚めさせ、自分の意志で別の空間に移動すれば、あなたは現在の空間から消え、別の空間に移るのです。そして、別の空間から戻るときに少し位置をずらせば何処にでもテレポーテーションできるのです。もっと簡単に言うと、純粹意識になり、本源と繋がった状態で意識を別の位置に移動すればその状態は全て認識でき、全てが見え、全てが聞こえるのです。もしそこに移動しようと思えば即座に移動できるのです。それを3次元内だけで行うこともできますが、方法さえ理解すれば次元を越えた方がずっと簡単です。3次元内で行う場合は、純粹性はあまり重要ではなく、針の先のように鋭い集中力と山を動かすほどの強い意志が重要になります。それは場合によっては非常に疲れます。僕は服役するまでは、別空間は虚空間だと思っていましたが、服役中の瞑想を通して実の場合も虚の場合もあるということが分かりました。移行するプロセスは異なります。自分の空間内での実から虚への移動は「生から死への移行」と表現されるプロセスで移動するのが一般的ですが、自分の意志でも移動できます。他の人の作った空間の虚空間への移動は、かなり複雑です……少し、詳細すぎました。この話は別の機会にした方がいいでしょう。兎に角、これからの時代は次元を超えて意識を作用させることができる時代になります。その事を意識してください。今日は本当にありがとうございました」

頭が混乱するような賢の話を、皆我慢して聞いていた。数馬は出席者にくつろぐように言ってから、祐子に挨拶するように促した。

「みなさん、ずいぶんお久しぶりにお目に掛かります。賢さん、ご出所おめでとうございます。そして、亜紀、蘇生おめでとう。私は昨日愛児

スバハを連れて、春子さん、アイリーンさん、キルリエさんと共にアフリカのルワンダから日本に帰国致しました。先ず3人を紹介します。こちらが春子さんです」

春子が祐子の横に寄って来て頭を下げた。

「春子さんは誘拐され私と一緒に地獄巡りをした仲です。切っても切れない人になりました。私の妹になってもらうことになりました。それからアイリーンさんを紹介します」

梓に促されてアイリーンがスバハの手を引いて祐子の近くに行った。

「アイリーンさんは私たちより、ずっと辛い人生を生きてきました。あの二つの民族間の争いでご家族を全員亡くれてしまいました。彼女は私に代わってスバハを育ててくれました。彼女には身寄りがありません。わたくしの姉になってもらうことになりました」

アイリーンが深々と頭を下げた。祐子はキルリエを促して、自分の横に呼び寄せた。

「次に紹介させていただくのはコンゴのキルリエさんです。彼女は生まれたときから両親の無い孤児だったのです。一番悲惨な生を生きてきました。わたしと亜紀はコンゴ遠征でキルリエさんと出会い、妹になってもらうことにしました。どうかよろしくお願い致します」

祐子が頭を下げると、キルリエは祐子の方を窺ってちょこっと頭を下げた。

「これからアイリーンさんとキルリエさんについて日本国籍の申請をします。今後ともおふたりのことをよろしくお願い致します。皆さんには本当にご心配をおかけ致しました。わたくしは皆さんもよくご存じのあのジェノサイドの起きた地ルワンダで、沢山の人たちと共に生活することになり、そこでスバハを授かりました。ご出席になっておられる鹿島さんや香川さんに助けられながら、ルワンダの人たちと共に平和な社会が実現するように努力してきました。私は沢山の人たちがジェノサイドの犠牲になった種族ブチ族の中で一時期族長にさせて頂きました。やっとそれまで宿敵だったクツ族との和睦も実現し、FURUMAという共同体を創設することもできました。その共同体が発展し、今では部族

間の隔たりを越えた国内産業を起こす国民支援組織として機能するようになりました。私たちは紛争の続く隣国コンゴを何とかしたいと思い、亜紀や他の仲間と遠征に出掛けました。そこでアフリカを救おうと立ち上がる機会を窺っていた人たちに出会いました。私たちはルワンダに帰国後、彼らに協力してコンゴの政治変革に挑みました。それは見事成功しました。賢さんもアフリカまでやって来て支援してくれました。今、彼らがアフリカ各国でその国の政治を変革する為に取り組んでいます。亜紀はコンゴ国内で反乱軍の攻撃から私を救おうとして命を落としてしまいました。昨日空港で亜紀の姿を目にしたとき、私は悦びに打ち震え、天の意志に感謝しました。やっと私の一番好きな人たちの元に戻って来ることができました。これから夢のような日々が訪れます。ここで私の大好きな歌、“さくら”を皆様にお贈りいたします。

さくら さくら やよいのそらは みわたすかぎり かすみかくもか
におひぞいづる いざや いざや みにゆかん

皆様本当にありがとうございました」

皆、一斉に拍手した。数馬がもう一人と言って亜希子に挨拶を頼んだ。

「わたくしは命の恩人賢さんと由宇お姉様に導かれて生きて参りました。一人では何もできない情けない女です。このような、信じられないような日が来るなんて……」

亜希子はハンカチを取り出して、涙を拭った。

「賢さん、由宇お姉様本当にありがとうございました。そして、わたくしを支えてくださった皆様いろいろありがとうございました。賢さんに蘇生させて頂く前にわたくしは死後の世界を見てまいりました。死後の世界の存在は、最早あるとか無いとかという議論を差し挟む余地はありません。そこで沢山の人たちと共に感じ、共に生きてきました。沢山の人がまだ迷いの中にいますし、苦しんでいます。一方、至福の中におられる方々も大勢おられます。それはこの地上と同じです。死後の世界には、この地上にある物は何でもあります。初めは実態が無いように感じますが、暫くすると、馴れてきてこの地上と同じように固いものは固く、重い物は重く感じてきます。唯ひとつ違うのはこの地上のように

玉石混合ではないということです。心が玉の人は輝かしい世界に、石のような人は厳格な掟の敷かれた世界にしか存在することができません。時間も空間もその構成物も全て自分が作り出します。賢さんのお話ではこの3次元世界でも自分の意識で時空間が出来るようですが、それをするのは簡単ではありません。でも、死後の世界ではそれが簡単に起きます。自分を常に磨き続けている人は、意識が高まると直ぐに次の次元に移って行ってしまいます。ですから、この3次元世界はとても貴重です。自分の意識のレベルをより高くする訓練に最適なのです。わたくしたちは多分、そのために此処に生まれているのだと思います。わたくしはもう少しで生まれ変わりの無い、自分自身の本体に辿り着くところでしたが、賢さんやお姉様そして大好きな沢山の人たちと生きることの出来るこの世界に未練があり、戻って来て、また一緒に生きる道を選ばせて頂きました。あと何万年掛かっても、何百万年掛かってもいいのです。辛く悲しいことがあっても、皆さんと一緒に生きていきたいのです。みなさん、わたくしを受け入れてくれて本当にありがとうございました」

祐子が亜希子に近付き、抱き締めた。全員が祝福の拍手を贈った。それから、何人かの人たちが入れ替わり、立ち替わり話をした。梓と愛子は食べ物への支度にかげずり回っていた。祐子は出席者を次々に廻ってアイリーンとキルリエと春子を紹介して歩いた。3人とも緊張していたが、次第に由仁の家全体に広がる家庭的で、華やかな雰囲気魅了されていった。利他が梓の後を付いて廻っている。スバハが利他の近くに来て、何か話し掛けている。言葉は通じないが、何を言おうとしているのかは理解しているようだった。宴もたけなわとなり、原と愛子によるスーフィーダンスが行われた。リズムを取って規則正しく回る原の周りを、愛子が空中を舞うように踊る独特の踊りは、見事に調和していて、見ているものにため息を吐かせた。出席者の気分が盛り上がり、モーツアルトのディベルティメントに合わせてダンスが始まった。父は母と、賢は梓と康介は初め亜希子や祐子と踊り、終にはゆきも誘い出して踊った。その光景を見た賢は笑いがこみ上げてきた。事件お宅だった嘗ての康介からは考えられない姿だった。賢は何とか吹き出すのを堪えた。その時

玄関のチャイムが鳴った。梓が対応した。

「やあ、田辺君、久しぶりだな」

「社、社長・・・・・・・・・・」

梓は言葉に詰まってしまった。藤代肇だった。藤代の背後には背広姿の男達が4人いて、その後ろに強面の男達が7、8人居る。「用心棒だ」と梓は思った。

「田辺君、うちの亜希子と祐子が来ているんじゃないかな？」

「は、・・はい・・・・・・・・」

「一寸呼んで来てもらいたいのだが」

賢が梓の困惑している状況を察知した。賢は直ぐに入り口に向かった。賢の姿を見ると、部屋の中を覗き込むようにして藤代が言った。

「やあ、内観くんじゃないか。まだ3年もあるのに、仮出所になったんだってな。君も運がいい人だな」

「はい、おかげさまで、今日出所させていただきました。ここでは何ですから、どうぞ中にお入りになってください」

「じゃ、遠慮無くお邪魔させて頂くよ」

藤代に続いて黒っぽい背広姿の男達がぞろぞろとリビングの中に入って来た。それまでダンスに興じていた人々はさっと身を引いて奥の壁際まで下がった。祐子と亜希子は身動きせずにそのままじっとその場に佇んでいた。

「亜希子、祐子、お前達はどのようにしてここに居るんだ？私がどれほど必死になってお前達を探したか分かるか？なぜ連絡をくれなかったのだ？」ふたりは黙って佇んだままでいた。

「おふたりは、もうあなたの家には戻らないと思います」

賢が言った。

「何故、君がそんなことを言う。ふたりは私の娘達じゃないか。君のような前科者にそんなことを言われる筋合いは無い」

憤慨する藤代の言葉にも、ふたりの女性は黙っていた。

「社長、わたくしの方からお話申し上げた方がよろしいかと」

藤代の背後に居た紺の背広を着た50才ほどの中肉中背でこれと言っ

た特徴の無い男が言った。弁護士のように賢は思った。

「内観賢さん、あなたの行っている行為は、誘拐監禁罪に相当します。このように現場を押さえられては、もう反論できないと思います。仮出所も取り消されるでしょう。今度は5年3ヶ月では済まないですよ」
亜希子が言った。

「わたくしたちがここに居るのは、わたくしたちの意志です。内観賢さんはわたくしたちの思いを受け入れてくださっただけです。それより、あなた方は、わたくしたち姉妹がどういう形で育てられたかご存じの上で、この人の弁護士をしているのですか？」

この人と呼ばれても藤代は顔色ひとつ変えなかった。弁護士の男が言った。

「勿論、亜希子お嬢様と祐子お嬢様の生い立ちについては藤代社長から詳しく伺っています。祐子お嬢様については取引先の娘さんをご承知の上で養女になさいましたが、亜希子お嬢様はたった一人の娘さんとして、大切にお育てになったと伺っています。青山の家を出たのは、そちらの内観賢さん達がお嬢様を言葉巧みに誘い出したからだと聞いています。親を否定的に見るのは若者の常です。そのお嬢様の不安定な状態に乗じた内観賢さんやそのお仲間の誘いに載せられてしまったと、藤代社長はお考えです」

「亜希子、祐子、今までのことは全て忘れてやる。兎に角、私と一緒に一度家に戻りなさい」

「わたくしは忘れようとしても、忘れられません。賢さんや、祐子お姉様のこと、そして、優しい皆さんのこと……」

祐子が口を開いた。

「お父様、みんなあなたの仕組んだことだったことを知っています。私が福岡に転勤になったことも、支社長の秘書になったことも、あの無頼漢小山田との交渉に立ち会うことになったことも。お父様はあの小山田が危険な男だということもご存じだったようですね」

「なにを馬鹿なことを言っている。私がお前のことを不憫に思っている娘にしてやった恩を仇で返そうと云うのか？」

「いいえ、そんなつもりはありませんが、私は事実を言っているのです。私の本当の両親はあなたの仕組んだ罠にはまって、命を落としました」

「何とたわけたことを！」

「私と妹亜希子いいえ、本当の名前は亜紀ですが、その亜紀は本当の両親崎野家の双子の姉妹として生まれました。両親を失った私たちを離ればなれにし、一人を自分の子供とし、もう一人は本当の父の弟に預けたのです。私は幸い、叔父から冷たい扱いを受けましたので、叔父の元を離れることができました。でも、悲しいことに亜紀はお父様達の前で疼爱されたため、真実に気付くこと無く、あなたの方で育ちました。私たちは異国の地で漸く本当の双子の姉妹であることを知ったのです。もう、亜紀も私、由宇もあなたの前には戻れません」

「よ、よくもそんな作り話を。お前は養女だ。そう望むなら、今すぐにも養女の縁組を解除してやろう。だが、亜希子、お前はここに居る者達の策略に乗ってはいけない。気付きなさい。そして、私と一緒に青山に戻るのだ。お前の母登喜子がどれほど喜ぶことか知れない」

亜希子は登喜子という名前を聞いて目に涙を浮かべた。藤代はそれを見逃さず、畳み掛けるように言った。

「お前を失ってからの登喜子は抜け殻のようになってしまった。鬱病とアルツハイマーが登喜子の身体と心を蝕んでいる。お前が戻って来てくれることだけを願って、今も病院でお前の名前を呼び続けている。こんなことになったのは一体誰の所為なのだ……」

藤代は右手の親指で目頭を押さえた。演技をしているのは明らかだった。弁護士が言った。

「社長、今日は強引にでもお嬢様をお助けしましょう。おい、君たち、お嬢様をお救いしろ」

背後に控えていた用心棒の男達が前に進み出て亜希子と祐子に掴みかかろうとした。その時、賢が丹田に気を貯め、「はっ」と言うかけ声と共に男達に向って気を吐き附けた。男達の身体がその場に釘付けにされたように動かなくなった。藤代と弁護士達は慌てふためいた。だれも気付かない内に賢の横に2台のOVSが運び込まれていた。藤代達が入っ

て来たとき、原が物質転送機を使って転送したのだった。原は空間に立体映像を映し出すフォログラフィ・プレゼンテーション・ツールをOVSに接続した。原は2つのヘッドギアを祐子と亜希子の頭に被せた。賢が言った。

「ここに居る人たち全員に真実を見て頂きましょう。原さん、由宇、亜紀、準備は良いですか？じゃ始めてください」

藤代と弁護士達は怯えたようにうろたえている。パーティの出席者達は何が起こるのかと固唾を呑んだ。リビングの中央の空間に一組の大人の男女の姿が浮かび上がった。

「おとうさま！」

祐子の叫びに続いて亜希子も叫んだ。

「おかあさま！」

「おお、由宇か！元気か？良かった」

「亜紀さんね？よかった！無事蘇生できたのね。賢さんが上手く誘導してくださったのね！」

「はい、おとうさま、今わたくしたちは賢さんの家に居ます」

「はい、おかあさま、無事賢さんの家に着きました。今、お姉様がお子様も同時にお呼びしています」

「おとうさま、これからわたくしたちが生まれたときのこと、その後で起きたことをお話ししてください。ここには証人になって頂ける大勢の方々がいらっしゃいます」

祐子の言葉に従って父親が話し始めた。藤代肇は後ずさりして言った。

「止めなさい。こんな欺瞞的な演技は。お前達は一体何を考えているんだ。素直に娘を……」

立体映像の父親には藤代の声は届かない。藤代や叔父から執拗に権利譲渡を迫られていたこと、母がふたりを産み落としてから直ぐに両親と一緒に自動車事故に遭ったときの様子を淡々と語った。続いて母が話をした。

「ふたりは由宇と亜紀という名前を付けたのよ。生まれたばかりなのにふたりは相手を意識しているようだったわ。手が触れたり、耳が聞こえ

ていたのかしら、泣き声があると相手の方に頭を向けようとしたわ」

「私はもう弟や藤代のことは恨んでなどいない。彼らが哀れに思えるんだ。いずれ死んでこちらの世界に来ることが分かっていたら、あんなことはできなかったはずだ。彼らはこれから長い年月を掛けて反省しなくてはならないだろう」

その時賢の父が祐子に近付き言った。

「これは崎野君だな。ちっとも変わっていない。若いときのままじゃないか。祐子さん、後で少し替わってくれますか？」

「はい、分かりました」

祐子の意識が賢の父に向くと、映像の父が消えた。祐子はヘッドギアを外し、賢の父に渡した。父はヘッドギアを被ると直ぐに話し掛けた。

「崎野、久しぶりだな。聞こえるか？」

「お前は誰だ？今、娘の由宇と話していたばかりだったが……」

「俺だ、内観だ、俺のことはもう忘れてしまったのか？」

「済まないな、死んでしまうと、生きていた頃のことを思い出すのに時間が掛かるんだ……内観、内観……そうだ、内観だ、俺の親友じゃないか。お、お前が内観なのか？」

「そうだ、俺だ」

「おお、内観、今どうしている？息子は元気か？お前とはいろいろ話したな。覚えているか？お前はまだ、医者をやっているのか？奥さんは元気か？お前は仕事一途だから、俺はお前の身体の事が心配だったんだが、俺の方が先に死んじゃった。そう思うと一寸悔しいな。覚えているか？将来俺の娘をお前の息子の嫁にしようかなんて冗談を言っていたこともあったな。ところでお前の息子はどうなった？」

「いろいろ変わったことをやっているよ。今お前と話をしているこの装置を製造販売したりしている。人間の心のあり方を正そうとして、活動したりもしている。波瀾万丈な人生だ」

「一寸待てよ、俺の娘亜紀が最近死んで俺のところに帰って来ていたんだが、どうしても生き返りたいと言って、見事生還したようなんだ。その時その蘇生を助けたのが確か、内観という名前の男だった。そうか、

どうして、その時お前のことを思い出さなかったのだろう。考えられないな。死ぬと、思考パターンも変わってしまうらしい。その内観、たしか内観賢という男は、お前の息子なんて事はないよな」

「俺の息子だ」

「えっ？何だって？それは奇遇だ。どうしてこんな風に絡み合っているのだろう？」

「人間はそういうものらしいよ。生まれる前にそういう予定を立てているらしい。全部忘れちゃうけどな。ところで、お前は祐子さんと話した時、どうして直ぐに自分の娘だと分かったんだ？」

「おまえな、自分の娘が分からなくなったら、人間も終わりだぞ。おれは一言呼び掛けられたら、直ぐ由宇だと分かった。亜紀もそうだ。こっちに居る偉い人の話じゃ、意識が停止していると自分の子供のことも分からなくなるらしいぞ。意識が停止している・・・つまり、無意識で生きているのは死んでいるのと同じらしい。まあ、無駄な人生ってことだ。少なくとも俺やお前は生きているがな」

その時藤代が怒鳴った。

「いつまで、こんな茶番劇を見てなくちゃならないんだ！くだらない。どうしても娘を返さないと言うのなら、もうこれ以上此処に居てもしょうがない、引き上げよう」

藤代は弁護士達の方に向かって言った。賢が言った。

「藤代社長、過ちを認めて、反省してください。このOVSがある限り、あなたはもう偽を正当化して生きることはできません。私たちには論証だけではなく、物証も全部用意できるのですよ。今後、一切ふたりの女性には関わらないでください」

藤代はそれには返事をせず、弁護士達を引き連れて出て行こうとして、強面の男達が釘付けにされていることに気付いた。藤代は弁護士達に言った。

「この男達を連れ出してくれないか」

弁護士達は必死になって用心棒達の身体を動かそうとしたが、男達は木偶と化していた。パーティに出席していた男達が手伝って用心棒達を引

きずるようにして外に運び出した。藤代一行が外に出ると、梓が鍵を掛けようとした。そこに祐子が走り寄ってきた。祐子は藤代に紙袋を手渡して言った。袋には菓子や果物が一杯詰まっていた。

「おとうさま、お腹がお空きになっていらっしゃるでしょう？お帰りの道中、少しですが足しになさってください」

藤代は小さく頷き用心棒達を引き連れて行こうと必死に男達の手を引いた。賢が男達の縛りを外した。用心棒達はいきなり解放されてその場に転がり込んだが、勇むように立ち上がり、藤代の後を追った。梓がドアをロックした。

部屋の中央ではまだ賢の父と祐子達の父が話し込んでいた。亜希子は母に別れを告げてOVSのスイッチを切った。

「ダディはまだお話ししているのかな？」

「親友同士なのよ。あなた、暫くはそのままにしておいてあげましょう」

パーティの夜は途中のハプニングもあり、10時近くになって漸くお開きになった。賢は部屋の角にいる康子に歩み寄った。

「いろいろ、ありがとう」

賢が微笑みかけると康子が言った。

「わたし、今一番幸せです」

その晩は梓が事前に用意したベッドが賢の部屋と梓の部屋にそれぞれひとつずつ、研究室に2つと梓の趣味の部屋に3つ搬入されていて祐子と亜希子が賢の部屋、賢の両親が研究室、春子とアイリーンとキルリエが趣味の部屋で休むことになった。ゆきの一家と康介、康子は由仁の家を辞した。賢達は外に出てタクシーを見送った。梓が一行のために15キロ離れた夕張のマウント・スカート・リゾートホテルに宿泊予約をしていた。翌朝帰途につく予定だ。

子供達を寝かし付けてから、大人達は再びリビングに集まって来た。愛子が言った。

「ねえ、祐子さんと亜希子さん、あつごめんなさい、由宇さんと亜紀さ

ん、双子だったなんて、まだ信じられない。ふたりとも美人でスタイルが良いところは似ているけど、雰囲気はあまり似てないでしょう」

「愛子、そんなことは無いよ。僕は、ふたりを同じ人のように感じることもあるよ。同じ人の二つの姿のようにね。由宇は陽、亜紀は陰、ふたりと一緒に居ると、歓喜が生まれるようだよ」

「そう言われればそうだね。由宇さんと亜紀さんが一緒に居ると、太陽が輝いているように感じるね。それに祐子さんと亜希子さん、あの刑務所の前で空中に浮いたでしょう、そして空中でふたりと一緒に上がったでしょう？あれはどうなっていたの？私はダンスで飛び跳ねたとき、他の人より高く空中に浮くことはできるけど、それはジャンプの力で浮いて、その後直ぐに着地するから、何となく自分で感じを掴めるんだけど、空中に留まるって……」

祐子と亜希子は微笑んでいる。賢が代わりに応えた。

「愛子、お前にはまだ難しいかも知れないけど、ジャンプするとき、少し身体が浮くという感覚を持っているだろう、その感覚をもっと強く持って、飛び上がったとき上空の一点に向って移動するように意識を持ち続けてご覧、お前の心が純粹ならもっと高く浮き上がるからね」

愛子はその場で飛び上がって見たが、バレエで飛ぶときの少し、フワッと浮いたような感覚以上にはならない。

「意識の集中と、自我への執着を棄てることだよ。お前なら、それほど時間が掛からないはずだ。愛子にはあまり執着心が無いからね」

亜希子が祐子の方を見ながら言った。

「お姉様、愛子さんの前で浮いて見せてあげたらいかがかしら？」

賢は笑っている。アイリーンとキルリエは真剣な眼差しで見詰めていた。春子は非常に穏やかな顔になって、うっすらと涙を浮かべて愛子を見つめている。

「亜紀、自分で意図して出来るの？」

「はい、出来ます。お姉様は、昼間どのようにされたのですか？」

「私は、賢さんのところに行こうとしたのよ。本当は空中に浮こうなんて思わなかったのよ。だけど自然に身体が浮いたのよ。あなたと一緒に

なる時も、「ああ、亜紀のところに行こう」と思っただけだわ」

「お姉様、それですわ。わたくしも同じですわ」

「そうなの？それなら、わたしも自分で自分をコントロールできるわ。
亜紀、入口のドアまで一緒にゆきましょう」

ふたりは手を繋いだ。ふたりの身体が浮き上がった。あっという間にふたりは入り口のドアの前に移動し、静かに着地した。

それを見て、その場に居た大人達はそれぞれ、空中浮揚を試みたが、誰にもできなかった。賢が言った。

「人に見せるものじゃないけど、みんなが一堂に会することはそうないから、僕にできることをやって見せるよ。みんな寛げるところで見ていて」

賢はそう言うと、つかつかとリビングの中央に歩いて行った。全員が賢に注目した。賢は先ず、バイロケーションをして見せた。キッチンの手前にもう一人の賢が顕れた。少なくともそのように見えた。すこしして、部屋の中央に居た賢が消えた。キッチンの前に居る賢の身体が空中に浮き上がった。賢はどンドン浮いて行って天井にぶつかるかと思ったとき、そのまま天井の中に消えた。暫くすると、賢の姿が梓の前に現れた。みんなが驚いていると、賢の姿が見る見る小さくなって行く、10センチほどまで小さくなると、今度は急に拡大し、背丈が天井に着くほどになった。大男はのっそりのっそりと歩いて部屋の中央に行き、再び元の賢の姿に戻った。

驚きに緊張していたみんなの顔が急に和んだ。愛子が言った。

「賢パパ、みんなの前で恥ずかしい！」

「愛子、お前だけに言ったんじゃないよ。同時にみんなにそれぞれ違うことを言ったんだよ。みんなの心の中にね」

「えっ！そうなの？」

梓が言った。

「私にも聞こえたわ。「梓、愛しているよ」って」

母が言った。

「賢、私聞こえた。賢の声、心に聞こえた。私も賢を愛してる」

みな、賢の声が聞こえたのは自分だけじゃないことを知った。

翌朝、祐子と亜希子は日の出前に目覚めた。身だしなみを整えてリビングに向かうと、既に梓がキッチンで立ち働いていた。昨日のパーティの皿やグラスは片付けられて綺麗になっている。壁の縁に飾られた花は朝の光で昨夜とは別の穏やかで暖かい雰囲気醸し出している。

「おはようございます。由宇さん、亜紀さん、もっとゆっくり休まれたらよろしいのに・・・」

「おはようございます」

「おはようございます。私はアフリカとの時差があるし、亜紀は霊界との時差があるでしょう？だから身体をできるだけ早く日本の時間に慣らさなくてはと思ったのです」

「あら、お姉様ったら、霊界との時差だなんておっしゃって。梓さん、わたくしたち、明け方近くまでお話ししていたのですのよ。だって、こんなこと夢のようなんですもの」

ふたりは梓を手伝い始めた。スバハが駆け込んできて、アイリーンが後を追うように入って来た。愛子と原が入って来て、その後を春子が利他の手を引いて入って来た。暫くして賢の両親が微笑みながら入って来た。母は初めて来た様にリビングの中を見回して言った。

「みなさん、おはよう！昨日は楽しかったね」

「おはよう」

両親の声に、皆拍子を合わせたように挨拶を返した。

「おはようございます！」

キッチンの横には大きめのテーブルと沢山の椅子が用意してあった。梓は全て分かっていたかのようである。朝食は和やかな雰囲気に包まれた。祐子はアイリーンとキルリエ、スバハの食事に気を遣った。3人は、最初は珍しそうにしていたが、直ぐに馴れたようで、嬉しそうに食事を摂った。

朝食が済んで少しすると、梓が女性達を誘い、札幌に買い物に出掛けようと言い出した。アフリカからのふたりの女性と春子に札幌の街を案内

するつもりだった。亜希子も一緒に行くことになった。祐子は二人の子供達の世話と日本での生活の準備の為に留守番をすることになった。女性達が出掛けると、賢は両親を空港に送った。祐子は賢の帰りを待ち、春子の叔父に連絡を取りたいと言った。賢は春子の身に付けていたものを持って来るように祐子に言った。祐子は春子が昨夜着替えたブラウスを持って来た。賢はそれに手を触れ、瞑目して、金沢市の外れにある叔父の家を探し出した。祐子はPCを立ち上げグローバル・アースで住所を確認してから、104に電話し、叔父の電話番号を聞き出した。電話を掛けると叔母が電話口に出た。祐子は春子が無事である事を伝えた。叔母は既に春子のことを諦めていたと言った。祐子からの連絡を受けてもあまり感動した様子を示さなかった。むしろ煩わしいことが起こったというような対応だった。叔母は春子のことを忘れられないでいる水原という男性が、時々家に訪れて来ると言った。見ていると哀れで、水原にだけは春子の所在を知らせてやりたいと言った。祐子は自分の住所は伝えず、逆に叔母から水原の住所を聞き出した。午後3時過ぎに女性達が衣類など沢山の買い物をして帰って来た。祐子は春子とふたりきりになった時に訊いてみた。

「春子さん、あなた、水原という人知っている？」

水原という名前に、春子はびくっとしたが、首を横に振って

「分かりません」

と応えた。祐子は昔の友達に水原という名前の男性がいないかと訊き直してみた。春子の目に見る見る涙が溜まってきた。

「家が竜巻に襲われる前の友達に水原君という人がいます。同じ高校に行こうと約束していました。竜巻は御前崎から牧ノ原方面の狭い範囲の災害でしたが、私は全て無くしました。水原君は家族も家もみんな無事で、住まいも原発の立ち入り禁止区域外でした。彼は四六時中私と一緒に居てくれ、私と共に悲しんでくれました。でも、私はとても深い悲しみの中において、彼から同情の言葉を聞くのに耐えられなかった。だから、金沢の叔父の家に引き取られてゆくとき、彼には何も言わなかったんです」

「彼は暫くは静岡県に居たようで、一旦は地元の高校に入学したようだけど、どうしても我慢できずに、あなたを追って金沢の高校に転校したようね。高校を卒業してもそのまま金沢の大学に入学したらしいわよ。あなたを探し続けているらしいわ」

「……もう、彼には会いたくないです。……いいえ、たとえ会いたくても会えません」

「彼のこと、もう好きじゃないの？」

「……………」

「いいわ、私に任せてね。春子さん」

「……………はい……」

アイリーンは次第に日本が好きになってきた。キルリエは暫くの間自分の殻から抜け出せなかった。祐子はふたりを日本語学校に通わせた。アイリーンには直ぐに友達が出来た。アイリーンは学校が楽しいようだった。キルリエはまだ友達と打ち解けることができないようだった。日本語学校には帰国子女の他、外国からの移住者が大勢通っていたが、アフリカ人はアイリーンとキルリエだけだった。アイリーンのルワンダの自然や大虐殺の話に皆興味を覚え、彼女に優しく接していた。キルリエは自分の生い立ちについては寡黙だった。アイリーンはここで働いて日本のことを勉強したいと言い出した。日本語学校に通い始めて6ヶ月ほどするとアイリーンの日本語能力が高まってきた。祐子は賢に内観システムズでアイリーンを雇ってほしいと言った。賢はその事を人事部長に話した。人事部長は一応簡単な試験を行ってから決めさせてほしいと言った。賢は同意した。アイリーンは臨時従業員として採用された。キルリエは日本語学校の中で次第に孤立していった。祐子がそれを察知した。夜はキルリエとスバハと3人で一緒に床に入ることにした。スバハが寝入ってしまうと、キルリエは祐子に身体を寄せてきて、祐子がキルリエの方に寝返りを打つと、身体を丸めて祐子の胸に頭を埋めるようになるのだった。アイリーンが自立の道を歩み出した一方で、キルリエは益々祐子に甘えるようになった。祐子は事あるごとにキルリエを抱き締めた。

日本に来て10ヶ月近く経ってキルリエは漸く家の者達に心を開くことができるようになった。その頃には片言の日本語で話ができるようになっていた。

それから1年が経過したある日、賢はゆきから1通の手紙を受け取った。

「親愛なる賢様

お元気でしょうか？私たちはみな元気に生活しています。太郎や信次はクラブ活動に夢中になっています。私はスーパーの主任になりました。お父さんやお母さんも元気に働いています。あの苦しかった日々が嘘のようです。驚かないでください。先日、鹿島康介さんからプロポーズされてしまいました。私は迷っています。どのように返事をしたら良いのでしょうか？まだ父や母には何も話していません。まず、お兄さんと思っている賢さんに相談したいと思い、手紙しました。私は鹿島さんのことはあまりよく知りませんが、3度ほどデートしました。鹿島さんはダンスが得意なのです。それなのに外に出るととても男らしいんです。この間も花巻駅で鹿島さんを待っているとき、アジア系の外人の男性二人に何か言われて私がおろおろしているところに鹿島さんがやって来たのです。鹿島さんは外国語も達者のようです。鹿島さんが一言二言話をしたら、二人の男性は顔いて去って行きました。後で聞いたら、「どうやら花巻の街のことを聞きたかっただけのようだよ」と言っていたが、私にはとてもそのようには思えませんでした。私はホットしました。鹿島さんと一緒に居ると安心です。鹿島さんは優しいところもあります。自分のことは置いておいて、私の考えていることを先回りしてやってくださいます。でも、私は鹿島さんのことをまだあまり知りません。鹿島さんから賢さんは無二のお友達だと伺いました。どうお答えしたら良いのでしょうか。是非教えていただきたいと思います。お返事をお待ちしております。

ゆきより」

康介とゆきが結婚式を挙げたのはそれから3ヶ月後のことだった。康介は帰国したとき一旦ムーン・ボックスを退社し、花巻に帰っていた。母

がもう82才になっていて、康介のふるさとへの帰還と結婚の話を聞いて泣いて喜んだ。それから間もなく康介はムーン・ボックスに再雇用された。会社側から声が掛かったのだ。康介は盛岡の支店に勤務することになった。ふたりの結婚式は親戚も大勢集まり、東北色の濃い大盛況な結婚式だった。

その3ヶ月後、愛子と原が結婚した。二人は今までのように由仁の家に住んでいた。二人きりになった時に賢が原に聞いた。

「いつからですか？」

「ずっと前です。言葉では一言もそんな話はしませんでした。僕たちの間では、当然そうなると分かっていました。そうですね、僕たちが初めてふたりきりになったのは、まだ愛子さんが中学校の頃だったと思いますが、何かの拍子で僕が愛子さんの手に触れたとき、それまでは何でもなかったのに、愛子さんの顔が真っ赤になったんです。その時からふたりはお互いを意識し始めたと思います。ふたりでダンスの練習をしていますが、時々お互いに見つめ合って立ちすくんだり、急に胸がドキドキしてきたりして、ふたりでため息を吐いたりしたこともあります。僕と愛子さんは同調するんです。最近では愛子さんが何処にいても、大体様子が分かります。愛子さんも僕のこと分かるようです」

「よかった、よかった。末永く愛子をよろしくおねがいします」

「はい、精一杯大切にします」

更にその5ヶ月後、アイリーンが岩見沢に住む日本人男性と結婚した。婚約から結婚に至るまで祐子が親身になって面倒を見た。相手の男性は牧場を営んでいる45才の須磨という男性で、5年前に妻が牧場の仕事に嫌気が差して出て行ったきりになり、一人で牧場の仕事に専念していた。アイリーンは北海道の冬の寒さに、堪え忍んで生活していたが、あるとき札幌まで行った帰りに、由仁の駅で降りたところで貧血を起こして倒れてしまった。それを救ってくれたのが須磨だった。雪の中、病院までアイリーンを背負って連れて行った。アイリーンは朝まで意識が

戻らなかったが、須磨は寝ずに付き添ってくれた。須磨はそういう男だった。朝気が付いて、目に涙を一杯溜めて、片言の日本語でお礼を言った。その姿を須磨は可愛いと思った。須磨がアイリーンを家まで送ってくれた。それからアイリーンは時々須磨の牧場に遊びに行くようになった。アイリーンは自分の生い立ちを須磨に全て打ち分けた。アイリーンは話しているとき、時々子供のような可愛らしい表情をすところがあって、須磨はそんなアイリーンを愛するようになっていったのだった。須磨は正式に妻の籍を抜いた。須磨とアイリーンの結婚式は身内だけを呼んで札幌の協会で厳かに行われた。須磨は海外に行ったことがなかった。ふたりはカナダの大自然を見てみたいと思っていて、意見が一致し、新婚旅行はツアーでカナダのロッキーの麓、バンクーバーからバンフに行くことになった。祐子と亜希子、賢がふたりを千歳空港まで見送り、その後も賢と祐子がふたりの行程を千里眼でサポートした。

それから少しして賢は服役中に社長業務を代行していた矢辻専務に代表取締役社長の職を譲り、退任した。賢は梓と利他を伴って信州の山奥に移住することに決めた。祐子と亜希子はいよいよ賢と共に生きることになることに胸躍る思いだった。賢と亜希子が中心になって信州の山奥に家を探した。冬が過酷すぎる場所を避け、電気の通っている場所を探した。賢はテレポーターションでブータンを訪れ、そこに1週間滞在した。ブータンの人たちの生き方、ブータン政府による国民の幸福意識向上への取り組みを見て廻った。経済発展より、国民の幸福を選んだ国ブータンに住む人たちは物質への執着が薄く、近隣の人々と共同体を造って家族のように一体になった生活をしていることが多かった。その生活の仕方はこれからの自分達の生活のあり方のモデルになると思った。賢はその根底に自然に対する崇敬の心がある事を観て取った。ブータンにはトンネルはなく、鉱山も無かった。神聖な山を傷つけるような行為は認められていなかった。多くの示唆を得て賢は由仁に戻って来た。

その半年後、水原が由仁の家を訪れた。久しぶりの再会に、春子は感情

を抑え、水原に自分が長崎に移り住んでからのことを事細かく話した。あまりのショックに涙を流している水原の姿を見て春子は言った。

「がっかりしたでしょう。これが私なの。だから、私はもう誰も信じられないのよ。いいえ、由宇お姉様と今、私を受け入れてくださっている内観ファミリーの面々は別だけど。みんなとっても優しい人たちなのよ。水原君、もう私の事は忘れて！わたしはこの人達と生きてゆくことに決めているの」

「春子、僕じゃだめなのか？君の全てを受け入れると言ってもだめなのか？」

「水原君は良くても、ご家族が許さないわ。それに、今は、感情が高ぶって、まだわたしのこと好きだと思っているかも知れないけど、そのうち、さっきの私の話を思い出して悩むことになるわ。あなたのためにも私は一人で生きた方がいいのよ」

「春子、そんなことを言わないでくれ。俺はお前が居ない人生なんて考えられない」

「私の何処が良いの？こんなに汚れてしまった女の何処が良いの？」

「君が綺麗だからだよ。何も汚れてなんていないじゃないか。手だって汚れたら洗えば綺麗になるよ。汚れたと思っているのは春子、君の心だよ。君は綺麗だ、昔のままだ。僕は小さいときから一生を君と共に生きる決めていたんだ。君の心の汚れは、僕が落としてあげる。一生掛かってもいい。嬉しいときは共に喜びたい。悲しいことがあったら一緒に泣いてあげる。どうか僕と一緒に生きてくれないか？」

水原の言う通り、由仁に住むようになってからの春子は美しく輝いていた。

「水原君、ありがとう。あなたが大学を卒業して、もし、内観ファミリーの住んでいる近くに住んでくれると約束してくれたら、こんな私で良ければ、私はあなたに全てを委ねるわ」

「約束するよ。僕は父や母に話して、許してもらおう。家は弟に後を継いでもらう。家族もあの大震災以来、自分のことより人のことを考えるような習慣が身に付いているから、先ず心配ない。後は君と共に生活する

ために安定した仕事に就けるかどうかだけだ。僕はジャパン魁銀行の内定をもらっているけど、君の元に行けるならそれも蹴ってもいい」
春子は水原のプロポーズを条件付きで受け入れた。その条件は水原にとって非常に厳しいものだったが、春子と共に生きたいという思いに比べれば、取るに足らないものだった。

賢と亜希子は先ずグローバル・アースでめぼしい地域を探し出し、ふたりにテレポーテーションし、場所の確認を行った。祐子が一緒に行ったこともあった。賢が候補地を見つけて来ると、梓はその都度どうしてもその場所を見たいと言った。賢はその都度梓を連れてテレポーテーションし、その土地の上空に空中浮揚して、梓に土地を俯瞰させた。梓は山の中で生きることにあまり乗り気ではなかった。

「あなた、どうやって生活するのでしょうか？生活の糧ですけど」

「当面は貯蓄を切り崩して、街で購入した食料や生活物資で生きてゆけど、最終的には必要最小限の物質化と自然の恵みで生きてゆこうと思うんだ。木の実や果物、自家栽培の野菜や穀物で食料はどうにかなる」

「あなた、わたくしはとでもそんな生活出来ません。利他を育てて行ける自信がありませんもの。信州ならもっと沢山の人の生活している街、長野とか松本とかに住んだ方がいいのではないのでしょうか？それか、今試行を行っている諏訪中郷地区とか・・・」

「梓、それも一案だね。だけど、どこに住んでも、自分の本質に辿り着くという目的は変わらない。梓の言う通り人々の多いところで生きた方が、魂の試練になることも確かだ。でも俺や祐子、亜希子はもう自分の本質の一手手前まで辿り着いている。これからは今まで内面に蓄積した澱を綺麗にすることが重要なんだ。俺たちは、瞑想のしやすい人里離れた場所に住むのが良いと思うんだ。君がどうしても一緒に行くのが嫌なら、それも君の選択だよ。俺は何時だって君の近くに居るし、君の前に姿を顕すこともできるしね」

「だけど、やっぱりあなたと一緒に生活したいわ」

「もう、俺たちは時空を越えて生きても良いだろう。君が都会が良けれ

ばそこに住んだら良いよ。本当に時空間は関係ないからね」

信州から越後に掛けて、山中には平家の落人の住んでいた屋敷跡が転々と存在している。温泉を中心に観光地化された地域もある。鉱山資源の発掘で開拓された地域もあった。賢は奥秋山郷の近くに広大な土地を見付けた。少し手を入れれば6、7軒の家を建てるスペースが確保できる。その土地を購入することに決めた。地主は長野市に住む75才の遊部宗吉という男性だった。その土地に外から入り込む道路は、人が一人やっと通れるほどの山道しかなく、あまり手入れもされていなかったため、何時か手放したいと思っていた。遊部は渡りに舟と賢の申し出を快く受け入れてくれた。賢は山一つを譲り受けることになった。賢は直ぐに建築会社との交渉に当たった。材料の搬入は全て賢が行うので、建築会社が建築機材、足場などの準備ができ次第建築を行って欲しいというのが賢の依頼だった。建築を担当する大工は近くにプレハブの家を建ててそこに宿泊してもらうことを提案した。最初の内、賢の依頼に難色を示していた担当者も、物質転送機による転送を知って依頼を受け入れた。木造平屋建て150坪ほどの大きな家だったが、5ヶ月半で完成した。家には居間として32畳ほどの板の間があり、その中央に囲炉裏が作られた。居間は屋根の裏板まで7メートルほどの高さの吹き抜けになっている。キッチンが囲炉裏のある居間の北東方向に土間と居間に面して設けられた。居間の南東側には20畳ほどの和室を設け、そこには縁側が造られた。そこは寝室に決めた。家の者が全員一カ所で寝ることにした。大勢の来客が集まったときには宴会が出来るようになっている。個室は家の西側に4室、南側に2室を設けた。南にある個室には廊下から入れるようにし、それぞれ8畳ほどの大きさにした。個室はここに住む者達の趣味の部屋と客間に充当した。一人きり、あるいは二人だけになりたいときに起居する為の共有の部屋にもなるように設計してもらった。南側の2室にはベッドを用意した。浴室は6畳ほどの大きさにし、洗い場を広く取った。湯船は檜で作ってもらった。浴室の隣に6畳ほどの洗濯場と脱衣所を設け、そこには居間からも廊下側からも入れるようにした。入り口を入ると土間になっていて正面がすぐ居間になる。土間の右

端が外からも直接農機具などを出し入れできる納戸になっていた。完成までの間、皆それぞれの思惑を持って、何度も現地を訪れた。祐子も亜希子もこの家での生活のビジョンを描いていた。よくふたりは手を繋いで、一緒にテレポーテーションし、完成前のこの家を訪れた。

「お姉様・・・一寸恥ずかしいけど・・・賢さんと一緒に休むときはどうしたら良いのかしら？」

「亜紀、直接そんなこと聞かないでね。私はもうそんな気持ちは無いのよ。あの人とはいつでも意識は一つになれるから。側に居てくれるだけで十分なのよ。あなたの好きなようにしたら良いわ」

「わたくしの夢はあの人の赤ちゃんを産むことなんですもの」

「そうだったわね。大丈夫よ、私は亜紀の邪魔立てはしないから」

「よかった。思い切ってお姉様に相談させていただいて」

奥秋山郷の家が完成すると、いよいよ引っ越しの計画を立てることになった。梓は父親の世話もあり、利他と共に由仁の家に残ることにした。愛子と原は梓が残ってくれることで賢との繋がりを保てることを喜んだ。結局奥秋山郷の家に移ったのは賢と祐子、亜希子それにキルリエとスバハの5人だけだった。しかし、賢はいずれこの家が多くの人たちの寄り集まる場所になってゆくような予感がしていた。引っ越しは物質転送機を使ったので、簡単に済んだ。結局家には電気は通してもらうことができなかったので、屋根にソーラーパネルを敷き詰め、リチウムイオン蓄電池を併用して、自家発電で電力をまかなうことにした。電気を必要とする装置は床暖房装置と給湯装置、それにOVSとMTSだけだった。幸い隣接の村から水道は引けたが、テレビ、ラジオ、冷蔵庫、洗濯機、その他一切の電化製品は持ち込まなかった。

いよいよ4人プラス1人の生活が始まった。当初賢は1日おきにテストプロジェクトの様子を見たり、指導するために中郷地区を訪れていた。祐子も週に2日ウグングとの交信を行い、物質転送機やOVSを用いた支援を行っていた。亜希子は瞑想状態から霊界を訪れてはムクウの霊界改革の手伝いをしていた。キルリエはスバハの面倒を見たり、祐子の側

で勉強したりして過ごした。賢は週に1、2度由仁の家を訪問することにしていた。由仁の家に行ったときは決まって宿泊した。新しい家に移ってから1ヶ月ほどして、亜希子が賢に言った。

「あなた、今日はわたくしと一緒に休んでいただけませんか？」

「由宇も一緒なんだぞ、大丈夫か？」

「はい」

その日の晩、夕食が済むと、先に賢が入浴し、囲炉裏の縁に坐って、瞑想を始めた。次に祐子がスバハを連れキルリエを伴って一緒に入浴を済ませた。祐子は風呂から上がるとふたりを連れて20畳の部屋に向かった。亜希子は賢だけになったのを見計らって入浴を済ませ、ベッドのある南向きの部屋に行った。まだ10時を少し回ったところだ。賢は先ず20畳の部屋に行った。祐子は布団を敷いてスバハを抱くようにして横になっていた。キルリエも祐子の隣のベッドで休んでいる。賢は祐子の横に坐ってテレパシーで尋ねた。

「由宇、今日亜紀と一緒に向こうの部屋で休むよ」

祐子は起きていた。スバハの上に手を載せたまま、テレパシーで応えた。

「あなた、亜紀に優しくしてあげてくださいね。私たち姉妹は二人で一つですから、私も一緒に休みます」

「うん、それじゃ」

亜希子は期待に胸を膨らませて待っていた。

奥秋山郷での生活は大自然に溶け込んだ生活だった。祐子と亜希子は山を下りることはなかった。暑い夏の日には賢を誘いキルリエとスバハを連れて5人で沢に降り水浴びをした。スバハは虫を求めて森を探索して歩く。その後をキルリエが追う。自然の中で遊ぶときのふたりを見る度に、祐子はピグミーを思い浮かべた。キルリエが勉強しているときは亜希子と祐子が交互にスバハの面倒を見た。秋山郷に移住して2ヶ月ほどしたとき、それ迄一度も家の中では誰かに向かって日本語で話しかけたことの無かったキルリエが、夕食後の暖炉を囲んだ家族団らんの場で、全員を見回しながら言った。

「わたし、 ありがとう。みんな ありがとう。わたし みんな だいすきです。わたし みんな しあわせ」

左隣に坐っている祐子が、キルリエの肩を抱き寄せた。

「キルリエ、みんなも、あなたが大好きよ」

家族の全員がキルリエの心の雪解けを感じていた。

ある日、スバハの後を追っていた亜希子が急に気分が悪くなり、大きな椎の木の根元で吐いた。直ぐに駆けつけた祐子もその横に吐いてしまった。二人は身籠もっていた。

「亜紀、大丈夫？ どうやらそのようね」

「わたくし、うれしいですわ！ やっと願いが叶いました。でも、お姉様も、お気分が悪そうでいらっしゃるわ」

「わたしもね、ここに、スバハの弟がいるのよ」

祐子は自分の腹を指さして言った。二人は顔を見合わせて笑い出した。奥秋山郷の冬は生き物たちから生活の場を完全に奪い去った。深い雪に埋もれ、何処に道があったのか、どこからが崖なのかの区別もつかない。文字通り外に出ることもままならなかった。賢の家族は雪の中に閉ざされた生活を余儀なくされた。しかし、それはそれで楽しいものだった。土間には夏の間に貯えた薪が山のように積まれていて、食料が自然の冷蔵庫に貯蔵されている。部屋は床暖房でほんのりぬくもりを感じた。春になって、先ず亜希子が女の子を産んだ。賢はテレポーテーションし、長野市から助産婦を連れて来た。助産婦は訳の分からないまま、亜希子の娘を取り上げた。亜希子は賢に名前を付けてほしいと言った。賢はメルセと名付けた。その1ヶ月後に祐子もスバハの弟を産んだ。スバハの弟はムクティと名付けられた。奥秋山郷の家は途端に賑やかになった。賢は諏訪中郷町や駿河湾東部地区のプロジェクトを全て数馬に任せることにした。祐子はアフリカの改革が順調に進んでいることを確認し、今後の活動を全てウグングとサスカブに委ね、アフリカから完全に手を引いた。亜希子は週に1度、テレポーテーションで登喜子を見舞うようになった。登喜子は亜希子の姿を見ると、途端にアルツハイマーや痴呆の症状を見せなくなった。亜希子は何時も登喜子と共に3時間ほど会話

を楽しんでから奥秋山郷に戻った。亜希子はムクウと相談して魂を指導するための霊界の訪問を終了させることにした。ムクウが亜希子に言った。

「亜紀さん、よく頑張ってくれた。これで、霊界に住む人たちの意識が次第に変化し始めるだろう。ところで、亜紀さん、江川勝児のことを憶えているかな？」

「はい、憶えていますわ。たしか、大山で行方不明になった方でしたかしら？」

「そうだ、その江川の所在が分かった。幽界の下層部にある魔界に迷い込んでいた。儂が連れ戻した。黒魔術の意識の念が絡みついでいて、なかなか大変だった。あいつはどうやら奇跡を起こして、水泳界にカムバックしようとしていたようだ。現象界での消滅を防ごうと儂もずいぶん説得したんだが、「奇跡」に心を奪われていたので、儂の言葉は耳に入らなかったようだ。水の抵抗を無くす術を得ようと魔術的な修行をした結果、魔界に引きずり込まれたようだ。その江川が最近意識の浄化を終えて現象界に帰還するタイミングを窺っている。儂はもう現象界に降りるエネルギーを使い尽くしてしまったから、亜紀は賢と共に現象界から江川を呼び戻してやって欲しい。意識の繋がりが現象界の出雲地域の空間から切り離れてしまっているから、何処の場所からでも江川を呼び戻すことができるはずだ」

「分かりました、あのひとと由宇お姉様と3人でやってみます」

「おおそうか、由宇もようやく今世の役目を終えたようだな。これからは、お前達は次の時代を生きる人間のプロトタイプ（典型例）として生きて欲しい。隠棲してもお前達の生き様は自ずと世界中に広がるだろう。今までのお前達の活動はそのための種まきだった。そろそろ芽が出始めるだろう」

亜紀はムクウの話を賢に伝えた。賢は詳しい話を聞こうと直ぐに霊界に入って、ムクウを探したが、どうしてもムクウの意識を捉えることはできなかった。賢は祐子と亜希子に言った。

「亜紀、由宇、憶えているか？大山で江川君を呼んだ時のこと？意識を

澄ませて呼び続けたらう。今は3人とも、もうあの頃よりずっと意識を研ぎ、純粹に保って集中させることが出来る。直ぐにでも呼んでみよう」

3人は囲炉裏の廻りに坐り意識を研ぎ澄ませて、江川を呼んだ。囲炉裏の中央に江川の姿が現れてきた。賢は慌てて江川の手を取って、空いている場所に江川を引き下ろした。江川はそこに転げ込んだ。筋骨逞しい男性だった。やがて江川の意識が戻ってきた。

「う、ううう、はあはあ……ここは？」

「江川さん、ここは信州の山の中です。あなたは今まで幽界、言ってみれば死後の世界に引き込まれていました。5年ぶりにこの世界に戻ってきたんですよ」

「ぼ、僕は、世界の王と名乗る方の元に身を寄せ、指導を受けていました。口から牙が出ていて、頭に角の生えた恐ろしい姿をした男達が僕を特訓してくれました。その成果があって、僕は水に同化することができるようになりました。プールで飛び込むとあっという間にターンポイントまで着いていました。でも何となく不自然で、こんなことをして良いのか迷っていたとき、ムクウさんが現れて、僕を連れ出してくれました。あれは夢だったのでしょうか？」

「そう、夢ですよ。もう、奇跡的なことを求めてはいけません。あなたの身体がこの世界に馴染んできたなら、僕があなたを叔父さんのところにお連れします。叔父さんと将来のことを相談してください」

賢は江川を3日間奥秋山郷の家に滞在させ、空中飛行で松本まで送り、そこから飛行機で叔父の家に送り届けた。江川に不安定な状態を起こさせないように、テレポーテーションは使わなかった。

賢は今世で遭遇した、憎悪や嫉妬の念に駆られて生きている人たちの意識を正の方向に大きく引き戻す作業を始めた。先ず中川恭一から取り組んだ。誤った法華経の呪縛から意識を解放するのは一苦労だった。賢は中川の面前に直接姿を現すことはせず、法華経の教えを、テレパシーを用いて易しく諭した。そして、仏陀の姿をとって繰り返し中川の夢の中に顕現し「人を許し、人を愛する心」を芽生えさせることに成功した。

藤代肇は一層難しかった。藤代には鉄屋のメンバーである事への確信に満ちた信念があり、それを打ち崩すことは至難の業だった。賢は一つのビジョンを創り出した。それは祐子と亜希子の両親の生前の映像と藤代達が企てた両親の殺害計画、それが実行に移されて行く経過を一つのストーリーとして映し出したもので、何度も藤代の脳の記憶域にテレパシーで送りつけた。そして、亜希子と祐子に藤代宛の愛情に満ちた手紙を書いてもらい、それをMTSで青山の家の藤代のベッドの上とダイニングテーブルの上に送り着けた。2ヶ月ほどして一人の紳士が菓子折を手に賢の元を訪れた。

「内観さん、藤代社長があなたにお会いしてご相談したいことがあるとおっしゃっています。大変恐縮ですが、是非お越しいただきたいと思います」

賢は指定された場所で藤代と会った。藤代は言った。

「わたしは東領製作所の社長を退任することにした。今までの事を振り返ると、君にはずいぶん酷い仕打ちをしてしまったと、今更ながら後悔している。到底許すことはできないだろうが、せめて一言詫びさせて欲しい。本当に済まなかった。もう気付いていると思うが……」

「もう、何もおっしゃらないでください。過去など存在しないのですから」

「済まない。身勝手とは思いますが、余生は妻と一緒に海外に移住しようと思い、妻に相談した。しかし、妻は何のことか殆ど理解できず、唯「亜希子、亜希子、お琴の練習の時間ですよ」などと訳の分からないことを口にするだけだ。登喜子の衰弱した頭の中には亜希子の事だけしか残っていないように思えて仕方ない。君に酷い仕打ちをしてきたわたしからは頼みにくいことだが、君の優しさに付け入って、できることなら登喜子の事をお願いしたい」

藤代は深々と頭を下げた。賢が初めて目にする衰えた藤代の姿だった。大根島の由志園で賢に切りつけてきた男については、祐子を伴って半身不随の息子の元にテレポーテーションし、男が息子を訪れ、車椅子を押している間に、病棟の柱の陰に隠れた祐子の超自然的な治癒力で脊髄と腰

骨の修復を行ってしまった。それだけで男のあらゆる人々に対する怨み心や嫉妬心は雲散霧消してしまった。

その後も賢は歪みの残っている何人かとの関係を修復し続け、思い付くあらゆる禍根を消し去った。

3人は外での活動から身を引き、完全に奥秋山郷に蟄居した。食事は空腹になったら食べ、山や野の仕事はしようと思ったときに行った。3人とも常に瞑想状態でいた。しかし、傍から見るとその姿は全く普段の状態と変わらなかった。3人の意識は何時も無限の空間の中にあり、100パーセント自然に身を委ねていた。3人はそれぞれ、自分の核の意志が自然に自分に反映するのを感じていた。3人は意図的に行う超人的な行為には封印をし、自然の中での平凡な生活を営むようになった。しかし、スバハやメルセやムクティが熱を出したり、ひきつけを起こしたりしたときには、祐子の愛の手が嬰兒の額に触れると、あっという間に熱は引き、引きつけは収まった。冬に雪が降り続き、閉ざされた家の中に居て電力不足になった時、賢が暫く太陽の照る日が続いて欲しいと思うと、雪はぴたりと止み、初夏のような強い日差しが差し込んで、屋根の上の雪を溶かし、太陽光発電機能が働き始めた。そして、その後も晴れの日が1週間ほど続いた。意識の中に助けを求める声を感じると賢は自然にその窮状の起きている場所に存在した。そこで人々を危機から救い、また瞑想状態に戻ると、知らない内に元の奥秋山郷の家に戻っていた。亜希子は夜、眠りに落ちた後で霊界を訪問することがしばしばあった。霊界で迷っている魂を導いたり、荒んだ魂をなだめたりした。それらの行為は真夜中に行われ、朝になると安定した眠りから目覚めた。

夏になって梓が利他の弟至福を産んだ。梓が出産して間もなく梓の父がこの世を去った。夏の暑さに室内に居て熱中症に罹り、3日で息を引き取ってしまった。賢がテレポーテーションして梓の父の魂を導いて、迎え人に託し、現象界での葬儀を手助けした。葬儀が済んで一段落すると、梓は子供二人を連れて奥秋山郷に移って来た。

「あなた、利他と至福の教育はどうでしょうか？」

「君が、必要なことを教えてあげればいい。至福にとって、この世界で

は君がいちばんいい先生だよ」

「一般社会から離れて生きてゆくことで問題が生じないかしら？」

「ここでは、小学校も、中学校も、高校も、大学もないから、教育もする必要もないよ。社会はここに住む人たちの作る意識空間が創り出す」梓は黙り込んでしまった。

水原が隣に家を建てて春子と共に引っ越して来た。水原は奥秋山郷に来る前に長野の農家に2週間ほど泊まり込み、茸の栽培を学んできた。森で茸を栽培し、収穫した茸を街で売って生計を立てるつもりだった。春子は、昼間は水原と共に山に入り茸の栽培を手伝った。夜になると毎日のように祐子の元を訪れた。囲炉裏を囲んでの談笑の時間が春子の最も楽しい時間だった。やがて、予てより賢を崇敬していた人たちが1人、また1人と賢の家の周囲に家を建てて生活するようになってきた。移り住んだ人たちは賢達の生活の仕方を手本にして、文明の利器を持ち込むことを控えた。これまで生活を快適で便利にしてくれると思っていた道具類から離れると、かえってそれらの道具が無い方が楽に生きられることを知った。これまで働いて必死に買い求めてきた品物は、自分が思っているほど重要ではないと感じてきた。人々は生きるために絶対に必要になるものなど非常に少ないことに気付いていった。

奥秋山郷には一つのコミュニティが出来た。それは古(いにしえ)の邑より、更に個と個が融合した、家族のような組織であった。家は自分の家であると同時に、他の住民の家でもあった。人々はお互いに集い合い、助け合って生きた。生活用品が十分にあるわけではなかったが、必要なものは全て手に入った。近隣の人が何かを求めていると聞くと、そのものが賢の意識に上がり、それがその人の家であれば良いと賢は思った。その思いが起きると既にそれがその家に現れていた。

メディアが賢達の動きをキャッチし、取材に訪れるようになった。奥まった森林の中の取材に取材班は悪戦苦闘した。取材結果がテレビやインターネットを通して瞬く間に世界中に広がり、現在の政治・経済のあり方に疑問を感じていた多くの人たちが奥秋山郷の邑や諏訪中郷町の実

験サイトを模倣し、新しいタイプのコミュニティや地域生活共同体を造り始めた。そして、それらの共同体では精神性を重視した生活様式が取り入れられていった。

祐子は森の中を歩き、好きな和歌や詩を作り、囲炉裏端に集まっているみんなに時々披露した。祐子の歌は賢の家族のみならず、訪問者達にも好評だった。

「降る雪は あはにな降りそ 秋山の 郷(さと)のともがら 寒からまくに」

「あら、お姉様、このうたもすてきな響きですわね。どんな意味なのかしら？」

「これは万葉のうたを真似たうたよ。意味はね、— 雪よ、そんなに激しく降らないでおくれ、この秋山郷に住もうとして集まってきた人々が寒いでしょうから — そんな意味なのよ」

床に指を立て、琴の演奏の真似ごとをしている亜希子の姿を見て、賢が実際に琴を演奏している亜希子の姿をイメージとして重ねると、一瞬にしてそのイメージが現実化した。賢は琴を前にしてきよろきよろしている亜希子に、「プレゼントだよ」と言った。亜希子は人々が集まり、寛いでいるときに時々琴を披露した。亜希子の琴の音が辺りの空気を振るわせ始めると、人々は会話を止め、琴の音色に聞き入った。

梓はみんなに囲炉裏端での山菜料理を振る舞い、その作り方を教えたり材料の取れる場所を紹介したりした。梓の作る汁物はその都度新しい味がして、訪問者は梓が新作の汁を出してくれるのを楽しみにするようになった。このときとばかりに、水原が茸の生態についての講義をぶったりした。

ある日オープンになっている賢の家の入り口に黄色の大島紬に朱色のショールを掛けた1人の女性が立っていた。雪坂康子だった。賢が微笑みながら康子を歓迎した。

「どうして連絡してくれなかったんだ？」

「わたし、ここで生きることにしました。ここに泊めてください。ずーっと」

「えっ？」

「だって、ここがわたしの生きる家ですもの」

写像 完